

郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
駿東市	養蠶傳習所	郡下全般	四個	一〇〇圓?	一名	高山社卒業 小林長十郎
富原郡	養蠶傳習所	郡下全般	四個	三四〇	五名	高山社卒業 小柳津平次郎
榛原郡	養蠶傳習所	郡下全般	二個	三四〇	五名	競進社卒業 小柳津平次郎
小笠原郡	養蠶傳習所	郡下全般	二個	二〇〇	二名	競進社卒業 笠原國三郎

明治三十五年度

郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
庵原市	養蠶傳習所	郡下全般	一個	四一〇圓	六名	競進社卒業 鈴木正一郎
榛原郡	養蠶傳習所	郡下全般	二個	三〇〇	四名	競進社卒業 鈴木正一郎
小笠原郡	養蠶傳習所	郡下全般	二個	四五〇	三名	競進社卒業 笠原國三郎

明治三十六年度

郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
庵原市	養蠶傳習所	郡下全般	一個	三四〇圓?	三名	競進社卒業 鈴木正一郎
榛原郡	養蠶傳習所	郡下全般	一個	三五〇	四名	競進社卒業 鈴木正一郎
小笠原郡	養蠶傳習所	郡下全般	一個	三五〇	一名	競進社卒業 鈴木正一郎

明治三十七年度

郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
庵原市	養蠶傳習所	郡下全般	一個	???	一名	競進社卒業 鈴木正一郎
榛原郡	養蠶傳習所	郡下全般	一個	???	一名	競進社卒業 鈴木正一郎
小笠原郡	養蠶傳習所	郡下全般	一個	???	一名	競進社卒業 鈴木正一郎

明治三十八年度

郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
庵原市	養蠶傳習所	郡下全般	四個	三一〇圓	四名	高山社卒業 西尾連彦
安倍郡	養蠶傳習所	郡下全般	八個	五七〇	八名	同陽村卒業 桑原健次郎
小笠原郡	養蠶傳習所	郡下全般	一個	三五〇	一名	同陽村卒業 桑原健次郎
周智郡	養蠶傳習所	郡下全般	四個	三四〇	四名	同陽村卒業 桑原健次郎
磐田郡	養蠶傳習所	郡下全般	四三	二二〇	三名	同陽村卒業 桑原健次郎

明治三十九年度

郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
周智		同	三	三〇五	三	高澤野藏
榛原		同		一六五	四	佐野信太郎
安倍		同	八	五九〇	八	藤田新平、古旗安衛、岡南社卒業、高野社卒業、高野社卒業
庵原		郡下全般	二個	?圓	二名	岩野增平、佐野平五

明治四十年度

郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
郡市	傳習所	巡回教授	箇所數	經費	人員數	氏名
周智	奥山養蠶傳習所	同	一	五四〇	二	會野信太郎、川澤口庄一
榛原		同		一二〇	一	瀧浪彌三郎
志太		同	一〇	二四〇	四	岡南社卒業、高野社卒業
安倍		同	八	五七五	八	高野社卒業、高野社卒業、高野社卒業
庵原		郡下全般	四個	三五〇圓	三名	内山野平、海野善吉、山口吉作

蠶業講話會

▲明治十六年、縣費ヲ以テ菊田和平ヲ雇入レ富士郡岩松村養蠶傳習所教師ヲ命シ、同六月傳習事務結了ノ後富士駿東郡下ニ派遣シテ清温育ニ就キ巡回講話ヲ爲サシメタリ。

▲明治十七年、鈴木彌十及土屋眞ヲ縣御用掛ニ採用シタルカ二十一年迄五ヶ年間勤續シ、専ラ養蠶及製絲ニ關スル指導ノ任ニ當ラシメ、又各郡ヲ巡回シテ講話會ヲ開キ大ニ温暖育法一名火助育ヲ唱導シタルカ爲ニ飼育法甚シク進歩シ昔日ノ面目ヲ一新スルニ至レリ。

▲明治二十年、六月農商務省ハ本縣濱名郡伊藤精一ヲ本縣乙部養蠶業巡回教師ニ任命派遣セラレ、十二月二十ヶ所ニ於テ講話會ヲ開催シ養蠶ノ發展ニ努メラル。

郡市	開設町村	開會月日	開設町村	開會月日
賀茂	下田	一一、二八日	崎	一一、一〇日
田方	奈村	一一、一二日	島	一一、一三日
駿東	殿場	一一、一四日	津	一一、一五日
富士	原	一一、一六日	宮	一一、一七日
庵原	興津	一一、一八日	町	
安倍	靜岡	一一、一九日	町	
志太	藤枝	一一、二〇日	町	

引濱	佐井	伊谷	和貴	布地	村	一二、二八	一二、二七	一二、二五	一二、二四	掛川	一二、二二	一二、二一
智田	小見	澤渡	中瀨	瀨村	村	一二、二二	一二、二五	一二、二四	掛川	一二、二二	一二、二一	
周智	山梨	町	掛川	村	町	一二、二二	一二、二五	一二、二四	掛川	一二、二二	一二、二一	
小笠	池新	田波				一二、二二	一二、二五	一二、二四	掛川	一二、二二	一二、二一	
榛原	靜波					一二、二二	一二、二五	一二、二四	掛川	一二、二二	一二、二一	

▲明治二十一年、佐々木長淳翁ヲ聘シ沼津、静岡、見付ノ三ヶ所ニ於テ各一日間蠶業講話會ヲ開催シ、之カ筆記ヲ印刷シテ縣下當業者ニ配付セリ。

會場	開會月日	聽講者數	會場	開會月日	聽講者數
沼津淺間神社	二月一七日	八〇名	見付第二報德館	二月二一日	三五〇名
静岡寶台寺	二、一九	一〇〇			

▲明治二十六年、十二月農商省技手松永伍作ヲ聘シ左ノ通講話會ヲ開催セリ。

郡市	會場	開會月日	聽講者數	郡市	會場	開會月日	聽講者數
田方	田中劇場	二月八日	一四〇名	榛原	各地巡回	一月二日	八〇名
駿東	沼津公會堂	一月九日	一八〇	小笠	同	一月六日	一〇、八〇
賀茂	大宮劇場	一月〇日	一〇〇	庵原	同	一月七日	三〇〇
	與津清光寺	一月〇、一二	一五〇				

▲明治二十九年、群馬縣高山社長町田菊次郎ヲ聘シ左記ノ箇所ニ於テ一週間講話會ヲ開催セリ。

蠶業講習會

▲女子蠶業講話會、明治四十一年一月農商務省令第一號蠶病豫防吏員檢定試驗規則發布ニ付、縣ニテ女子蠶病豫防吏員養成ノ目的ニ依リ四十二ノ兩年度ニ於テ女子蠶業講習會ヲ開設セリ。

講習生募集規定

- 一、蠶業講習會ハ静岡市ニ開設ス
- 一、講習生志願者定員二十名ヲ超過シタルトキハ選抜試験ヲ行ヒ優等者ヨリ順次入學ヲ許可ス試験ノ施行ヲ要スルトキハ其場所及期日ハ更ニ之ヲ通知ス
- 一、講習期間ハ本年四月一日ヨリ五月三十一日ニ至ルニケ月間トス
- 一、講習生ノ費用ハ自辨トス但シ講習料ヲ徴收セス
- 一、講習科目ハ 一、學科、養蠶法、蠶体生理、蠶体病理、顯鏡微使用法、理化大意、作文、算術、 二、實習、微粒子検査
- 一、入學志願者ハ左ノ資格ヲ有スルモノニ限ル

Table with columns for residence (住所), year (年), name (氏名), and title (職名). It lists various individuals and their affiliations across different regions like 賀茂郡, 駿東郡, 富士郡, 静岡市, 磐田郡, 磐原郡, 安倍郡, 同郡, 同郡, 同郡, 同郡, 同郡.

修了者氏名

Table with columns for residence (住所), year (年), name (氏名), and title (職名). It lists individuals like 倉田さきや, 倉田きさき, 稲葉きさき, 後藤やき, 高野のぶすく, 鈴木みさを, 鈴木たかを, 鈴木みさを, 鈴木たかを, 鈴木みさを, 鈴木たかを, 鈴木みさを, 鈴木たかを, 鈴木みさを, 鈴木たかを, 鈴木みさを, 鈴木たかを.

第五項養蠶ニ關スル事項 蠶業講習會
一、満十七歳以上ノ女子ニシテ養蠶ニ經驗アル者
一、高等小學校卒業者ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者
二、品行方正、身体強壯ニシテ傳染性疾患ナク且ツ視力ニ妨ケナキ者
一、講習中家事ニ係累ナキ者
一、將來蠶病豫防吏員タルノ志望ヲ有スル者
一、三月二十五日迄ニ入學許可ノ通知ナキ者ハ入學資格ナキ者トス
一、入學ノ許可ヲ得タル者ハ四月一日午前八時迄ニ會場ニ出頭シ許可書ト共ニ宿所届チ差出スヘシ
一、講習生ニシテ怠惰又ハ不品行ニシテ成業ノ見込ナキ者ハ退學ヲ命ス
一、講習ヲ終了シタルトキハ試験ノ上修業證ヲ授與ス

講師氏名

磐田郡 笠西村	山 村	濱名郡 新所村	加 藤
濱名郡 白須賀町	高 田	濱名郡 氣賀町	加 藤
同 濱松町	杉 浦	同 同	高 村
磐田郡 袋井町	不 破	駿東郡 小泉村	高 村
			高 村
			高 村
			高 村
			高 村
			高 村
			高 村

▲夏秋蠶講習會、夏秋蠶飼育法並蠶業上ノ智識ヲ普及セシムル目的ヲ以テ、縣事業トシテ明治四十三年度ヨリ夏秋蠶講習會ヲ開催セリ其成績左ノ如シ。

△明治四十三年度、同四十四年二月五日ヨリ同二十五日ニ至ル二十一日間静岡市安倍郡公會堂内ニ於テ開催ス、講習科目並各講師左ノ如シ。

科 目	講 師
夏秋蠶飼育法及、蠶種製造論	東京蠶業講習所 技師 横 田 長 太 郎
桑 樹 栽 培 法	同 同 技師 横 田 長 太 郎
蠶 病 防 理 論	同 同 技師 岩 井 啓 作 郎
蠶 絲 業 豫 防 法	同 同 技師 阿 部 保 平 郎
蠶 體 生 業 統 理 論	同 同 技師 渡 邊 亥 太 郎
蠶 病 消 毒 論	同 同 技師 太 田 兵 太 郎
桑 樹 病 害 一 般 論	同 同 技師 飯 島 善 太 郎
法 制 一 般 論	同 同 技師 金 子 善 太 郎
農 事 試 驗 場 技 術 官	同 同 技師 舟 橋 雅 一 郎

講習生總員ハ百八十六名ニシテ内修了證書ヲ授與セルモノ百五十七名ニ達シテ其大部分ハ蠶種製造者、養蠶者並、蠶病豫陰吏員等也、今之ヲ郡市別ニ表示スレハ左ノ如シ。

郡 市	男 修 了 名	女 修 了 名	計 數
賀 茂	七	一	八
田 方	五	一	六
駿 東	二	一	三
富 士	一	一	二
庵 原	一	一	二
安 倍	一	一	二
靜 岡	六	一	七
志 太	一	一	二
郡 市 合 計	一三	一	一四

△明治四十四年度、四十五年一月十六日ヨリ同二十日ニ至ル五日間、在濱松市静岡縣蠶業取締所濱松支所内ニ於テ開催セリ、講習科目並講師左ノ如シ。

科 目	講 師
頁 秋 蠶 論	東京蠶業講習所 技師 十 時 雄 次 郎
蠶絲業法及蠶絲業統計論	静岡縣 技師 渡 邊 亥 郎

講習生ハ總員百九十五名ニシテ内男百七十四名女二十一名ナリ、之ヲ郡市並職業別ニ示セハ左ノ如シ。

郡市	蠶種製造者	養蠶者	團體役員	學校職員	現舊吏員	計
郡						
市						
東	1	3	1	1	1	1
倍	1	3	1	1	1	1
岡	1	3	1	1	1	1
太	1	3	1	1	1	1
原	1	3	1	1	1	1
笠	1	3	1	1	1	1
智	1	3	1	1	1	1
田	1	3	1	1	1	1
名	1	3	1	1	1	1
濱	1	3	1	1	1	1
市	1	3	1	1	1	1
松	1	3	1	1	1	1
濱	1	3	1	1	1	1
濱	1	3	1	1	1	1
引	1	3	1	1	1	1
合	33	69	6	1	86	195

▲巡查教習所講習、蠶病豫防ノ取締上巡查ヲシテ法規並蠶病ノ一班ヲ知ラシムル必要ニ依リ、明治四十年以來巡查教習所ニ於テ科外講習ヲナシタリ、講師左ノ如シ。

年次	官職	氏名	年次	官職	氏名
明治四十年	技師	生方五郎	明治四十年	技師	太田兵太郎
明治四十一年	同	渡邊亥八	明治四十一年	同	小林衛
明治四十二年	同	飯島善太郎	明治四十二年	同	小林衛

蠶絲業大會

明治四十一年十月二十八日大日本製絲會静岡支會ノ發會式舉行前、午前十一時縣會議事堂前庭ニ於テ舉行會長寺尾昌太郎議長席ニ着キ左ノ議案ヲ可決セリ。

- 一、蠶種ヲ改良シ種類ノ一定ヲ圖ルハ目下ノ急務ト認ム依テ本縣農事試驗場及蠶業學校農學校等ニ囑託シテ善良ナル種類ヲ選擇シ以テ原々種ナルモノヲ製造シ各蠶種製造者ニ無代配付セラレムコトヲ本縣知事ニ申請ノコト
 - 二、方今各地ニ行ハル、放任育或ハ安樂飼ハ世評區々ニシテ利害一定セサルノ憾アリ故ニ是ガ調査研究ハ目下ノ必要ト認ムルニ依リ右其筋ヘ申請スルコト
 - 三、蠶病豫防實施ヲ圖ル爲一般養蠶家ニ對シ蠶蛆及病蠶收容器ヲ造リ各蠶室ニ備付セシムルノ制裁ヲ設ケンコトヲ本縣知事ニ申請スルコト
 - 四、縣下製絲業改良發展ノ爲專門技師聘請ヲ本縣廳農務課ヲ經テ知事ニ申請スルコト
 - 五、工女養成獎勵ノ爲縣費内ヨリ組合ヘ獎勵金下付ヲ申請スルコト
- 以上五項トモ來年四十二年度ヨリ實行ノ事ニ決ス

蠶絲業ニ關スル諭告

▲蠶業獎勵、明治四十一年六月三日畏クモ 皇后陛下ハ東京蠶業講習所ヘ行啓アラセラレ、斯業獎勵ノ令旨ヲ賜ハリ、且ツ農商務大臣ヨリ別項ノ如ク訓示相成リタルニ付、知事ハ各郡市役所ヘ左ノ訓示ヲ發シ併セテ一般蠶絲業者ニ對スル斯業獎勵ノ諭告アリタリ。

郡市役所

皇后陛下深く蠶業ニ軫念アラセ給セ六月三日親シク東京蠶業講習所ニ臨マセラレ優渥ナル 令旨ヲ農商務大臣ニ賜ハル洵ニ恐懼感激ノ至リニ堪ヘス 惟フニ我邦蠶桑ノ業ハ遠ク 皇祖ノ宏謨ニ起リ 列聖ノ紹述ニ進ミ明治維新ノ後ニ至リ 今上皇后兩陛下宸慮宏遠厚ク斯業ヲ獎勵シタマヒタルニ因リ益々發達シ民衆洽ク 聖澤ニ浴シ今ヤ經濟ノ消長亦斯業ニ繫レリ然ルニ蠶桑ノ業タル氣候風土ノ差及自然ノ障害等ニ對シ研究ヲ要スルモノ尙尠ナカラス且ツ各國産業ノ發達及内外經濟ノ共通ニ伴ヒ製品ノ精良齊一其他斯業經營上改善ヲ要スルモノ亦甚タ多シ故ニ克ク此意ヲ體シ各當業者ヲシテ黽勉術ヲ習ヒ熱誠業ニ從ヒ國連ノ隆昌ヲ加ヘシメ以テ宏遠ナル 懿旨ニ副ヒ奉ラムコトヲ期スヘシ

静岡縣諭告第二號 我國養蠶機械ノ業ハ遠ク昔ヨリ開ケ國民亦重キ家業ノ一トセリ近クハ明治ノ 御代ニ至リ殊ニ 皇室ニ於カセラレテハ一層斯業ノ獎勵ニ深ク 思召ヲ垂レサセ給ヒ爲ニ栽桑育蠶ノ業絹織物ノ妙技ハ日ト共ニ進ミ從テ外國ニ輸出スル品量モ多大トナリ今ヤ斯業ノ盛衰ハ國家經濟ノ消長ニ至大ノ影響ヲ及ホスマテニ發達セシカ尙 皇后陛下ニハ厚ク 御心ヲ注カセラレ 畏クモ去ルル三日東京蠶業講習所ニ臨マセラレ生絲ハ御國産中其最モ重ナルモノナレハ一同勉勵益斯業ノ發達ヲ計ラムコトヲ望ムト仰セ出サレタリ臣民ノ身ニ探リテハ誠ニ恐レ多キコトニシテ只管感激ノ外ナキ次第ナリ蠶桑ノ業ハ國家財政ノ重要物産ナルノミナラス各國産業ノ發達ニ伴ハレ外國ノ市場ニ於テハ其精粗優劣ヲ競フノ時期ニアレハ之カ業務ニ從事スル者ハ製品ノ齊一ニ桑園ノ栽培ニ蠶兒ノ飼育等ニ於テ改善ス可キ事柄ハ熱誠ヲ以テ研究シ益々國産ノ精撰ト増加トヲ圖リ勉メ勵ミテ厚キ 御心ニ副ヒ鴻恩ニ報イ奉ラムコトヲ期ス可シ

皇后陛下御言葉乃大意

此の蠶業講習所は今日初めて一覽せしに養蠶製絲のことにつきあらゆる方法を研究講習し其卒業生を各府縣に送りて傳習せしむること總て能く整ひ居る様に見受け喜はしきことなり申すまでもなきことながら生絲は御國産中其最も重なるものなれば一同勉勵益々斯業發達を計らむことを望む 右の趣農商務大臣より皆々へ申傳へありたし。

農商務大臣訓示

北海道廳長官、 府縣知事

皇后陛下深く蠶業ニ軫念シタマヒ親シク東京蠶業講習所ニ臨マセラレ優渥ナル 令旨ヲタマフ本官洵ニ恐懼感激ノ至リニ堪ヘス 惟フニ我邦蠶桑ノ業ハ遠ク 皇祖ノ宏謨ニ起リ 列聖ノ紹述ニ進ミ明治維新ノ後ニ至リ 今上皇后兩陛下宸慮宏遠厚ク斯業ヲ獎勵シタマヒタルニ因リ益々大ニ發達シ民衆洽ク 聖澤ニ浴シ今ヤ經濟ノ消長亦斯業ニ繫ケリ然ルニ蠶桑ノ業タル氣候風土ノ差及自然ノ障害等ニ對シ研究ヲ要スルモノ尙尠ナカラス且ツ各國産業ノ發達及内外經濟ノ共通ニ伴ヒ製品ノ精良齊一其他斯業經營上改善ヲ要スルモノ亦甚タ多シ而シテ絹織物ノ業ニ至テハ之ヲ諸外國ニ比スルニ尙遜色アルヲ免レス機械ヲ

精巧ニシ輸出ヲ振作スルハ亦喫緊ノ事項ニ屬ス地方長官克ク此意ヲ體シ各當業者ヲシテ黽勉術ヲ習ヒ熱誠業ニ從ヒ國運ノ隆昌ヲ加ヘシメ以テ宏遠ナル 懿旨ニ副ヒ奉ラムコトヲ望ム
右訓示ス

明治四十一年六月四日

農商務大臣 松岡康毅

▲蠶蛆取締、本縣蠶業ノ現況ハ逐年長足ノ進歩ヲ爲シ其狀慶スヘキモ之カ進歩ヲ阻礙スヘキ各種ノ病害又尠ナカラス就中蠶蛆ノ害ハ年ヲ加ヘ益々多キヲ致シ斯業ニ及ホス損害尠ナカラス今ニシテ之カ驅除豫防法ヲ講セス自然ニ放任センカ害毒益々猖獗ヲ極メ其慘狀豫想外ニ出ルノ不幸ヲ見ルニ至ルヘシ茲ニ於テ農商務省訓令蠶蛆驅除豫防方法ニ基キ明治三十四年五月二十七日蠶蛆驅除規則ヲ發布シ同時ニ左ノ諭告ヲ公布セリ。

静岡縣諭告第二號

蠶絲業者ノ最モ恐ルヘキハ微粒子病及蠶蛆病ニシテ微粒子病ニ在リテハ既ニ既ニ既ニ検査法ヲ施行セラレ之ヲ驅除スルノ方法アリト雖蠶蛆ニ在リテハ未タ驅除法ノ制定ナク斯業ノ盛大ナ極ムルト同時ニ該蛆ノ蔓延甚シキヲ致シ殊ニ本縣ノ如キハ其被害尠ナカラス是レ今般縣令ヲ布キ驅除ヲ勵行スル所以ナリ今左ニ蠶蛆經過ノ概略及驅除法ヲ掲ケ參考ニ供スヘシ蛆ノ經過タルヤ四五月ノ交土中ニ蠶居シタル蛹ハ羽化シテ蛆トナリ日光ノ照射乏シク空氣ノ流通惡シキ桑園ナ飛翔シ桑葉ノ裏面ニ産卵ス而シテ蠶兒ハ桑葉ト共ニ蛆卵ヲ腹下シ胃中ニ於テ孵化シタル蛆幼ハ神經球内ニ喰込ミ後蠶ノ氣門ニ移リ漸ク發育スルトキハ蠶繭ヲ破リテ出テ再ヒ土中ニ入り蛹トナリテ越年スルモノナリ一定ノ蛆蠶ハ千有餘個ノ産卵ヲ爲スモノニシテ各桑葉ニ一粒乃至三粒ヲ産付スルモノナルカ故ニ其被害ノ大ナル想フヘシ

蠶蛆驅除法ノ概要左ノ如シ。

- 第一、蠶蛆ハ光線空氣ノ流通惡シキ桑園ニ産卵スルコト多キカ故ニ新ニ桑園ヲ仕立ルモノノハ五六月ノ頃風位ヲ察シテ桑ヲ植栽スルヲ要ス又晩生桑ト早生桑トヲ交互ニ一畦ツ、植付ケ早生桑ヲ刈取リタル後ハ自ラ空氣ノ流通宜シキニ至ル機仕立ツルヲ要ス 第二、蠶室又ハ居室近隣ニ植栽シタル桑葉ハ可成蠶兒四眠以前ニ給與スル様注意スヘシ 第三、五六月頃桑園ニ於テ蠶、尺蠖、野蠶等ヲ目撃シタルトキハ直ニ之ヲ捕殺スヘシ 第四、蠶兒四五齡ニ至リ斃蠶アリタルトキハ直ニ之ニ熱湯ヲ注キ若ハ之ヲ燒殺スヘシ 第五、蠶蛆ノ寄生シタルモノハ結繭スルモ往々薄皮繭或ハ死籠繭トナルモノ多ケレハ之等ノ繭ハ直ニ殺蛹スヘシ 第六、蠶蛆ハ蠶兒上簇後十二三日ノ頃出繭スルモノナレハ這ヒ出テタル蛆ヲ發見シタルトキハ必ス之ヲ捕殺スヘシ 第七、製絲用繭ハ可成收繭後二三日中ニ殺蛹シ生繭ハ可成運搬セサル様注意スヘシ 第八、養蠶者生絲製造者蠶繭取扱者ハ繭架ノ下層ニ布帛或ハ強靱ナル紙等ノ受幕ヲ張り幕ノ中央ニ孔ヲ穿テ漏斗ヲ附シ其先端ヲ桶或ハ瓶内ニ挿入シ蠶蛆ノ之ニ陥落スル裝置ヲ爲スヘシ 第九、生繭ヲ聚散或ハ保存スル室内ニ罅隙アルトキハ目張其他ノ方法ヲ以テ蠶蛆ノ散逸ヲ防グヘシ 第十、生繭ヲ運搬スル容器ハ緻密ナル綿布麻布其他蠶蛆ノ逃竄セサル材料ヲ以テ製作シタルモノヲ用フヘシ 第十一、捕獲シタル蠶蛆ハ燒殺其他ノ方法ヲ以テ殺盡スヘシ。

蠶蛆驅除規則

- 第一條 蠶業ニ従事スル者ハ其取扱ヘル蠶繭ヨリ發生シタル蠶蛆ヲ發見シタルトキハ必ス之ヲ殺盡スヘシ
- 第二條 生繭運搬ニ使用スル容器ハ綿布麻布其他蠶蛆ノ逸出ヲ防グニ足ル材料ヲ以テ製作シタルモノタルコトヲ要ス
- 第三條 蠶絲業ニ従事スル者ハ繭置場ノ床面ニ蠶蛆ノ逸出スヘキ罅隙ヲ存スルコトヲ得ス
- 第四條 知事ハ官吏々員ヲ派遣シ蠶絲業ニ従事スルモノニ就キ蠶蛆驅除ノ實況ヲ監檢セシムルコトアルヘシ此場合ニ於テ當業者ハ其臨檢ヲ拒ムコトヲ得ス

附 則

第五條 第一條第二條第三條第四條ノ規定ニ違背シタル者ハ科料ニ處ス
第六條 本規則ニ於テ蠶絲業ニ従事スル者ト稱スルハ養蠶者蠶種製造者製絲業者蠶繭賣買商等總テ蠶繭ヲ取扱フ者ヲ云フ
第一條 本規則ハ明治三十四年六月一日ヨリ施行ス

▲養蠶訓諭 明治三十九年ヨリ四十年ニ亘リテ絲價未曾有ノ好況ヲ呈シ生絲百斤ノ價格千參百圓以上ヲ呼

フニ至レリ、從テ此好期ニ乗シ、養蠶家カ多量ノ蠶量ヲ掃立テ、失敗ヲ醸スヲ虞ヒ、同四十年四月十九日左ノ諭告ヲ發シテ一般當業者ノ注意ヲ促セリ。

静岡縣諭告第二號

現時ノ生絲市場ハ稀有ノ好況ニシテ和百斤ニ付于三百六七十圓即チ一圓ニ付生絲十二匁内外ノ賣買ヲ續行シ尙市場在荷拂底ヲ告ケルニヨリ價格愈々昂騰ノ兆アリ從テ各養蠶家ハ唯利ヲ見ルニ急ナルノ極自己ノ有スル桑園勞力器具等ノ權衡ヲ顧ミス違ニ蠶種掃立枚數ヲ増加シ之カ供給ヲ仰カントシテ蠶種製造者ニ強請スルモノ頻々タルノ現況ヲ呈スルニ至レリ如此ニシテ用意ノ周到ナクカンカ壯蠶期ニ至リテ蠶室蠶具ノ不足ヲ告ケ勞力ノ過少ハ不長ヲ來シ就中桑葉ノ不足ハ其價格ヲ暴騰セシメ幸ニ豊大ノ美爾ヲ收ムルモ遂ニ收支不償ニ陥リ甚シキハ家資蕩盡ノ悲境ニ陥ルモノナキヤヲ保スヘカラス當業者宜シク此際ニ於テ慎重ノ態度ヲ以テ諸般ノ設備ニ鑑ミ更ニ集約的方針ヲ以テ健全ノ蠶種ヲ選ミ蠶室蠶具ニ比例シ飼育ノ圓滿ヲ謀リ不慮ノ損害ヲ蒙ラサルヲ期スヘシ。

蠶絲業諮問會

明治四十年四月四日縣下ノ當業者三十三名ヲ縣廳ニ招集シテ蠶絲業諮問會ヲ開會セリ。

諮問事項 一、一般養蠶者ナシテ遺憾ナク蠶蛆ノ豫防驅除ヲ實行セシムル方法如何 二、蠶病消毒ヲ勵行セシムル方法ヲ問フ 三、蠶業教育ノ普及ヲ計ル手段如何 四、近時夏秋蠶ノ旺盛ニ赴クト共ニ桑園ノ荒廢激甚ヲ加フ依テ目下ノ狀況ニ鑑ミタル改良意見及桑園ノ増殖方法ヲ問フ 五、座繰製絲ノ改良方針如何 六、繭ノ若振キ矯正チ一層有利ナラシムル方法如何 七、産業組合設置獎勵方法如何

蠶室品評會

小笠郡蠶絲業組合主催第一回蠶室品評會ハ、四十四年夏季ニ於テ審査長渡邊技師審査員太田技手以下ニ依リテ審査ヲ遂ケ、翌四十五年二月褒賞授與式ヲ舉行セリ、之カ開催ノ目的ハ從來居室兼用蠶室ニ對シ、極

メテ少額ノ經費ノ下ニ壁又ハ雨戸及氣窓等育蠶ニ適スル様改造セシメ、以テ養蠶ノ豊作ト收繭ノ品質ヲ善美ナラシムルニ在リテ、一般養蠶者ニ好影響ヲ與ヘ豫期以上ノ効果ヲ舉ケタルハ斯界ノ爲喜フヘキ現象ナリ、其成績概要左ノ如シ。

町村數	一等	二等	三等	四等	外	計
三四	二	六	一七	三七	九五	一五七
出品點數	二	三	四	等	等	等
受賞者	受賞者	受賞者	受賞者	受賞者	受賞者	受賞者

等級	住所	氏名	等級	住所	氏名
一等	池新田村	神谷嘉吉	二等	池新田村	澤瀨三平
一等	佐倉村	水野清六	二等	大淵村	大石忠平
二等	同	水野十次郎	二等	千濱村	赤堀權平
二等	賀茂村	清水榮太郎	二等	原谷村	鈴木常太郎

備考 三等以下省略

審査長並審査員

審査長 渡邊 亥八 審査員 太田兵太郎 同 内田新次郎
同 有賀啓次郎 同 稻垣喜平 同 伊藤逸司

規則

◎第五項養蠶ニ關スル事項 蠶室品評會

◎第五項養蠶ニ關スル事項 繭質調査會

- 第一條 本會ハ蠶室ノ改良ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ第一回小笠郡蠶毛品評會ト稱ス
- 第三條 本會ハ小笠郡蠶絲業組合ノ開催トス
- 第四條 出品蠶室ハ一人一ヶ所トシ其年春蠶飼育ニ充ツルモノニ限ルモノトス
- 第五條 蠶種製造者ノ飼育室又ハ養蠶者ノ特ニ蠶室專用トシテ建築シタルモノハ出品スルコトヲ得ス
- 第六條 出品人ハ第一號樣式ノ出品申告書ヲ四月三十日迄ニ町村農會又ハ町村委員ヲ經テ組合ヘ差出スモノトス
- 第七條 出品人ハ左ノ標札ヲ門戸ノ見易キ箇所ニ掲ケ置クヘシ標札ハ
- 第八條 審査長審査員ハ本縣知事ニ其派遣ヲ請フモノトス
- 第九條 審査ハ五月中ニ於テ之ヲ行フ
- 第十條 審査終了シタルトキハ等級ヲ定メ褒賞ヲ授與ス
- 第十一條 出品人ハ審査ヲ拒ミ又ハ再審査ヲ請ヒ授與ノ褒賞ヲ拒ミ若ハ審査ノ決定ニ對シ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス
- 第十二條 本會ハ郡下蠶室ノ改良上功勞顯著ナル者ニ功勞賞又ハ追賞ヲ爲スコトアルヘシ
- 第十三條 褒賞授與式ノ期日會場等ハ追テ之ヲ定ム
- 第十四條 本規則ニ改正増補ノ必要ヲ生シタルトキハ本組合常議員會ノ決議ヲ以テ加除修正スルコトヲ得樣式

繭質調査會

明治四十三年九月十三日午前十時縣會議事堂ニ於テ開會、協議ニ先タチ石原知事ヨリ大要左ノ訓示アリタリ。

今回諸君ノ會同ヲ乞ヒタル所以ノモノハ縣下ノ種繭雜駁ナル方爲種々ノ弊害又ハ不結果ヲ來スト雖今蠶ニ之ヲ統一スルハ至難ノ業ナルカ一定ノ時期迄ハ是方改良ヲ爲スル必要アルヘシ現ニ政府ニ於テモ蠶種統一ノ計畫アリ其他各府縣モ從來是ヲ實行シツ、アリテ効果著シ

キモノアリ本縣ノ蠶種モ漸次改良ノ途ニ向ヒタルカ如クナレトモ未ダ此儘ニ放置スル能ハス故ニ縣ハ既ニ主任者ヲシテ具體的ノ調査ヲサシメタルモノアレハ詳細ナル説明ヲ與ヘ更ニ諸君ノ意見ニ依リテ一定ノ方針ヲ樹テ以テ繭質統一ヲ期セントス仍テ各遺憾ナク意見ヲ述ヘ充分研究ヲ遂クラレンコトヲ茲ニ諸君ノ來會ヲ促シタル次第ナリ

次テ協議會ニ移リ左ノ事項ヲ協議セリ。

- 一、繭ノ形狀ハ如何ニ一定スヘキヤ
- 二、統一ノ方法如何

右ニ就キ渡邊技師ハ新瀉、長野、群馬、滋賀及東京蠶業講習所、本縣農事試驗場、濱名郡立蠶業學校等ニ於ケル繭ノ標準ヲ詳細ニ説明シ、次テ阿部農事試驗場技手、小島濱名蠶業學校教諭ハ、試驗場又ハ學校ニ於ケル種類試驗成績ヲ説述シ、縣下ニ適合スヘキ繭ノ標準ヲ示サレタリ、斯クテ質問又ハ意見等續出シタルカ結局左ノ如ク決定シテ午後三時閉會セリ。

- 一、繭ノ標準ハ長サ約一寸一分幅約五分トシ縱目淺キモノトス。
 - 二、縣ニ於テ原蠶種製造ノ施設ニ着手セラレムコト。
- 外ニ希望トシテ官民合同ノ繭質調査會ヲ年々開カレタキコト。

然シテ此協議會ノ出席者ハ左ノ如シ。

内務部	長	小島源三郎	生絲製造同業組合評議員	河島新兵衛	
蠶絲業組合	取締所長	寺尼昌太郎	評議員	久保田福次郎	
同	常議員	岡部竹次郎	同	評議員	五十嵐政助
同	常議員	岡宮清左衛門	同	評議員	林才一郎
生絲製造同業組合	副組長	井出源策	同	評議員	佐藤彌七

生絲製造同業組合評議員	波邊喜兵衛	蠶病豫防事務所主事	田地川兵三郎
縣技師	渡邊亥八	蠶病豫防事務所主事	黒田龜次郎
蠶種同業組合長	石川勘三郎	三島鏡檢所首席	村井才次郎
副組長	岡長吉	蠶病豫防事務所主事	伊藤誠太郎
評議員	戸倉惣兵衛	蠶病豫防事務所主事	内田新次郎
評議員	結川熊重	蠶病豫防事務所	鈴木多三郎
大日本蠶絲會静岡支會副會長	依田佐二平	奥山支所首席	山田誠一郎
縣技師	太田兵太郎	蠶病豫防事務所主事	鈴木勝太郎
縣農會技師	菅正雄	吉津支所首席	熊岡保
農事試驗場場長	狩野辰男	白須賀支所首席	榎谷鹿藏
濱名郡立蠶業學校教諭	小島道次	富士郡農林學校教諭	前田謙
縣技師	飯島善太郎	安倍郡蠶絲業組合技師	池田國太郎
農事試驗場技師	阿部保太郎	磐田郡蠶絲業組合技師	足立孫三
同技師	金子保	引佐蠶業技師	實藤豊吉
蠶病豫防吏員	岩浪爲治		

條桑育及全芽育ノ起因

磐田郡戸倉惣兵衛ハ從來山梨縣ニ行ハル、櫛飼ニ改良ヲ加ヘ明治三十四年ノ頃放任又ハ安樂飼ト稱シテ先ツ愛知縣ノ三河地方ニ之カ普及ヲ圖リ次テ三十七八年頃ニ至リ磐田、駿東、田方各郡ニ此方法ヲ傳ヘシ

カ、更ニ濱名郡桔川熊重ハ改良安全育ト稱シ又駿東郡小野猪太郎ハ三十九年ヨリ蠶種製造ヲ開始スルト共ニ該法ヲ東駿北豆ニ行ハシメ以テ今日ニ至レリ。全芽育ニアリテハ從來稀ニ此方法ニ依ルモノナキニ非サレトモ漸ク之ヲ爲スニ至レルハ四十年頃ニシテ長野縣上下伊那郡ヨリ教師來リテ各地ニ講話ヲ試ミシカハ、桑葉人夫ノ節約ヲ計ラントスル養蠶者ハ迎合シテ傳播セシムルニ至レリ、今四十四年ニ於ケル右兩種ノ飼育ト普通飼育トノ割合ヲ示セハ左ノ如シ。

郡市	普通育	條桑育	全芽育	郡市	普通育	條桑育	全芽育	郡市	普通育	條桑育	全芽育
賀茂	九六三	〇〇七	〇〇〇	安倍	九九一	〇〇五	〇〇四	周智	八二二	〇〇四	〇〇六
田方	四三七	五五〇	〇〇三	静岡市	一〇〇〇	—	—	磐田	七〇七	二〇六	〇八七
駿東	四九〇	四〇〇	〇〇〇	志太	九九九	〇〇二	—	濱名	七八三	一八七	〇三〇
富士	五〇〇	一四〇	三三〇	榛原	九八〇	〇〇〇	—	引佐	五八〇	二五〇	一七〇
庵原	九五〇	〇〇三	〇四八	小笠	六六〇	〇九二	二二八	計	七七五	一五九	〇六六

五眠蠶ノ發生

賀茂郡稻梓村堀之内吉田源藏ハ明治四十四年八月二十四日、同村土屋榮勇ノ製造ニ係ルニ化性風穴種白飛白蠶量二匁二分ヲ掃立テタルニ、發生若ハ爾後ノ經過ハ最モ良好ニシテ一頭ノ病蠶ヲ認メス、同月二十八日一眠ヲ九月二日二眠ヲ無事ニ經過シ、同十四日四眠ニ際スルヤ遅眠蠶ラシキモノ千餘頭ヲ發生シタレハ

出ツルニ從ヒ拾ヒ取りテ育テツ、アリシモ、之ヲ熟視スレハ其體軀起蠶ト異ナラサルニ依リ試ニ十七頭ヲ飼育セリ、之レ即チ五眠蠶ニシテ四眠ハ既ニ他ノ蠶兒ノ四齡中ニ經過セシモノナリシ就眠中ハ約二十時間第五齡ニ入リテヨリ一日六回ノ給桑ヲ爲シ、約三日間ニテ五眠ニ就キ三十六時間ヲ經テ脱皮セリ、六齡中モ亦一日六回ノ給桑ヲ爲シ六日間ニシテ他ノ蠶兒ヨリ五日間ヲ後レテ上簇シタルカ、繭ハ豊大ニシテ十三顆重量六匁四分ニ達シタリ、發生ノ原因明ナラサレトモ參考ノ爲一般昆蟲類カ其脱皮回数ニ増減ヲ生スル學說ヲ記スレハ左ノ如シ。因ニ此五眠蠶ナルモノハ數年前濱名郡白須賀町ニモ發生シタルコトアリシト云フ。

- 一、溫度ノ關係 溫度低キ地ニ飼育セル昆蟲ヲ溫度高キ地ニ飼育スルトキハ脱皮回数ヲ増加ス、印度内地ニ飼育スル「チツサ」蠶ハ四回ノ脱皮ヲ爲スモ銀島ニテハ五回ナリフ。
- 二、營養ノ關係 飼料ノ不良饑餓等ニ依リテ、營養不十分ナル場合ニ於テハ回数ヲ増加スルコト多シ、樟蠶飼育中不注意ニ依リテ飼料ノ給與ヲ怠リ饑餓ヲ感セシメタルトキ五回脱皮セリ。
- 三、雌雄ノ關係 一般ニ雌ハ雄ニ比シ脱皮回数多シ、即チ「ヒメツノケムシ」ハ雌四回雄三回「カキカイカラシム」ハ雌二回雄一回ナリ。

第六項 製絲ニ關スル事項

縣立製絲場

明治十年一月製絲事業獎勵ノ爲地方稅ヲ以テ、静岡水落町勸工所構内ヘ二十五人繰器械製絲ヲ創立ス、此器械工場ト共ニ營業資金三千圓ヲ無利息ノ十五ヶ年賦ニテ吳服町友野與左工門ニ貸與シ、士族ノ子女ヲ集

メテ工女ト爲シ事業ヲ經營セシメタルカ、収支償ハスシテ遂ニ經營者ノ失敗ニ歸シタリ、依テ十三年一月之ヲ解約シテ更ニ吳服町二丁目鈴木大治ニ器械工場一切ヲ無償ニテ貸與シ、事業ヲ繼續セシメタリシモ、是レ又尠ナカラサル損失ヲ招キシカハ、遂ニ全ク經營ノ途立タサルニ至レルヲ以テ十五六年頃止ムナク之ヲ廢止セリ、然レトモ之ト相前後シテ個人ノ經營ハ續出シ十二年ニ於ケル器械製絲場十人繰以上ノモノ左ノ八ヶ所ニ達シタリ。

製絲場位置	名	稱	場	主	起	業	釜	數	動	力	絲壹ヶ年
賀茂郡大澤	松崎	製絲場	依田	佐二平	明治九年	九	四〇	釜	蒸	汽	二八匁?
田方郡葦山	葦山	製絲會社	宇野	範右衛門	〇	二五	同	蒸	汽	及水	五〇
静岡水落町	静岡縣勸工所	製絲場	友野	與左衛門	〇	四	手	回			一七
敷知郡濱松紺屋町	太田	製絲場	太田	勇五郎	〇	二〇	同				九
同	同	同	同	同	〇	二〇	同				三六
同	濱松高町	田代	製絲場	田代	道直	〇	四〇	同			一一
同	濱松今器	中澤	製絲場	中澤	勘	〇	四〇	同			一一
同	豊田郡中瀬	木下	製絲場	木下	茂作	〇	一〇	同			三〇

絲價騰貴ニ就キ論達

明治十二年六月、勸農局長ヨリ報導サレタルニ付輸達左ノ如シ。

本年伊佛兩國氣候不順ニシテ養蠶不佳ノ趣電報追次相達横濱迄モ生絲騰貴ノ形勢ニ相聞エ候旨勸農局長ヨリ報道有之候條養蠶ハ勿論生絲

◎第六項製絲ニ關スル事項 製絲傳習 製絲講習會

製造一層注意ヲ加ヘ邦家ノ幸福ヲ失ハサル様勉力可致此旨諭達候事

明治十二年六月九日

静岡縣令 大迫 貞清

製 絲 傳 習

明治二十年、座繰製絲普及ノ爲縣ヨリ補助ヲ與ヘ製絲傳習所ノ設置ヲ獎勵シタルニ左記七ヶ所ノ設置ヲ見ルニ至レリ、爾後二十二年頃迄繼續セリ。

傳習所位置	設置者	傳習所位置	設置者
賀茂郡河内村	賀茂郡那賀郡	駿東郡土狩村	永井嘉六郎
田方郡肥田村	小永井治郎兵衛	同郡日守村	長島善右衛門
君澤郡古奈村	石橋正哉	同郡杉名澤村	石橋善正
榛原郡	八木平之助	同郡	小永井治郎兵衛
?			根上林平

製 絲 講 習 會

本縣生絲製造同業組合事業トシテ、明治三十五年ヨリ同三十九年ニ亘リ繰絲短期講習會ヲ縣下各所ニ開催シ、傍工女ニ實習セシメタリ、而シテ同三十六、七ノ兩年度ハ縣ヨリ獎勵費ヲ交付シ東京蠶業講習所町田、三谷兩技手ヲ聘シ一ヶ月宛ノ期間トシ左記町村ニ於テ開催シタリ。

年次	一回	二回	三回	四回	獎勵金交附額
明治三六年	榛原郡金谷町	濱名郡濱松町	小笠郡掛川町	富士郡大宮町	二、〇〇〇圓
三七年	小笠郡大須賀村	庵原郡富士川町	田方郡三島町	濱名郡新所村	二、〇〇〇圓

生絲共同揚簀並荷造所

本縣生絲製造同業組合ハ小規模製絲工場ヲ合シ、共同シテ製品ヲ齊整シ多數一定ノ生絲ヲ荷造リシテ輸出ノ發展ヲ圖ランカ爲、明治三十八年以降生絲共同揚簀並荷造所ノ設立ヲ企畫シ、縣獎勵ノ下ニ五ヶ所ヲ設置スルニ至レリ、即チ左ノ如シ。

年 度	設置個所	名 稱	種 別	共同工場數	同 釜數	獎勵金交附額
明治三八年	富士郡大宮町	駿 陽 社	揚返及荷造	九	九三二	二、五〇〇圓
三九	同 庵原郡富士川町	同 岩 淵 社	補 足 工 事	七	五二四	一、八七〇
四〇	小笠郡大須賀村	横須賀共同揚返所	揚返及荷造	五	四五〇	二、五六八
四一	濱名郡新所村	濱 名 社	揚返及荷造	一	五七二	二、六八二
四二	賀茂郡下田町	城 南 社	荷 造	八	四三八	四、六〇〇
						三、〇〇〇

因ニ生絲共同揚簀並荷造所獎勵金交附ニ就テハ左ノ命令條件ヲ付セリ。

◎第六項製絲ニ關スル事項 生絲共同揚簀並荷造所

生絲共同揚簍所命令

- 第一條 本獎勵金十圓ヲ其組合ニ交附ス
- 第二條 獎勵金ハ組合員中左記各項ノ一ニ該當スルモノニ限り之ヲ交附スヘシ
 - 一、共同揚簍所ヲ設置シ繰絲及揚返法ヲ一定シ品位検査ニ依リテ等級ヲ分チ束裝及荷造ヲ同一ニシ且ツ一定ノ商標ヲ付シ一ケ年三百個一個凡ソ以上ノ器械生絲ヲ製造スル場合
 - 九貫匁
 - 一、既設ノ共同揚簍所ヲ擴張シ若ハ改善上經費五千圓以上ヲ支出スル場合
- 第三條 其組合ハ左記事項ニ對シ知事ノ認可ヲ受ケタル後ニ非サレハ獎勵金ヲ交附スルヲ得ス
 - 一、共同揚簍所設置ノ場所
 - 一、共同簽數
 - 一、役員及共同者名簿
 - 一、生絲検査員ノ氏名及履歷
 - 一、事業ニ關スル規定及設計
 - 一、經費豫算
- 第四條 知事ハ必要ト認メタルトキハ生絲検査員ノ解任ヲ命シ若ハ指定スルコトアルヘシ
- 第五條 獎勵金ハ共同揚簍ノ設備ヲ了ヘタルトキ及業期末ノ兩度ニ半額ツ、下附シ第二條第二項ノ場合ニ於テハ其設備ヲ了ヘタルトキ全額ヲ下附ス但シ業末期ニ於ケル請求書ニハ製造個數ヲ証明スヘキ書類ヲ添付スヘシ
- 第六條 共同者ノ行為事業ノ設備施行方法若ハ生絲製造個數ハ必要ニ應ジ吏員ヲ派遣シ調査セシムルコトアルヘシ
- 第七條 第三條ノ認可ヲ受ケタル後事項ヲ變更スルトキハ詳細其事由ヲ具シ知事ノ認可ヲ受ケヘシ尙又右事項ニ就テハ知事ハ必要ニ依リ其訂正及變更ヲ命スルコトアルヘシ
- 第八條 前條ノ命令ニ違背シタルトキハ役員ノ改選若ハ事業ノ設備及施行方法ノ變更ヲ命シ或ハ獎勵金交附ノ認可ヲ取消シ又ハ已ニ交附シタル獎勵金ノ幾部若ハ全部ヲ還納セシムルコトアルヘシ
- 第九條 獎勵金ノ交附ヲ受ケタルモノハ事業ノ成績及經費收支決算ヲ事業終了後三十日以内ニ知事ニ報告スヘシ
- 第十條 本命令ニ對シテハ交附ノ日ヨリ五日以内ニ受書ヲ差出スヘシ

製絲ニ關スル諮問

明治四十年十月、本縣知事ヨリ、靜岡縣生絲製造同業組合ニ對シ左ノ事項ヲ諮問セリ。

- 一、諮問事項
 - 一、製絲業ノ改善發展上實施スヘキ事項多クアルヘシト雖最急ニ施設ヲ要スル事項及其方法如何
 - 二、生絲ノ品質其他製絲工程上善其ナル種類ノ一定ヲ望ムヤ切ナリ之ヲ實行スルハ蠶種製造者養蠶者生絲製造者ノ聯絡ニアリト信ス其方法如何
 - 三、縣下一二ヶ所ノ模範工場ヲ設置シ工女ヲ養成シ將來其方法ヲ一般ニ各工場ニ採用セシムルハ必要ナリト信ス其設備並設計方法如何
 - 四、各工場主任工手現業係又ハ見番ノ交際ヲ親密ニシ互ニ意見ヲ交換シ斯業ノ改良發達ニ資シ德義上工女誘拐等ノ弊ヲ一掃スルハ緊要ナリト信ス之カ方法如何
 - 五、蒸殺ト火殺ト優劣及完全ナル乾燥器ノ設備方法如何
- 一、諮問事項答申
 - 第一、目下製絲業ノ改良上最モ急務ナルハ生絲整理所ヲ設グルニアリ本邦ノ製絲ハ雜駁ヲ以テ第一ノ欠点トナシ海外ノ信ヲ惹ク能ハサル所也其理由ハ敢テ一工場ヨリ製産スル絲ノ雜駁ナルニ非ス各工場何レモ小規模ノ經營ニテ海外機業家ノ需ニ應スルニ足ラス止ムヲ得ス輸出業者間相互ニ合議團結ヲナシ辛シテ其數量ヲ充タサシムルカ常也是レ則チ海外顧客ヨリ雜駁ノ譏ヲ免レ能ハサル原因也トス此弊贖ヲ脱スル手段トシテ共同事業ヲ擴張セシムルヨリ捷徑ナルハナク整理ノ方法立タサレハ共同シ能ハサル也茲ニ於テ本縣既ニ見ル所アリシヲ以テ共同揚返模範所ヲ獎勵セラレ又共同荷造模範所ヲ設クル計畫アルヲ聞ク是レ皆縣下生絲整理ノ政策ニ基クモノタルヤ論ヲ俟タス然レトモ日尙淺キニ依リ其効果未ダ全ク顯著ナルニ至ラス且ツ共同事業ノ初步タルニ過キサルナリ他ノ當業者ト雖目前ノ業務ニ馳驅セラレ彼我ノ狀勢ヲ顧ミルニ違アラサルヲ以テ其進運ノ遲々タランコトヲ恐ル此際論達訓示等ヲ以テ縣是ノ大要ヲ示サレ整理ニ緊要ナル感動ヲ與ヘ斯業ノ趨向ヲ指導スルハ急務中ノ急務ナリトス
 - 一、工女ノ精神的教養ヲ成スコト甚タ急務ノ業ニテ若シ是ニ到ラサレハ精良ノ絲ヲ得ル能ハサル也第四問ハ模範工場ノ項ニ屬スルカ故ニ省ク
 - 二、組合ニ製絲技術員ヲ置キ師範トシテ各工場ヲ巡回教導ナサシムルコト之レ也
 - 第二、絲質ヲ改良スルノ要素ハ原種ヲ選擇スルニ在リ然ルニ頻年益々之カ乱雜ヲ加ヘ其種類ノ多キコト枚擧ニ違アララス從テ製絲業者ノ製品ニ不同ヲ生シ來リシカ今ヤ蠶病豫防事務所設備ノ整頓ト共ニ不正不良ノ蠶種其跡ヲ斷チタリト雖種類ニ於テ飼育者ノ希望ハ蠶種製造者ノ意志ト一致セスシテ其選擇ヲ異ニシ未ダ一定ノ方針ニ出テサルカ如シ之カ一定ヲ謀ルハ標準ヲ示スニ如クハナク宜シク縣農事試

◎第六項製絲ニ關スル事項 製絲ニ關スル諸問

驗場又ハ蠶業學校ニ於テ縣下ノ風土ニ適當ナル原種ヲ選抜シテ其飼育ヲ獎勵シ俾成繭ヲ各工場ニ頒布シテ普ク成績ヲ知得セシメ更ニ蠶種製造者ニハ原種ヲ配付シ之ニ準據セシムルニ飼育者ト製絲場トノ聯絡ヲ謀ルヘキ便宜ナル一定ノ方針ヲ建テシメ尙飼育ノ監督上工場ヨリ技術者ヲ派遣セシムルカ如キ手段ヲ採ルニ在リ要スルニ以上ハ相互ノ德義問題ニ止マリ苟モ利害關係ニシテ之ヲ妨グルニ於テハ其効果ノ甚タ乏シキニ終ルハ慨嘆ノ至リ也養蠶、製絲、蠶種家ノ聯絡ヲ破壞スルモノ即チ所謂仲買人ニアリテ存ス蓋仲買ノ弊タルヤ風ニ同業者間ノ一大問題ニ上リシ繭若振ノ如キ進ミテハ蠶兒豫約ノ如キ勢ヒ不正ノ行爲ヲ敢テスルニ至ラシム是レ畢竟仲買者ノ人格低キト資本ノ不足鑑識ノ欠乏等ニヨリ起ルモノニシテ加フルニ其資格ニ制限ナキカ爲昨ハ街衢ニ乾魚蔬菜ヲ行商シタルモノ一朝蠶兒獲ニ上ルニ於テハ先ツ問屋ナルモノニ向テ一日間買收ニ足ル資本ヲ借來リ戸々ニ就テ成繭ヲ買取り薄暮市場ニ出テ競賣シテ其間利益ヲ占ムルモノニテ問屋ハ只雙方ノ口錢ヲ貪ルカ故ニ相互共同シテ竟ニ蠶兒豫約ヲ行フ迄ノ弊害ヲ作成スルニ至ル因テ之カ救濟策ヲ講セサルニ於テハ其餘害更ニ甚シキモノアルニ至ラン則チ以上ノ聯絡ヲ破壞スルハ實ニ是ニ依リテ然リ要スルニ縣下ニテ飼育ニ適スル原種ノ標準ヲ示サル、事仲買人取締規則發布ノ事蠶絲業者相互ノ聯絡ヲ謀リ成績良好ト認ムルモノニハ獎勵方法ヲ設ケル事之レ也

第三、工女養成ヲシテ焦眉ノ急務ト云フヲ得ルハ同業者ノ輿論ニシテ之カ施設ヲ望ムヤ切ナリト雖模範工場ノ如キハ事容易ノ業ニアラズ遂ニ手ヲ束テ今日ニ及ヘル也望ムラクハ農事試驗場又ハ蠶業學校ノ一部ニ模範製絲場ノ設置ヲ仰クハ切ニ希望スル處也然シテ此模範工場ハ教婦ノ養成ヲ主トシ各工場ハ從來ノ方法ニ依リ自己釜數ノ一割ニ相當スル工女ヲシテ養成ノ義務ヲ負ハシメ尙夫レ以外教養ノ餘地アルモノハ更ニ適宜ノ増員ヲ爲スコトヲ得セシメ且ツ組合ヨリ人員ニ應ジテ對一人五圓以上十圓以下ノ獎勵金ヲ下付シ進ンテ縣當局ノ派遣ヲ請ヒテハ其年度内ニ於ケル養成工女ノ試驗ヲ爲シ合格者ハ證書ヲ授與シテ組合原簿ニ登錄シ以テ他日爭奪ノ弊ヲ防グニアリ加フルニ其定員人數ヲ出サ、ル工場ニ對シテハ相當ノ獎勵資金ヲ納付スル責ヲ負ハシムル規約ヲ設ケ又普通工女ヲシテ試驗セル成績ノ優等ナルモノ或ハ從來ノ工女中志望ノ者ニ就テハ組合ヨリ推薦シテ西ヶ原蠶業講習所製絲部ニ入學セシメ學費ノ幾分ハ組合ヨリ補助シタル上尙不足ノ分ハ工場主並本人ノ協定ニ一任セシメ努メテ是カ増加ノ方法ヲ採ルチ可ナリトス明年度ヨリ組合ニ於テ二名ノ教婦ヲ雇ヒ縣下東西二區ニ之ヲ分チテ専ラ工女ノ教養ニ充ツルコト、ナリトス要スルニ模範工場ハ縣ヨリノ設備ヲ待ツ事各工場ニ對シ釜數一割ノ定員工女ヲ教養セシムル規約ヲ勵行スル事教婦二名ヲ雇備スル事之レ也

第四、各工場主任工手現業係又ハ見番ノ交際ヲ親密ニシ互ニ意見ヲ交換シテ斯業ノ改良發達ヲ期スルカ爲毎年五月上旬靜岡縣生絲製造

同業組合事務所ニ於テ同組長ヨリ縣下各製絲所主任現業係一名宛ヲ招集シ斯業ニ關スル諸問案ヲ提出シテ其意見方法ニ付討議協定セシメ以テ相互ノ技術攻究ニ資シ尙各區内便宜ノ地ニ於テ春秋二回主任現業係會ヲ開キ互ニ知識ヲ交換スルコト並工男工女ノ取締上彼等ノ工場籍ヲ本縣生絲製造同業組合事務所へ届出テシメ併セテ工男工女ヲ誘拐ナカラシムル爲縣令ノ發布ヲ請願シ且ツ勵行スルコト之レ也

第五、此項ハ最も必要ナル問題ニシテ而モ從來ノ殺蛹乾繭器中適切ナルモノ少ナキハ斯業ノ爲遺憾トスル所ナリ蒸殺ノ法ハ完全ナル裝置ヲ施セハ火殺ニ優ルヘキモ之カ設備ハ多額ノ金員ヲ要スルチ以テ經濟上困難ナル事實アリサレト火殺法ニ完全ナル裝置ヲ施セハ其成績較テ差異ヲ見ルナシ故ニ廣ク各地ヲ視察シテ長短相講究シ以テ之カ施設ヲ圖ルノ方針ニ出ツルチ要ス但シ縣當局ニ於テモ詳ニ視察ヲ遂ケラレ適當ナルヲ選擇シテ指示セラレタシ完全ナル乾燥器ノ標準トシテ舉グヘキ要件ハ 一、乾燥ニ必要ナル熱ノ補給 二、生繭中ヨリ發散スル濕氣ノ排除 三、排除ニ要スル給氣 四、熱ヲ室内ニ普ク分布スル裝置 五、室内空氣ノ交流ヲ圓滿ナラシメ各部ニ濕氣ヲ停滞セシメサル裝置 六、適當ナル給氣裝置 七、適當ナル排濕裝置等ナリト思考ス

殺蛹乾繭場設置獎勵

蠶蛆ノ驅除豫防上養蠶者ニ於ケル屑繭ノ殺蛹並乾燥ヲ目的トシテ、明治四十年度以降毎年縣ヨリ獎勵金ヲ交附シテ殺蛹乾繭器ヲ設置セシメタリ、其狀況左ノ如シ。

年 度	設 置 者 數	同 個 數	同 金 額	獎 勵 金 交 付 額
明治四〇年	七一名	二七六個	四、八五八圓	一、〇九一圓
四一	四七	二一〇	九、〇二九	一、七〇二
四二	九二	九二	八、五三二	一、七八四
四三	六二	六二	六、三四九	一、二二七

◎第六項製絲ニ關スル事項 殺蛹乾繭場設置獎勵

尙獎勵金交付ノ手續ニ就テハ別ニ規程ナキモ、設置者ニ對シ命令條件ヲ附シテ指令スルモノニシテ明治四十四年度ノ命令書左ノ如シ。

命令書

- 第一條 獎勵金ハ殺蛹乾繭器設置費ニ充ツヘシ
- 第二條 前條ノ事業ハ明治四十四年十二月末日迄ニ於テ之ヲ行フ
- 第三條 乾繭器ヲ設置シタルトキハ速カニ經費明細書圖面ヲ添付シテ差出スヘシ
- 第四條 經費豫算ニ對シ精算額超過スルコトアルモ其超過額ニ對シテハ獎勵金ヲ下付セス
- 第五條 獎勵金ハ竣功検査ノ上之ヲ下付ス若シ精算不當ト認ムルモノアルトキハ査定シ其査定額ニ對シ之ヲ下付ス
- 第六條 本命令ニ違背シ又ハ設計豫算ニ違セサル金額ニテ設置シタルトキハ獎勵金ノ下付ヲ中止シ又ハ減額若ハ返戻セシムルコトアルヘシ

補成工女養成

静岡縣生絲製造同業組合ハ各組合員ノ工女不足ヲ補フ爲、補成工女養成所規程ヲ設ケタリ、明治四十二年度ニ於テ縣ヨリ工女養成費トシテ金千圓ノ補助ヲ受ケ、志太郡相川村及小笠郡大須賀村ニ各三ヶ月間製絲傳習所ヲ開設セシカ、其概況左ノ如シ。

補成工女養成所規程

- 第一條 本組合ハ縣下便宜ノ場所ニ養成所ヲ設置ス
- 第二條 養成所ヘキ工女ハ一期間三十名ヲ養成所募集ノ定員トス
- 第三條 工女募集ノ方法ハ各工場ニ於テ使役スヘキ工女ヲ選擇シ應募契約証ヲ添ハ養成所ニ委託養成スルモノトス但シ募集ノ定員ヲ超過

シタルトキハ次期ニ繰入レ養成スルモノトス

- 第四條 應募セシ工女ハ義務年限ヲ定メ應募契約証ヲ徴シ各工場主ニ保存セシムルモノトス
- 第五條 補成工女養成所ノ組織ハ同業者ノ協議ヲ以テ主任者ヲ定メ所内ヲ總括監督セシメテ其工場ニ附屬シ助教婦一名ヲ附シテ授業セシム
- 第六條 養成期間ハ一期ヲ三ヶ月トシ三期ニ終ルモノトス故ニ第二條ニ掲ケル生徒ノ定員ヲ每期順次ニ養成所ニ入所セシム滿期終了ノ後ハ修業證ヲ附與シ各工場ヨリ養成費ヲ徴收シ生徒ハ其工場ニ歸還セシムルモノトス
- 第七條 組合ヨリ派遣スヘキ教婦ハ適宜巡回習業ノ實況ヲ監査セシムルモノトス
- 第八條 養成所經費支出ハ監督教婦給、火夫給、燃料、寄宿舍費、生徒食費、借家料、機械損料、原料購入費及減損費等ニシテ其收入ハ各工場出資々金第六條ニ掲ケル縣費獎勵金、生産品、賣却組合費其他雜收入等トス

經費

項	目	金額	項	目	金額
教婦一人一ヶ月分俸給		三六〇圓	原料繭百六十二石代		八、二五〇圓
工女食費		一、四四九	借家料、消耗品、旅費、雜費		一、〇二一
燃料		六四八	計		一一、六二八

明治四十二年六月廿日、第一回傳習ヲ相川村ニ開キ九月廿日終了シ、同廿六日第二回ヲ大須賀村ニ開キ十月二十三日終了シタリ、教婦ハ東京蠶業講習所製絲本科卒業生小澤なか子ニシテ、傳習科目ハ製絲法、繭審査法並器械製絲、揚返シ屑物整理ノ實習等ナリトス、而シテ第一回傳習生ハ五十名ニシテ實習成績ハ十日目毎ニ調査シ、開始後一ヶ月間ハ一日十時間ニ對スル織度十「デニール」半ノ品一人平均十匁位ノ繰絲

量ナリシカ、終了期ニ近キテハ平均三十多乃至四十多ヲ繰繰スルニ至リテ技術ノ進歩著シカリシカハ、生徒ノ約半數ハ普通工女ニ劣ラサル好成绩ヲ得タリ、第二回ノ傳習生ハ五十八名ニシテ實習成績ハ第一回ト同様十日目毎ニ調査シ、開始後一ヶ月間ハ普通工女ニ比シ絲量ノ減耗平均一捻ニ付八分位ナリシカ、二ヶ月目ニハ平均三四分トナリ三ヶ月目ニハ一二分ニ止マルノ好成绩ヲ擧ケタリ。

製絲競技會

静岡縣生絲製造同業組合ハ、製絲工女技術ノ練磨並各工場ノ改善發達ヲ計ランカ爲、明治四十年年度ヨリ毎年製絲競技會ヲ開催シ、縣ヨリ審査官ヲ派遣シテ其任ニ當ラシメ、尙褒賞費トシテ四十年年度ハ金百五拾圓、四十一年度ハ金百六拾圓、四十二年度及四十三年度ハ各金參百圓宛、四十四年度ハ百五拾圓ヲ下附シテ斯業一般ノ獎勵ニ努メタリ、今是等各年度ニ就テ其狀況ヲ示セハ左ノ如シ。

△明治四十年年度、第一回静岡縣製絲競技會ハ組合内各工場ニ於ケル工女中ヨリ優等ト認ムル者二名ヲ選抜シテ、組合代表者並審査員立會ノ上、組合ヨリ分配シタル品質一定ノ乾繭二升宛ヲ繰繰セシメ、時間、絲量、品質其他ノ實情ニ就キ比較審査ヲ行ヘリ、此競技ニ加ハリタル工場ハ七十ヶ所ニシテ工女ハ百四十名ナリキ、就中五十六名ニ對シテ一等ヨリ五等ニ區別シ知事ヨリ夫々褒賞セラレタリ、其概況左ノ如シ。

項目	金額	項目	金額
生繭四石購入費	二七五	組合代表者旅費	五〇
授與式費	四〇	通信運搬費	三五
		賞品費	一五〇
		計	五五〇

經費

審査及工場監督

審査長	生方五郎	審査員	横山賢	同	太田兵太郎
同	阿部保太郎	同	飯島善太郎	同	岩浪爲治
同	福田省太郎				

審査規程

- 第一條 煮繭ノ始メヨリ繰繰終了ノ時間ハ最短ナルモノニ優点百点ヲ附シ七分間ヲ多費スル毎ニ劣点三点ヲ減シ盡クレハ零点ニ止ム
- 第二條 生絲量ノ最多ナルモノニ優点百点ヲ附シ一分多ヲ減スル毎ニ劣点三点ヲ減シ盡クレハ零点ニ止ム
- 第三條 再繰ハ無切斷ノモノニ優点二十点ヲ附シ一切斷毎ニ三点ヲ減シ盡クレハ零点ニ止ム
- 第四條 繰度ハ十四「デニール」ノモノニ優点五十点ヲ附シ「デニール」一分ノ差アル毎ニ一点ヲ減シ盡クレハ零点ニ止ム
- 第五條 類節ハ絲長二百五十「メートル」ニ就キ四回検査シ之ヲ平均シ無類ノモノニ優点三十点ヲ附シ大類ハ一類毎ニ二点小類ハ三類毎ニ一点ヲ減シ盡クレハ零点ニ止ム
- 第六條 強力ハ繰度十四「デニール」ニ對シ六十三瓦以上ヲ有スルモノニ優点三十点ヲ附シ繰度ノ割合ニ依リ一瓦ヲ減スル毎ニ一点ヲ減シ盡クレハ零点ニ止ム
- 第七條 伸度ハ繰度十四「デニール」ノモノ絲長半「メートル」ニ付百二十五「ミリメートル」以上ノ伸度ヲ有スルモノニ優点三十点ヲ附シ繰度ノ割合ニ依リ二「ミリメートル」ヲ減スル毎ニ一点ヲ減シ盡クレハ零点ニ止ム
- 第八條 絲質ハ最優ナルモノニ優点三十点ヲ附シ次第第三等差ヲ考案シテ劣点ヲ附ス

一等受賞者

小笠郡大須賀村 水谷製絲場 河合ヨネ

△明治四十一年度、第二回静岡縣製絲競技會ハ之ヲ二回ニ行フ、第一回ハ縣下ヲ七區ニ別チ、各區域内ニ於テ組合員ノ養成シタル優等工女ヲ一製絲場毎ニ二十五人ニ對スル一人ノ割合ヲ以テ選抜シ、之ヲ各區別々一ヶ所ニ召集シテ練絲ヲ競技セシム、次テ審査ノ結果更ニ總員中ヨリ十分ノ四ノ優等者ヲ選出シテ、榛原郡金谷町伊藤製絲場ニ召集シ第二回ノ競技ヲ行ハシメタリ、其概況左ノ如シ。

第一回競技成績表

區別	區域	競技會場	競技工女數	選抜工女數
第一	賀茂郡一圓	賀茂郡稻生澤村兄弟社製絲場	一四名	七名
第二	田方、駿東二郡一圓	田方郡三島町天城館製絲場	二五	一〇
第三	富士郡一圓	富士郡大宮町久保田製絲場	四四	一八
第四	庵原、安倍、志太、榛原郡及静岡市一圓	庵原郡江尻町杉山製絲場	一六	八
第五	小笠、周智二郡一圓	小笠郡四山口村平岩製絲場	九	四
第六	磐田郡一圓及濱名郡濱松以東濱名郡濱松以西及引佐郡一圓	濱名郡濱松町帝國製帽株式會社分工場	一二	五
第七	濱名郡濱松以西及引佐郡一圓	濱名郡新所村濱名社	二五	一二

第二回競技成績表

等級	賞	與受賞者數	等	級	賞	與受賞者數
第一	一〇圓	一名	四	等	二五圓	一名
第二	六圓	七名	五	等	褒狀	一名
第三	四圓	二名	七	等		一名

一等受賞者

磐田郡廣瀬村 天龍川製絲合資會社 鈴木 ヲメ

經費

項目	金額	項目	金額	項目	金額
事務費	一〇〇圓	通信運搬費	三五圓	印刷費	二五圓
賞與費	一六〇	消耗品費	二〇	計	八八〇
工女出場手當	四二〇	雜費	一二〇		

審査長及審査員

審査長 生方五郎 審査員 横山賢 同 太田兵太郎
 同 飯島善太郎 同 阿部保太郎 同 岩浪爲治

△明治四十二年度、第三回静岡縣製絲競技會ハ前年ト同シク之ヲ二回ニ分チ行フ、第一回ハ縣下全製絲工場ニ對シテ一工女ニ付兩二升宛練絲セシメ、且ツ時間、絲量、切斷、類節、織度等ノ審査ヲ爲シタリ、次テ工女二十五人ニ付一人ノ割合ヲ以テ優等者ヲ選抜シ、更ニ之ヲ縣下二組ニ分チ、東部ハ庵原郡富士川町岩淵

製絲場、西部ハ小笠郡大須賀村横須賀製絲場ニ於テ第二回競技會ヲ開催ス、此時工女ハ東部ノ三十六工場ニ對スル七十九名、西部ノ三十工場ニ對スル五十三名ニシテ、前者ハ十一月二十五日ニ於テ、一人ニ付春蠶繭百九十二夕宛、織度十四「デニール」、後者ハ同四十九日ニ於テ、一人ニ付春蠶繭三升六合宛織度十四「デニール」ノモノヲ繰絲セシメタリ、翌四十三年一月二十七日、静岡市物産陳列館ニ於テ褒賞授與式ヲ舉行シ、知事ヨリ夫々賞與セラル、乃チ其成績左ノ如シ。

第一回競技成績表

郡市	工場數	競技工女數	選拔工女數	郡市	工場數	競技工女數	選拔工女數
賀茂	八個	三六八名	一六名	小椋原	三個	一八二名	九名
田方	五	三一七	一三	小笠	八	二八二	一二
駿東	八	二六三	一二	周智	四	一二三	四
富士	二二	一、一六一	四九	磐田	四	二〇一	九
庵原	六	三二四	一五	濱名	一九	六六四	三六
安倍	二	一一四	四	引佐	一	二六	一
志太	二	九八	四	計	九二	四、一二三	一八四

第二回競技成績表

等級	賞	與受賞者數	等級	賞	與受賞者數
一等	拾圓	二名	四等	貳圓	四名
二等	六圓	八名	三等	壹圓	四名
三等	四圓	二名	二等	五圓	四名
四等	圓	二名	一等	五九圓	四名

一等受賞者

濱名郡濱松町 篠原製絲場 渡邊 ムメ 富士郡大宮町 久保田製絲場 遠藤 ×イ

經費

項目	金額	項目	金額	項目	金額
賞與費	三〇〇圓	工女旅費補助	一五〇圓	製品損害賠償金	三〇〇圓
陣列費	一〇〇圓	集會費役員旅費	一〇〇圓	計	七五〇圓
雜費	一〇〇圓	印刷費	一五〇圓		
受賞者辨當料	一五〇圓	通信運搬費	三〇圓		

審査長及審査員

審査長 生方五郎 審査員 横山賢
 同 飯島善太郎 同 阿部保太郎 同 太田兵太郎
 同 黒田龜次郎 同 伊藤誠太郎 同 岩浪爲治
 同 井出源作 同 鈴木勝太郎 同 内田新次郎

△明治四十三年度、第四回静岡縣製絲競技會ハ縣下全製絲場ニ就テ現ニ養成中ノ者ヲ除ク外、一工女ニ繭二升宛ヲ繰絲セシメ、時間、絲量、切斷、織度、品質等ノ審査ヲ爲シ工女十人ニ付一名ノ割合ヲ以テ選拔シ

△明治四十四年度、第五回静岡縣製絲競技會ハ縣下ヲ七區ニ別チ各區組合員ノ養成シタル優等工女ヲ、一製絲場ニ付二十五人對一人宛ノ割合ヲ以テ選抜シ、之ヲ區毎ニ一ヶ所ニ召集シテ繭二升宛ヲ繰絲セシメ、時間、絲量、織度、切斷、類節、色澤等ノ審査ヲ爲スコト同前也、斯クテ九月二十七日ヨリ十月十六日迄ニ結了セシヲ以テ、十一月十二日静岡市物産陳列館ニ於テ、本縣第二回桑園品評會並種繭品評會ト共ニ褒賞授與式ヲ舉行シ、知事ヨリ褒賞セラレタリ、其狀況左ノ如シ。

申告文

第五回静岡縣製絲競技會ニ參加シタル製絲工場數ハ五十九ヶ所ニシテ工女百四十六名ナリ其成績ヲ前回ニ比較スレハ稍進歩ノ跡ヲ認ムト雖繭絲技術區々ナルニ依リ品質ニ多大ノ較差ヲ生シタリ今技術上注意スヘキ要點ヲ述ブレハ索緒並抄絲ハ一般ニ粗暴ニシテ爲ニ絲量ヲ減耗スルコト多ク添緒ノ方法亦未タ熟達ノ域ニ達セス即チ絲端ノ長キト添緒ノ宜シキヲ得サルトニ由リテ類節多ク生シ生絲ノ品位ヲ損スルコト大ナリ又織度ノ鑑識未熟ナルト絲織ノ配合適切ナラザルトニ由リテ目的ノ織度ニ適合セルモノ少ナキハ遺憾トス畢竟繰絲時間ノ短縮ヲ爭フノ結果充分ノ技術ヲ發揮シ得サリシ感無キニアラス作業ノ迅速素ヨリ重要ナリト雖爲ニ絲量及品位ヲ願ミサルカ如キハ最モ戒ムヘキ所ナリトス宜シク此點ニ鑑ミ將來一層ノ精勵ヲ望ム次ニ工場主ニ一言ヲ呈セン生絲ノ需要ハ文化ノ進運ニ伴ヒ日ニ月ニ増大スルト同時ニ歐米機織工業ノ長足ナル發達ニ依リテ益々精良品ノ供給ヲ要求スルニ至レリ今ヤ我輩絲界ハ多年ノ懸案タル蠶種ノ統一ハ近ク實現セラルヘシト雖加工生産者タル製絲業者ニシテ其意ニ副ハサラムカ實績ヲ擧クルコト益々難カルヘシ須ラク世界ニ於ケル斯業ノ大勢ニ鑑ミ生絲需要者ノ意向ヲ察シ萬難ヲ排シテ經營諸策ニ全力ヲ傾注シ以テ本邦生絲ヲシテ海外ノ市場ニ雄飛セシムルノ策ヲ講セラレンコトヲ切望シテ止マサル也

審査長 静岡縣技師從六位 渡邊 亥八

成績表

郡市	級				計	郡市	級				計
	一	二	三	四			一	二	三	四	
賀茂	1	1	1	1	4	1	1	1	1	4	
田方	1	1	1	1	4	1	1	1	1	4	
駿東	1	1	1	1	4	1	1	1	1	4	
富士	1	1	1	1	4	1	1	1	1	4	
庵原	1	1	1	1	4	1	1	1	1	4	
安倍	1	1	1	1	4	1	1	1	1	4	
志太	1	1	1	1	4	1	1	1	1	4	
榛原	1	1	1	1	4	1	1	1	1	4	
合計	9	9	9	9	36	9	9	9	9	36	
濱松市											

一等受賞者

郡	町村	工場名	氏名	郡	町村	工場名	氏名
濱名郡	新所村	尾崎製絲場	鈴木みか	富士郡	加島村	士陽館	大村まさ
同	新居町	宮崎製絲場	松井いち	同	大宮町	久保田製絲場	佐野はる
磐田郡	下阿多古村	阿多古製絲場	佐日せん	庵原郡	蒲原町	五十嵐製絲場	八木しげ
小笠郡	西山口村	平岩製絲場	河村てつ	岩科	製絲場	岩科製絲場	鈴木ささ
田方郡	三島町	庵原製絲分工場	三森ゆき	賀茂郡	南中村		鈴木ささ

經費

◎第六項製絲ニ關スル事項 製絲競技會

生絲改良

本縣ノ蠶絲ハ其産額多ク前途極メテ有望ノ事業ナルヲ以テ之カ施設ノ完否ハ直接本業ノ消長ニ關係スルヤ大ナリ、其改良施設ヲ要スヘキ事項尠ナカラサルモ、先ツ指導改善ノ任ニ當ル製絲専攻ノ技術者ヲ欠クヲ以テ、之カ任用ヲ必要トシ四十四年度ヨリ縣農業技手ヲ設置セリ、即チ前記農業技手トシテ東京蠶業講習所製絲本科卒業ノ京都蠶業講習所技手タリシ藤田新祐ヲ任用シ、時々縣下ヲ巡回シ製絲業者ニ就テ繰絲其他ノ實地指導ヲ爲シ、又一般當業者ノ殺蛹乾繭法、屑繭整理ノ傳習、改良並斯業ニ關スル講習講話等ヲ爲シ、漸次改良發展ノ途ヲ講シツ、アリ、之カ經費豫算ハ四十四年度ハ金千七十九圓ニテ四十五年度ハ金千七百七十八圓也。

第七項 蠶絲業團體ニ關スル事項

組合事業獎勵

▲蠶絲業組合、明治十九年縣令ヲ以テ蠶絲業取締規則ヲ發布シテ、各郡ニ蠶絲業組合ヲ設置セシメ進ンテ事業ヲ獎勵セント欲シ同二十二年各郡蠶絲業組合ヲシテ養蠶傳習所ヲ設立セシメ、縣費備入ノ教師ヲ派遣シテ傳習ヲナサシム、同二十八年ヨリ三十二年ニ至ル五ケ年間同シク縣費ヲ以テ教師ヲ備入レ、傳習又

ハ巡回ノ爲各郡蠶絲業組合ニ派遣セリ、同三十三年度ニ至リ養蠶教師ヲ廢シテ蠶業改良費補助規程ヲ設ケ、縣費千參百圓ヲ各郡蠶絲業組合ニ補助シ以テ事業ノ獎勵ヲ爲シ爾來繼續シテ現今ニ及ヘリ。

蠶業改良費補助規程

- 第一條 補助金ハ各郡ニ金百圓ノ豫算ヲ置ク
- 第二條 補助金ハ各郡蠶絲業組合ニ於テ左記各項ノ一ニ該當スル設備ヲ爲シタル場合ニ於テ之ヲ下附ス
- 一、三週間チ一期トスル蠶業講習會ヲ二ヶ所以上開設スル場合
 - 一、三週間チ一期トスル蠶業講習會ヲ一ヶ所開設スル外五十日以上蠶業講話會ヲ開ク場合
 - 一、養蠶傳習所ヲ二ヶ所以上設置スル場合
 - 一、模範飼育場ヲ常設者ハ巡回教授ヲ爲サシムルカ爲三名以上ノ教師ヲ招聘スル場合
 - 一、五個所以上ノ消毒器ヲ購入スル外消毒器使用法並消毒法ニ就キ二週間以上ノ講話會ヲ設ケル場合
 - 一、二百圓以上ノ蠶組買収費ヲ設備シタル場合
 - 一、以上各項ノ外本縣ニ於テ必要ト認ムル事業ヲ施設スル場合
- 第三條 補助金ヲ受ケムトスル場合ハ前條ノ設備書ニ經費明細書ヲ添付シ毎年五月十日迄ニ當廳ニ願出テ認可ヲ受ケヘシ
- 第四條 補助金ハ事業着手ノ當時ニ於テ半額ヲ下附シ事業終了ノ時ニ於テ半額ヲ下附スヘシ
- 第五條 補助金下附ノ認可ヲ與ヘタルモノト雖其事業ニシテ奏功ノ見込ナキト認ムル場合ニ於テハ補助金ノ下附ヲ停止シ若ハ減少スルコトアルヘシ
- 第六條 其年度内ニ於テ補助ヲ受ケヘキ事業ノ設備ヲ爲サス自然補助金ノ剩餘ヲ生シタル場合ニ於テハ他郡ニ流用補助スルコトアルヘシ

▲生絲製造同業組合、縣下器械生絲製造業者ハ生絲ノ改良發展ヲ圖ランカ爲、明治三十一年十二月二十八日静岡縣生絲製造同業組合ヲ組織シ縣獎勵ノ下ニ各年度施設シタル事業ノ概要左ノ如シ。

△製絲講習會、明治三十六七ノ兩年度ハ貳千圓ツ、ノ補助ヲ受ケテ東京蠶業講習所ヨリ專門技師ヲ聘シ、榛原郡金谷町、濱名郡濱松町、新所村、小笠郡掛川町、大須賀村、富士郡大宮町、賀茂郡下田町、庵原郡富士川町、田方郡三島町ノ九ヶ所ニ於テ、各三十日間ヲ一期トスル製絲講習ヲ開會シ傍工女ヲ實習セシメタリ。

△生絲共同揚糞並荷造所、明治三十八年以降生絲齊整ヲ期センカ爲、毎年貳千五百圓乃至四千六百圓ノ補助ヲ受ケ、富士郡大宮町ニ駿陽社、庵原郡富士川町ニ岩淵社、濱名郡新所村ニ濱名社、小笠郡大須賀村ニ横須賀ノ各共同揚返所及賀茂郡下田町ニ城南社等共同荷造所五ヶ所ヲ設立セリ、

△補成工女養成、明治四十二年度ニ於テ補成工女養成ノ目的ニ依リ、第一回ハ志太郡相川村第二回ハ小笠郡大須賀村ニ製絲傳習所ヲ開設シ縣ヨリ工女養成費トシテ金壹千圓ヲ下附セラレタリ。

△製絲競技會、明治四十年ヨリ四十四年マテ各年度ニ於テ製絲工女競技會ヲ開設シ、縣ヨリ褒賞費トシテ四十年度ハ金百五拾圓、四十一年ハ金百六拾圓、四十二三年度ハ各金參百圓、四十四年度ハ金百五十圓ヲ下附セラレタリ。

△蠶種同業組合、縣下蠶種製造業者ヲ賀茂郡ハ斯業ノ改良發展ヲ圖ランカ爲、明治三十六年八月六日静岡縣蠶種製造同業組合ヲ組織シ、縣費補助ノ下ニ施設シタル事業左ノ如シ。

△蠶病消毒講習會、蠶病消毒ノ普及ヲ圖ランカ爲、明治三十八年縣費五百圓ノ下附ヲ受ケ講習會四ヶ所ヲ開設セリ。

補助金下附命令書

- 第一條 本改良費金五百圓ヲ其組合ニ交附ス
 - 第二條 改良費ハ蠶病消毒講習會費及消毒器具器機藥品購入費ニ充ツヘシ
 - 第三條 蠶病消毒講習會ハ七日間以上ナリ一期トシ四回以上開催スヘシ
 - 第四條 蠶病消毒講習會ノ講師氏名資格開會ノ状況成績其他開閉期日、開會ノ場所講習生人員等ハ其都度報告スヘシ
 - 第五條 消毒器械ハ最近ニ於テ改良シタル噴霧器十臺同噴霧器五臺以上ヲ購入スヘシ
 - 第六條 本命令ニ違背シタルトキハ改良費下附ヲ中止シ又ハ返戻セシメ若ハ減額スルコトアルヘシ
 - 第七條 改良費ハ事業着手ノ際半額事業終了ノ後其半額ヲ下附スヘシ
 - 第八條 本命令受領ノ日ヨリ五日以内ニ請書ヲ差出スヘシ
- △種繭品評會、種繭ノ統一ヲ目的トシ明治四十三四年ノ兩度ニ於テ静岡縣種繭品評會ヲ開催シ、縣ヨリ褒賞費トシテ金參百圓ツ、ヲ下附セラレタリ。

静岡縣蠶絲業組合取締所

▲由來、明治十八年農商務省令第四十二號蠶絲業組合準則並静岡縣令甲第十九號ニ基キ、同十九年三月蠶絲業組合取締所ヲ創立シテ事務所ヲ静岡市雨換町ニ置ク、乃チ依田佐二平ハ頭取樽林宇太郎ハ副頭取ニ各就任シ、續テ翌四月取締規約第二條ニ依リ縣下ニ左ノ六蠶絲業組合ヲ組織セシカハ、組合會議ニハ伊藤久次郎副議長ニハ多米八郎就任セラル、尙取締規約第十一條ニ據リ蠶絲業組合全國中央部會議員トシテ影山秀樹伊藤久次郎ヲ擧ケ、茲ニ始メテ組合機關ノ完成ヲ見ルニ至レリ、乃チ各組合ノ位置區域左ノ如シ。

名	稱	區	域	位	置
伊豆蠶絲業組合	駿東郡蠶絲業組合	賀茂、那賀、君澤、田方ノ四郡	田方郡	方	山田村
駿東郡蠶絲業組合	駿東郡蠶絲業組合	東郡	東郡	御殿	御殿場
富士郡蠶絲業組合	富士郡蠶絲業組合	富士郡	富士郡	大宮	大宮町
静岡市蠶絲業組合	静岡市蠶絲業組合	庵原、有度、安倍、志太、益津、榛原ノ六郡	静岡市	札ノ辻	札ノ辻町
有度外五郡蠶絲業組合	有度外五郡蠶絲業組合	佐野、城東、山名、周智、磐田、豊田ノ六郡	豊田郡	中瀬	中瀬村
豊田外五郡蠶絲業組合	豊田外五郡蠶絲業組合	敷地、長上、濱名、引佐、産玉ノ五郡	濱名郡	新所	新所村
敷地外四郡蠶絲業組合	敷地外四郡蠶絲業組合				

當時各組合員並經費豫算ヲ示セハ左ノ如シ。

名	稱	人員	經費	名	稱	人員	經費
伊豆蠶絲業組合	伊豆蠶絲業組合	一、五〇〇名	一六五圓	敷知外四郡蠶絲業組合	敷知外四郡蠶絲業組合	一、〇三二名	一六五圓
富士郡蠶絲業組合	富士郡蠶絲業組合	一、七〇〇名	八八圓	豊田外五郡蠶絲業組合	豊田外五郡蠶絲業組合	一、五〇〇名	二一〇圓
静岡市蠶絲業組合	静岡市蠶絲業組合	一〇〇名	一四圓	計	計	七、一三二名	七一〇圓
有度外五郡蠶絲業組合	有度外五郡蠶絲業組合	一、三〇〇名	六九圓				
駿東郡蠶絲業組合	駿東郡蠶絲業組合						

同二十一年農商務省令第四十一號廢止セラレ、次テ縣令改正ノ結果、組織ヲ革メ頭取ニ樽林宇太郎、副頭取ニ山本庄次郎就任セリ、尙組合ノ區域並ニ名稱ヲ左ノ如ク變更シテ議長ニ影山秀樹副議長ニ多米八郎ヲ改選シタルカ、同二十三年三月ニハ織田喜作副頭取トナル、當時ノ各組合位置區域左ノ如シ。

名	稱	區	域	位	置
南豆蠶絲業組合	南豆蠶絲業組合	賀茂、那賀、二郡	賀茂郡	下田	下田町
北豆蠶絲業組合	北豆蠶絲業組合	君澤、田方、二郡	君澤郡	古奈	古奈村
駿東郡蠶絲業組合	駿東郡蠶絲業組合	東郡	東郡	御殿	御殿場
富士郡蠶絲業組合	富士郡蠶絲業組合	富士郡	富士郡	大宮	大宮町
有度外五郡蠶絲業組合	有度外五郡蠶絲業組合	庵原、有度、安倍、志太、益津、榛原ノ六郡	静岡市	研屋	研屋町
周智外二郡蠶絲業組合	周智外二郡蠶絲業組合	佐野、城東、周智、三郡	佐野郡	掛川	掛川宿
豊田外二郡蠶絲業組合	豊田外二郡蠶絲業組合	山名、磐田、豊田、三郡	豊田郡	中瀬	中瀬村
長上外一郡蠶絲業組合	長上外一郡蠶絲業組合	長上、産玉、二郡	長上郡	貴布禰	貴布禰村
敷知外二郡蠶絲業組合	敷知外二郡蠶絲業組合	敷知、濱名、引佐、三郡	濱名郡	新所	新所村

備考 其後二十九年ニ至ル迄數回ノ異動アリキ

同二十六年三月縣令第二十二號ニ據リ取締所ノ組織ヲ革メ、頭取副頭取ヲ廢シテ所長ヲ置キシカハ高瀬牧太郎之ニ就任シ、事務所ヲ静岡市吳服町二丁目ニ設置ス、同二十七年三月同人退任ニ付石上關太郎之ニ迭リテ事務所ヲ追手町ニ移ス、同三十年ニ至リ郡廢置ノ結果一市十三郡蠶絲業組合ヲ設ケ、三十一年四月所長ノ改選ヲ行ヒタレハ寺尾昌太郎就任シテ引續キ現今ニ及ヘリ、同年十二月重要物産同業組合法ニ據リ、器械製絲業者ハ本組合ヲ分離シテ生絲製造同業組合ヲ組織シ、三十六年三月蠶種製造者及販賣業者モ亦本組合ヲ分離シテ蠶種同業組合ヲ組織シ、同時ニ縣令蠶絲業組合取締規則一部ノ改正ニ據リテ賀茂郡蠶絲同

業組合創立ト共ニ同關係者ハ全部本組合ヲ脱スルニ至レリ、爾來本所ノ統轄スル組合ハ田方、駿東、富士、庵原、安倍、志太、榛原、小笠、周智、磐田、濱名、引佐ノ各郡及静岡市ノ十三組合トス。

▲事業、本所ハ各郡市蠶絲業組合ノ氣脈ヲ通シ其方針ヲ一様ナラシメ、統計ノ編纂又ハ必要ニ應シ講習講話會若ハ品評會ヲ開設シテ斯業ノ改良發展ヲ促シ更ニ各組合事業督勵ノ任ニ當ルモノトス、而シテ本所創立以來施設事業ノ一斑ヲ擧クレハ左ノ如シ。

- 一、生絲製造及尙造ノ検査監督、明治十九年以來其検査監督ヲ續行シタリシモ同二十八年六月生絲検査法發布ニ依リ之ヲ廢止ス。
- 一、蠶種検査、同十九年八月農商務省令第九號並同検査取扱手續ニ準シ、毎年蠶種検査員ヲ命シテ各郡市蠶絲業組合ニ派遣シ、十月一日ヨリ十一月二十日迄定期検査トシテ越年蠶種検査ヲ行ヒ、又臨時検査トシテ縣内外ノ製造ヲ問ハス春夏秋蠶種ノ検査ヲ施行シタルカ三十年三月蠶種検査法發布ニ依リ之ヲ廢止ス。
- 一、繭生絲蠶種品評會、同二十九年十月一日ヨリ七日間、同品評會ヲ静岡市追手町茶業組合聯合會議所ニ開催ス、審査員ハ蠶種ハ寺尾昌太郎、黒田龜次郎、佐藤辰郎、藤ハ山本庄次郎、熊谷徹郎、子上勝三、望月平太郎、生絲ハ影山秀樹、川嶋新兵衛、望月平太郎等ナリ。
- 一、蠶絲業大會列席、同三十年九月廿八日、岐阜縣岐阜市ニ開催セル蠶絲業大會ニ當業者十六名ヲ出席セシム。
- 一、蠶絲大會、同年十月六日静岡市紺屋町浮月樓ニ開會シテ斯業獎勵方法ヲ協議シ、尙高橋横濱生絲検査所技師、松永農商務省技師ヲ聘シテ蠶業講話會ヲ開催セリ。
- 一、第一回蠶絲業大會、同三十三年四月七八ノ兩日生絲製造同業組合ト聯合シテ静岡市下魚町寶台院ニ開會シ、本縣知事ノ斯業ニ關スル諮問案ヲ討議シ尙高橋横濱生絲検査所技師吉池農商務省技師ヲ聘シテ蠶業講話會ヲ開催セリ。
- 一、第二回蠶絲業大會、同三十四年四月二三ノ兩日ニ於テ第一回同場所ニ開會シ、斯業ニ關スル獎勵方法ヲ協議ノ上、尙本多東京蠶業講習所長今西横濱生絲検査所技師島田濱名蠶業學校長ヲ聘シテ蠶業講話會ヲ開催セリ、協議事項ハ一、蠶種検査手数料全廢ヲ縣知事ニ建議ノ件 二、生絲製造同業組合ハ縣費ヨリ相當ノ補助アラントテ請願ノ件 三、蠶組驅除規則ノ勵行ヲ縣知事ニ請願ノ件

- 四、製絲釜數割賦課廢止ヲ縣知事ニ建議ノ件 五、自家用蠶種検査法ヲ適用セラレントヲ其筋ヘ建議ノ件 六、今回新設ノ製絲講習所ハ實業ニ適當スル組織トナサントテ主務大臣ニ建議スルコト 七、縣立農事試驗場内ニ蠶種製造所ヲ設ケ完全ナル蠶種ヲ製造シ原種トシテ各當業者ヘ配付セラレントヲ本縣知事ニ請願ノ件 八、本縣ニ蠶業技師聘用セラレントヲ縣知事ニ建議ノ件 九、越年蠶種ノ母蛾検査ハ其年十一月末日限リ検査結了センコトヲ知事ニ請願ノ件 十、蛹ニ化セサル繭ノ賣買ヲ禁スルノ件 十一、勸業調査會設置ヲ建議ノ件等ナリ。
- 一、第三回蠶絲業大會、同三十五年四月四五兩日静岡市静岡農工銀行樓上ニ開會シ、斯業ニ關スル獎勵方法ヲ協議ノ上尙紫藤横濱生絲検査所長練木元東京蠶業講習所長ヲ聘シテ蠶業講話會ヲ開催セリ。
- 一、各郡ニ品評會開設、同三十九年各郡市蠶絲業組合ヲ督勵シ、本所ヨリ補助金ヲ交付シテ第九回關西府縣聯合共進會出品準備ノ爲各郡ニ品評會ヲ開設セシム。
- 一、蠶絲業視察、同四十年四月三三重縣津市ニ開設セル第九回關西府縣聯合共進會並同縣蠶絲業視察トシテ、寺尾所長並岡部常議員ヲ派遣シ、翌四十一年十月長野縣野野市ニ開設セル一府十縣聯合共進會並長野、山梨、群馬等ノ蠶絲業視察トシテ、寺尾所長並川富士郡蠶絲業組長後藤引佐郡蠶絲業組長ヲ坂道シ、又同四十三年四月愛知縣名古屋市ニ開設セル關西府縣聯合共進會並同縣蠶絲業視察ノ爲、寺尾所長岡部常議員山下志太郎蠶絲業組長松下榛原郡蠶絲業組長鈴木小笠郡蠶絲業組合理事ヲ派遣セリ。
- 一、桑園品評會、同四十三四ノ兩年度ニ於テ各郡市ニ支會品評會ヲ開キタリ。

▲役員、創立以來ノ梗概左ノ如シ。

氏名	任期	住所	氏名	任期	住所
頭 依田 佐二平	明治三十九年 自一九〇一 至二〇〇一	賀茂郡 中川村	榑林 宇太郎	明治三十九年 自一九〇一 至二〇〇一	安倍郡 千代田村
取 榑林 宇太郎	二二 二六	安倍郡 千代田村	副頭取 山本 庄次郎	二二 二三	濱名郡 白須賀町
			織田 喜作	二三 二六	安倍郡 麻機村

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 靜岡縣生絲製造同業組合

- 一、組合設立ノ當時生絲製造法乱雜區々ナリシカ「デニール」一定法ヲ規定シテ細太ノ標準ヲ明ニシ荷造法及工女取締法ヲ定メテ工女賃金ノ標準並競争賃額ノ弊ヲ矯正シ工業ノ常態ヲ維持シテ各自改善發展ニ注意セシム。
- 一、三十三年以降製絲用水質分析試驗法ヲ定メ、各工場ノ水質試驗ニ便シ、工業經濟表ヲ製シ實地ニ比較攻究ヲナサシム。
- 一、三十五年ヨリ三十九年ニ亘リ製絲法短期講習會ヲ規定シ、春秋時期ヲ撰ミテ町田三谷兩東京蠶業講習所技手ヲ聘シ、縣下各所ニ講習會ヲ開催スル傍工女ニ實習セシメタリ。
- 一、三十五年以降各府縣製絲業ノ得失ヲ比較攻究センカ爲、年々視察員ヲ各地ニ派遣シ、尙東京蠶業講習所製絲部入學者ニ對シ卒業後ノ義務年限ヲ定メテ學費補助ヲ實行セリ。
- 一、三十七年米國聖路易萬國博覽會ヘ生絲ノ出品ヲナシ、且ツ依田組長ヲ派遣シテ博覽會並米國生絲需用ノ狀況ヲ視察セシメタリ。
- 一、三十八年以降生絲共同場返及生絲共同荷造所ノ設立ヲ獎勵シ、生絲整理ノ方法ヲ講シタリ、即チ富士郡大宮町ニ駿陽社、庵原郡富士川町ニ岩淵社、濱名郡新所村ニ濱名社、小笠郡大須賀村橫須賀ノ各共同場返所及賀茂郡下田町ニ城南社共同荷造所等ノ設立アリ、成績何レモ良好ニシテ濱濱市場ニ於ケル價格ハ共同以前ニ比シ數層ノ上位ヲ占得スルニ至レリ。
- 一、四十年以降工女競拔會ヲ開キテ技術ヲ獎勵シ、各工場製絲改良ノ資料トナス。
- 一、四十二年補成工女ノ目的ヲ以テ、志太郡相川村及小笠郡大須賀村ニ製絲傳習所ヲ開設セリ。

▲役員、創立以來其任ニ當レル者左ノ如シ。

氏名	任期	住所	氏名	任期	住所
組長 依田佐二平	自明治三一年至明治三十四年	賀茂郡中川村	望月平太郎	自明治三十四年至明治三十九年	庵原郡由比町
井出源策	現今	富士郡今泉村	山口五郎	三四	富士郡岩松村
榑林宇太郎	三一	安倍郡千代田村	井出源策	三六	富士郡今泉村
伊藤仙太郎	三四	榛原郡金谷町	清水孝一郎	三六	小笠郡大須賀村

副組長	評議員	評議員	評議員
横田保	横田保	塚本至作	久保田福次郎
井出源策	石井研二	影山邦信	林才一郎
林才一郎	石川竹太郎	渡邊喜兵衛	佐藤彌七
鈴木恭一郎	伊藤仙太郎	五十嵐政助	河島新兵衛
袴田勘右衛門	石井研二		
伊藤仙太郎	横田保		

▲經費、三十二年度以降ノ概要左ノ如シ。

年度	總額	事業費	縣補助	年度	總額	事業費	縣補助
明治三二年	八五三圓	一五圓	一圓	明治三九年	七、六五九圓	七、一三二圓	七、一二〇圓
三三	九〇二	一六九			六、〇六四	四、六三八	四、七五〇
三四	七〇〇	一一八			一、七一八	六二九	一六〇
三五	七九六	一三九			六、三九七	五、四二五	四、三〇〇
三六	三、九一〇	三、一一九	二、〇〇〇		二、三六一	三六五	三〇〇
三七	四、五八〇	三、四七〇	二、〇〇〇		一、七七〇	一、〇五五	一五〇
三八	三、五九九	二、五三六	二、五〇〇		一、二六五	五五〇	一五〇

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 靜岡縣生絲製造同業組合

静岡縣蠶種同業組合

▲由來、法律第四十七號重要物産同業組合法ニ基キ、縣下蠶種ノ改良發展ヲ圖ランカ爲、森鹿吉郎、戸倉惣兵衛、織田喜作、杉山榮次郎、長岡辰吉等發起人トナリ、明治三十五年十一月本組合發起認可ヲ其筋ニ申請セシニ、翌三十六年八月農商務大臣ノ認可ヲ得タリ、組合地區ハ賀茂郡ヲ除キ一市十二郡ニシテ事務所ヲ静岡市追手町ニ設ケ、尙業務處理上便宜ノ爲沼津、静岡、見付、濱松ニ支部ヲ分置シ以テ今日ニ及ヘリ。

▲事業、 施設中ノ主ナルモノ左ノ如シ。

- 一、創立以降検査員ヲ置キテ四支部ニ派遣シ、組合員ヲ啓發指導シ蠶種ノ改良發達ニ努メタル結果、逐年製造高増加シ飼育者モ亦地方蠶種ノ確實ナルヲ認メテ、移入ニ依ルモノ漸次減少スルノミナラス却テ他ニ移出スルノ傾向ヲ來スニ至リタリ。
- 一、蠶病消毒普及ノ目的ヲ以テ三十八年消毒器二十餘台ヲ購入シ、之ヲ各支所ニ配置シテ組合員共同使用ノ便ニ供シ、更ニ消毒思想ノ普及ヲ計ランカ爲、坪井東京蠶業講習所技手、阿部本縣農事試驗場技手ヲ聘シ、四支所共ニ各一週間ツ、講習會ヲ開催シ、講習生二百五十餘名ヲ得タリ。
- 一、蠶種ノ改良統一ヲ期セン爲、四十二二ノ兩年沼津支所ニ於テ種繭品評會ヲ開催シ部内蠶種ノ改良ニ資セリ。
- 一、本組合並賀茂郡蠶絲同業組合主催トナリ、四十三年ヨリ引續キテ種繭品評會ヲ開催セリ。

▲役員、 創立以來其任ニ當レルモノ左ノ如シ。

氏名	任期	氏名	任期
組長 織田喜作	自明治三十九年	伊藤農太郎	自明治三十九年
副組長 石川勘三郎	自明治三十九年	小杉又十郎	自明治三十九年
副組長 戸倉惣兵衛	自明治三十九年	長岡辰吉	自明治三十九年
副組長 戸倉惣兵衛	自明治三十九年	石川勘三郎	自明治三十九年
副組長 長岡辰吉	自明治三十九年	小野勝太郎	自明治三十九年
評議員 杉山榮次郎	自明治三十九年	桂川熊重	自明治三十九年
評議員 松井金次郎	自明治三十九年	高野哲造	自明治三十九年
評議員 笠原三郎	自明治三十九年	戸倉惣兵衛	自明治三十九年
評議員 夏目善五郎	自明治三十九年	今田鷹三郎	自明治三十九年

▲經費、 三十六年度以降其概要左ノ如シ。

年度	總額	事業費	縣補助	年度	總額	事業費	縣補助
明治三十九年	四八一圓	八〇圓	四〇圓	明治四一年	九五六圓	四八一圓	四〇圓
明治三十八年	四八六圓	一六〇圓	五〇圓	明治四二年	五七六圓	二九二圓	一〇〇圓
明治三十七年	一、六〇四圓	一、〇〇二圓	一、〇〇〇圓	明治四三年	一、五二〇圓	一、〇七五圓	三〇〇圓
明治三十六年	一、六一〇圓	二九六圓	一、二五九圓	明治四四年	一、六五〇圓	一、二五二圓	三〇〇圓

賀茂郡蠶絲同業組合

▲由來、 明治十九年三月君澤、田方、賀茂、那賀ノ四郡ヲ以テ伊豆蠶絲業組合ヲ創設シ、事務所ヲ田方郡菲由町、賀茂郡下田町ノ二ヶ所ニ分置ス、同二十一年組合區域ヲ兩分シテ賀茂那賀ノ二郡ハ南豆蠶絲業組合ト稱シタルカ、同二十九年郡廢置ノ結果賀茂那賀二郡ヲ合セテ新ニ賀茂郡ヲ置クニ當リ賀茂郡蠶絲業組合ト改稱セリ、同三十六年三月重要物産同業組合法ニ依リ從來ノ蠶絲業組合ヲ廢シ、蠶種製造者養蠶者其他蠶絲業關係者ニ依リテ賀茂郡蠶絲同業組合ヲ組織シ以テ今日ニ至レリ。

▲事業、 蠶絲業組合當時ハ主トシテ養蠶傳習所ヲ開設シテ飼育法ノ改良ヲ圖リ、又三十四五ノ兩年度ハ玉絲傳習所ヲ設立シ眞綿及紬絲製造法ヲ實習セシム、更ニ種類ノ改良ヲ計ランカ爲郡内蠶種製造者ノ種蠶ニ就テ絲質調査ヲ行ヒタリ、今同業組合設立以來施設シタル事業ノ大要ヲ表示スレハ左ノ如シ。

年度	施設事業	經費	年度	施設事業	經費
明治三六年	三週問講習會開會	一一五圓	明治三九年	蠶業講習會、幻燈使用蠶業講話會開設、蠶業調査施行	二六四圓
三七年	三週問講習會、養蠶傳習所、蠶業調査開設	三一二	四〇年	蠶業講習會、幻燈使用蠶業講話會、蠶業調査、繭品評會開設	五二二
三八	蠶業講習會、各町村消毒巡回指導設置	二九〇	四一	蠶業講習會、幻燈使用蠶業講話會開設	四六二
三九	蠶業講習會開設、蠶業調査施行	二五〇	四二	蠶業講習會講話會開設、蠶業調査施行	五一
四〇	蠶業講習會、幻燈使用蠶業講話會開設、蠶業調査施行	三五四			

▲役員、 明治十九年伊豆蠶絲業組合下田事務所取締人ニ山本謙吾、集會員ニ矢田部強一郎就職シ、二十一年南豆蠶絲業組合トナルニ當リ山本謙吾ハ幹事ニ就職シ、二十三年改選シテ佐藤茂幹事トナル、同二十六年年組合長ヲ設クルニ當リテ山本吾平當選シタルカ、三十四年ニハ矢田部強一郎組長トナル、其後三十六年始メテ組織ヲ同業組合ニ變更シ以テ今日ニ至レリ。

同業組合組織變更以來其任ニ當レル者ノ氏名期間左ノ如シ。

氏名	任職期間	氏名	任職期間
組長 矢田部強一郎	自明治三六年至現今	土屋照雄	自明治三六年至現今
副組長 小針祐藏	三六 現今	山田藤十郎	三九 現今
山本吾平	三六 四二	太田善吉	四二 現今
清田賢二郎	三六 四二	原田福次郎	四二 現今
鈴木寛吉	三六 三九	中村善助	四二 現今
鈴木市太郎	三六 四二		

▲經費、 同業組合組織以降ノモノヲ表示スレハ左ノ如シ。

年次	總額	縣補助	郡補助	年次	總額	縣補助	郡補助
明治三六年	六〇九圓	一〇〇圓	一〇圓	明治三九年	六七九圓	一〇〇圓	一〇〇圓
三七年	五五一	一〇〇圓	一〇圓	四〇年	七一六	一〇〇圓	一五〇
三八	五〇五	一〇〇圓	一〇圓	四一	五一六	一〇〇圓	一五〇

四二	七七七	一〇〇	一五〇	四四	一、三八四	一〇〇	一五〇
四三	八三六	一〇〇	一五〇	四五	一、四四六	一〇〇	一五〇

田方郡蠶絲業組合

▲由來、 明治十九年三月君澤、田方、賀茂、那賀ノ四郡ヲ以テ伊豆蠶絲業組合ヲ創設シ、事務所ヲ韭山町ニ置キタルカ、二十一年四月ニハ賀茂那賀二郡ト分離シテ、北豆蠶絲業組合ト改稱シ事務所ヲ古奈村ニ置ク、同二十六年三月更ニ君澤、田方郡蠶絲業組合ト改メ事務所ヲ三島町ニ移シ、次テ同三十年郡廢置ノ結果田方郡蠶絲業組合ト稱スルニ至レリ、此間事業獎勵ノ概況ヲ表示スレハ左ノ如シ。

年度	施設	事業	經費	年度	施設	事業	經費
明治二九年	巡回教師補助、蠶種検査員補助	巡回教師、蠶種検査員補助	九一圓	明治三〇年	講習會、女子講習會、桑園品評會	講習會、女子講習會、桑園品評會	三三三圓
三〇	養蠶教師雇入、蠶種検査員補助	巡回教師、蠶種検査員補助	二五五	三一	講習會、女子講習會、桑園品評會	講習會、女子講習會、桑園品評會	二七七
三一	巡回教師、蠶種検査員補助	巡回教師、蠶種検査員補助	一二二	三二	講習會、女子講習會、桑園品評會	講習會、女子講習會、桑園品評會	三一三
三二	巡回教師、蠶種検査員補助、講習會、蠶種共同購入	講習會、消毒器購入	二三九	三三	講習會、女子講習會、桑園品評會	講習會、女子講習會、桑園品評會	二五三
三三	講習會、消毒器購入	講習會開設	三一七	合計			
三三	講習會開設	講習會開設、蠶病豫防勵行、消毒器購入	四一六				
三三	講習會開設、蠶病豫防勵行、消毒器購入		一八八				
三三			四一六				
三三			四三				
三三			四二				
三三			四一				
三三			四〇				
三三			三九				
三三			三八				
三三			三七				
三三			三六				
三三			三五				
三三			三四				
三三			三三				
三三			三二				
三三			三一				
三三			三〇				
三三			二九				
三三			二八				
三三			二七				
三三			二六				
三三			二五				
三三			二四				
三三			二三				
三三			二二				
三三			二一				
三三			二〇				
三三			一九				
三三			一八				
三三			一七				
三三			一六				
三三			一五				
三三			一四				
三三			一三				
三三			一二				
三三			一一				
三三			一〇				
三三			〇九				
三三			〇八				
三三			〇七				
三三			〇六				
三三			〇五				
三三			〇四				
三三			〇三				
三三			〇二				
三三			〇一				
三三			〇〇				

三九	講習講話會、女子講習會開設、蠶病豫防勵行、模範桑園設置、消毒器購入、桑園品評會開設	二七九	講習講話會、桑園品評會開設、蠶病豫防勵行、蠶種貯藏補助、其他	三六〇
----	---	-----	--------------------------------	-----

▲役員、 本組合創立以來其任ニ當レル者ノ任期氏名ヲ示セハ左ノ如シ。

氏名	任期	氏名	任期
取締人 石橋正哉	自明治十九年至二十一年	組長 宮内公平	自明治三五年至三八年
幹事 石橋正哉	二一	取締所 石橋尚松	三八
小永井治郎兵衛	二五	常議員 後藤國太郎	三八
渡邊藤助	二八	常議員 藤田平吉	三八
河合龍節	三〇	常議員 石川愛次郎	三八
組長 間宮清左衛門	三五		

▲經費、 明治二十九年以降各年度ノ豫算左ノ如シ。

年度	總額	縣補助	郡補助	年度	總額	縣補助	郡補助
明治二九年	四六八圓	一〇	一四	明治三四年	四一四圓	一〇	五〇
三〇	五八九	一七	六〇	三五	三八四	一〇	五〇
三一	四一二	一	六〇	三六	四五三	一〇	六〇
三二	五一五	一〇	六〇	三七	四四八	一〇	三〇
三三	五九六	一〇	三〇	三八	四六七	一〇	一

▲經費、十九年度以降、三十年度ニ至ル經費ハ詳ナラサルニ付、三十一年度以降ノモノヲ示セハ左ノ如シ。

年 度	總 額	縣 補 助	年 度	總 額	縣 補 助
明治三一年	三八三圓	一圓	明治三八年	二七六圓	一圓
三二	?	?	三九	二四五	一圓
三三	六三四	一圓	四〇	一六八	一圓
三四	五三三	一圓	四一	一九八	一圓
三五	四一五	一圓	四二	三三四	一圓
三六	四〇〇	一圓	四三	四三四	一圓
三七	六〇九	一圓	四四	六二九	一圓

備考 郡補助ハ未詳ナルヲ以テ略ス

富士郡蠶絲業組合

▲由來、明治十八年八月高瀬牧太郎、池谷繁太郎、池谷佐平等蠶絲業組合設立ノ件ニ就キ其筋へ建議シタルカ、翌十九年三月同組合準則發布セラレシカハ、翌四月富士郡蠶絲業組合ヲ創設シテ、事務所ヲ大宮町ニ置キ以テ今日ニ至レリ。

▲事業、明治二十八年以降各年度ニ於ケル獎勵事業ノ一般ヲ表記セハ左ノ如シ。

年 度	施 設 事 業	經 費	年 度	施 設 事 業	經 費
明治二八年	繭生絲品評會、講話會開設	?	明治三七年	模範消毒所各村設置、繭品評會、蠶業改良派員設置	二〇〇圓
二九	講話會開設、養蠶傳習所設置	?	三八	講話會、模範消毒所設置	一八五
三〇	養蠶模範所設置	?	三九	講話會、繭及桑園品評會設置、桑園害虫驅除施行、蠶病消毒施行	二二〇
三一	養蠶模範所設置、蠶種貯藏器配付	?	四〇	講話會、桑園増殖改良、蠶蛆驅除、巡回教師設置	四六〇
三二	人工養蠶試驗、養蠶教師設置	?	四一	講話會、桑園品評會、桑苗配布、巡回教師設置	四五五
三三	養蠶模範所、養蠶教師設置	〇圓	四二	講話會、繭品評會、稚蠶共飼育獎勵、巡回教師設置	四六五
三四	講話會、養蠶教師設置	三〇〇	四三	講話會、桑園品評會、巡回教師設置	四九〇
三五	講話會開設	三〇〇	四四	講話會、桑園品評會、桑園試作地補助、桑園委託改良其他設置	四九一
三六	講話會開設、繭桑園品評會開設	二二〇			

▲役員、組合創設ノ翌二十九年以降其在任狀況ハ左ノ如シ。

氏 名	任 期	氏 名	任 期
幹事 高瀬牧太郎	自明治二九年	漆畑健三	自明治二九年
副幹事 池谷佐平	一九二九年	古郡米作	三七四年
組長 高瀬牧太郎	三二九年	石田兼次郎	四一現今
副組長 鹽川平太郎	三三五年	池田習治	二九現今
組長 深澤米太郎	三四現今	書記 渡邊里次郎	三〇現今
		主計 計兼	

氏名	任	期	氏名	任	期
望月平太郎	自二六	至三八	五十嵐勝太郎	三六	四〇
赤堀金作	三八	三九	長澤嘉十郎	四〇	四〇
望月久太郎	三九	四〇	平岡喜太郎	四〇	四〇
望月省三	四〇	四三	木下新作	四〇	四〇
望月千代	四〇	現今	橋本馬吉	四〇	四〇
望月謙作	四〇	現今	遠藤平三郎	四〇	四〇
評議員 赤堀金作	三六	三八	事務員 杉山清作	四四	現今

▲經費、明治二十六年以降各累年度豫算並補助費支途別左表ノ如シ。

年度	總額	縣補助	郡補助	年度	總額	縣補助	郡補助
自二六	六〇九	〇〇	〇〇	明治二〇年	八八六	〇〇	五〇
三三	五八一	〇〇	〇〇	二一	八八六	〇〇	〇〇
三四	六四九	〇〇	〇〇	二二	九二九	〇〇	〇〇
三五	六三四	〇〇	〇〇	二三	八四二	〇〇	〇〇
三六	六四九	〇〇	〇〇	二四	九二九	〇〇	〇〇
三七	六三四	〇〇	〇〇	二五	八四二	〇〇	〇〇
三八	六五九	〇〇	〇〇	二六	一、五七一	〇〇	〇〇
三九	六八三	〇〇	〇〇	二七	一、五八六	〇〇	〇〇

安倍郡蠶絲業組合

▲由來、 静岡縣甲第九十號組合規則ニ據リ、明治十九年三月志太、益津、有渡、安倍、庵原ノ五郡ヲ以テ静岡組合ヲ組織シ、事務所ヲ静岡札ノ辻町ニ置ク、翌二十年榛原郡ヲ合シ有渡外五郡蠶絲業組合ト改メテ事務所ヲ研屋町ニ移セシカ、二十一年静岡縣蠶絲業取締規則發布ニ依リ、組織ヲ變更シテ榛原郡ヲ除キ有渡外四郡蠶絲業組合ト稱ス、越エテ二十四年三月ハ庵原郡二十六、二十七年二月ハ志太、益津ノ二郡ヲ分離シ、革メテ静岡市外二郡蠶絲業組合ト爲ス、同三十年三月ニ至リ静岡市ノ獨立ト共ニ之ヲ分離シテ有渡、安倍郡蠶絲業組合ヲ設立シ事務所ヲ静岡市追手町ニ置キタルカ、同時ニ郡廢置ノ結果安倍郡蠶絲業組合ト改稱シテ今日ニ至レリ。

▲事業、 組合創立後翌二十八年以降各年度ニ於ケル其概要左ノ如シ。

年度	施設事業	經費	年度	施設事業	經費
明治二八年	巡回教師、模範飼育場、巡回講話開設	一九圓	明治三二年	巡回教師、巡回講話開設	二〇圓
二九	巡回教師、模範飼育場、巡回講話開設	七三	三三	講習會、消毒器購入、消毒法巡回講話開設	二〇二
三〇	巡回教師、模範飼育場、巡回講話開設、蠶種配付、桑苗配付、蠶種貯藏器購入	六四	三四	消毒器購入、講習會、養蠶並消毒講話開設	二一一
三一	巡回教師、模範飼育場、巡回講話開設	六七	三五	消毒器購入、講習講話會、蠶絲業大會開催	一六六

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 安部郡蠶絲業組合

二百十四

三六	講習講話會開設、小組合設置獎勵、消毒器購入	二〇四	四一	巡回教師補助、桑園改良補助、講習講話會開設、消毒獎勵、蠶蛆驅除施行	六二九
三七	巡回教師補助、消毒實行獎勵、講習講話會開設	二九四	四二	技術員設置、桑園改良、講習講話會開設、消毒獎勵、巡回教師補助、層整理講習開設、殺菌乾器補助、蠶蛆驅除並同歩合調査、繭蠶種品評會開設	一一〇
三八	巡回教師補助、消毒實行獎勵、蠶蛆驅除施行、桑園改良獎勵	三五二	四三	技術員設置、巡回教師補助、講習會、桑園品評會其他開設	一、二八七
三九	巡回教師補助、模範桑園補助、講習講話會開設、蠶蛆驅除施行	五四三	四四	技術員設置、講習講話會、蠶病豫防、桑園品評會其他開設	一、二七五
四〇	巡回教師補助、模範桑園補助、講習講話會開設、消毒獎勵、蠶蛆驅除施行	五三一	四四		

▲役員、組合創設以來其任ニ當レル者ノ一般ヲ示セハ左ノ如シ。

氏名	任職期	氏名	任職期
幹事 寺尾寛三郎	自明治九年五月至明治二十一年	技手 池田國太郎	自明治四年至現今
吉川和三郎	一九二二	取締員 寺尾昌太郎	現任
織田喜作	二二二六	萩野初藏	現任
長 吉川和三郎	二六二八	澤田歌藏	現任
寺尾昌太郎	二八現今	常務委員 石上紋次郎	四二現今
副組長 萩野初藏	四二現今	齋藤榮吉	四二現今

▲經費、二十八年以降各年度ノ豫算左ノ如シ。

年度	總額	縣補助	郡補助	年度	總額	縣補助	郡補助
明治二十八年	八〇圓	〇	〇	明治三十七年	六一七圓	〇	〇
二十九年	二一五	〇	〇	三十八年	七一九	〇	〇
三十年	一九五	〇	〇	三十九年	九一九	〇	〇
三十一年	二六六	〇	〇	四十年	九五九	〇	〇
三十二年	三〇七	〇	〇	四十一年	一、三三七	〇	〇
三十三年	四五八	〇	〇	四十二年	一、七七八	〇	〇
三十四年	四六九	〇	〇	四十三年	二、二六四	〇	〇
三十五年	四二六	〇	〇	四十四年	二、一六一	〇	〇
三十六年	五〇九	〇	〇	四十五年	二、二五五	〇	〇

静岡市蠶絲業組合

明治二十八年	八〇圓	〇	〇	明治三十七年	六一七圓	〇	〇
二十九年	二一五	〇	〇	三十八年	七一九	〇	〇
三十年	一九五	〇	〇	三十九年	九一九	〇	〇
三十一年	二六六	〇	〇	四十一年	一、三三七	〇	〇
三十二年	三〇七	〇	〇	四十二年	一、七七八	〇	〇
三十三年	四五八	〇	〇	四十三年	二、二六四	〇	〇
三十四年	四六九	〇	〇	四十四年	二、一六一	〇	〇
三十五年	四二六	〇	〇	四十五年	二、二五五	〇	〇
三十六年	五〇九	〇	〇				

▲由來、明治二十六年二月静岡市及安倍、有渡二郡ニテ蠶絲業組合ヲ創立シ、静岡市外二郡蠶絲業組合ト稱ス、同三十年市ノ獨立スルニ當リ組合モ亦分離シテ静岡市蠶絲業組合ヲ設置シ、組長ノ許ニ於テ事務ヲ執リ來リタルモ、四十二年七月以降静岡商業會議所内ニ於テ執務シツ、アリ。

▲事業、本組合員ハ從來栽桑、繭、生絲等ノ生産的事業ヲ營ム者尠ナク、却テ賣買業者ノ多キ所以ハ組合直接ニ改良又ハ獎勵事業ニ携ハラサルカ如キ傾向アルニ因レルヲ以テ、専ラ是等弊害ノ矯正ニ努メツ、アリ。

▲役員、組合創設以來其任ニ當レル者ノ一般ヲ示セハ左ノ如シ。

氏名	任	氏名	任
博林宇太郎	自明治二六年至明治二八年	西谷記一	自明治二八年至明治三〇年
長 戸塚利作	明治二八年	戸塚市太郎	明治二八年
永介文次郎	明治二八年	市川常吉	明治二八年
市川常吉	明治二八年	渡邊源重	明治二八年
尾崎角次郎	明治二八年	澤野乙次郎	明治二八年
常務委員 武田友吉	明治二八年	梅田宗太郎	明治二八年
戸塚利作	明治二八年	木久作	明治二八年

▲經費、明治二十六年以降各年度ニ於ケル其豫算ヲ掲クレハ左ノ如シ。

年 度	總 額	年 度	總 額
明治二六年	一八圓	明治二八年	五九圓
明治二七年	一三圓	明治二九年	六一圓
明治二八年	五四圓	明治三〇年	七一圓
明治二九年	七五圓	明治三一年	七一圓
明治三〇年	九一圓	明治三二年	六九圓
明治三一年	六五圓	明治三三年	八三圓

備考 縣補助及郡補助ハ未詳ナルヲ以テ略ス

志太郡蠶絲業組合

▲由來、明治十九年三月組合規則ニ據リ志太、益津二郡ハ静岡組合ニ合同シ、翌二十年五月有渡外五郡蠶絲業組合ノ設置セラル、ニ當リテ是ニ加入ス、越エテ同二十六年二月更ニ分離シテ志太、益津蠶絲業組合ト稱シ、廿九年ノ郡廢置ニ依リテ志太郡蠶絲業組合ヲ組織シ以テ現今ニ及ヘリ。

▲事業、二十六年以來各年度ニ於ケル其獎勵大要ヲ掲クレハ左ノ如シ

年 度	施 設 事 業	經 費	年 度	施 設 事 業	經 費
自明治二〇年	傳習所設置	?	明治二九年	共同催青補助、高等講習會、消毒講習會開設、噴霧器配付、蠶種希望検査、蠶蛆驅除	二二五圓
自明治二一年	巡回教師設置	?	明治三〇年	講習講習會、屠繭整理傳習會、巡回教師設置	一八五圓
自明治二二年	講習會開設、蠶種桑苗配付、消毒器購入	二二四圓	明治三一年	講習講習會、屠繭整理傳習會、巡回教師設置、屠繭整理傳習會、巡回教師設置	二四五圓
自明治二三年	講習會開設、桑園共進會開設、消毒器購入	一六四圓	明治三二年	講習講習會、屠繭整理傳習會、巡回教師設置、屠繭整理傳習會、巡回教師設置	二四五圓
自明治二四年	講習會、桑園品評會開設	二一〇圓	明治三三年	講習講習會、屠繭整理傳習會、巡回教師設置、屠繭整理傳習會、巡回教師設置	三四五圓
自明治二五年	雜糞共同飼育補助、講習會、繭及桑園品評會、巡回教師設置	二七〇圓	明治三四年	講習講習會、屠繭整理傳習會、巡回教師設置、屠繭整理傳習會、巡回教師設置	四一〇圓
自明治二六年	繭及桑園品評會開設、雜糞共同飼育補助	?	明治三五年	講習講習會、屠繭整理傳習會、巡回教師設置、屠繭整理傳習會、巡回教師設置	四一〇圓
自明治二七年	消毒器購入	二六〇圓	明治三六年	講習講習會、屠繭整理傳習會、巡回教師設置、屠繭整理傳習會、巡回教師設置	四一〇圓
自明治二八年	消毒器購入	二六〇圓	明治三七年	講習講習會、屠繭整理傳習會、巡回教師設置、屠繭整理傳習會、巡回教師設置	四一〇圓

▲役員、第一期以來各其任ニ當レル者ハ左ノ如シ。

氏名	任期	氏名	任期
組長 山下彦次郎	自第一期至第三期	常議員 彦坂才次郎	第二期 中
副組長 山下耕哉	第四期 第五期 現今	常議員 向坂潤太郎	第三期 中
副組長 金原嘉吉	第六期 現今	常議員 真知東太郎	第五期 中
常務員 池田傳吉	第七期 現今	常議員 金原嘉吉	第六期 中
	第四期 中		

▲經費、二十六年以降各年度ニ於ケル其豫算ノ概要ハ左ノ如シ。

年度	總額	縣補助	郡補助	年度	總額	縣補助	郡補助
明治二六年	六二四	—	取締所 二〇四	明治二五年	六七四	—	—
二七	一五四	—	同 二〇〇		七七五	—	—
二八	一八二	—	同 二〇〇		七六三	—	—
二九	二一〇	—	同 一五〇		七二一	—	—
三〇	二八〇	—	同 二〇〇		六八一	—	—
三一	四四三	—	同 二〇〇		七九六	—	—
三二	六三六	—	—		九四六	—	—
三三	六九六	—	—		九六〇	—	—
三四	六四二	—	—			—	—

榛原郡蠶絲業組合

▲由來、明治二十年静岡組合ニ合同シテ有渡外五郡蠶絲業組合ト稱シタルカ、翌二十一年ニハ蠶絲業取締規則ノ發布ニ依リ更ニ分離シテ佐野、城東二郡ト合セシカハ佐野外二郡蠶絲業組合ト稱ス、越エテ二十六年四月遂ニ獨立シテ榛原郡蠶絲業組合ヲ設立シ、事務所ヲ郡役所内ニ置キ爾來繼續シテ今日ニ及ヘリ。

▲事業、三十三年以降各年度ニ於ケル獎勵ノ概要ハ左ノ如シ。

年度	施設事業	經費	年度	施設事業	經費
明治三三年	巡回教師設置	合一、二〇四圓	明治三一年	講習講話會、巡回教師、蠶業取締員、桑苗園設置、小組補助、蠶種貯藏	五九六圓
三八	講習講話會、蠶種貯藏	二二九		講習講話會、巡回教師、蠶業取締員、桑苗園設置、蠶業調査	六一八
三九	講習講話會、巡回教師、蠶業研究會開設	三二六		講習講話會、巡回教師、蠶業取締員、桑苗園設置、蠶業調査	四三一
四〇	講習講話會、巡回教師、蠶業取締員、桑苗園設置、蠶業調査、蠶種貯藏	六五三		講習講話會、巡回教師、蠶業取締員、桑苗園設置、蠶業調査、秋蠶傳習開設	六六二

▲役員、二十六年組合ノ獨立以來其任ニ當レル者ハ左ノ如シ。

氏名	任期	氏名	任期
組長 佐藤長郎	自二六至三四	常議員 鷺山喜一郎	現任
副組長 松下幾平	三四 現今	常議員 村松彌平	現任
常議員 大井良平	現任		

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 小笠郡蠶絲業組合
 ▲經費、二十八年以降各年度ノ豫算ハ左ノ如シ。

年度	總額	縣補助	郡補助	年度	總額	縣補助	郡補助
明治二八年	六八圓	一五圓	一〇圓	明治三六年	三〇三圓	一〇〇圓	一〇〇圓
二九	一二六	一五	二〇	三〇	三〇六	一〇〇	一〇〇
三〇	二二二	三一	四〇	三一	五一七	一〇〇	一〇〇
三一	二二〇	一〇	五〇	三二	五一六	一〇〇	一〇〇
三二	二六八	一〇	四〇	三三	九九五	一〇〇	一〇〇
三三	三七八	一〇	一〇五	三四	一、〇〇三	三一〇	一〇〇
三四	五一四	一〇	四	三五	九六〇	二二三	一三〇
三五	五一四	一〇	四	三六	七九五	一〇〇	一三〇

小笠郡蠶絲業組合

▲由來、明治十九年四月、佐野、城東、山名、周智、磐田、豊田ノ六郡相合シテ蠶絲業組合ヲ設立シ、豊田外五郡蠶絲業組合ト稱ス、然ルニ同二十一年ニハ佐野、城東、周智、山名ノ四郡ハ同組合ヨリ分離シタルカ、更ニ榛原郡ヲ合シテ佐野外四郡蠶絲業組合ヲ組織セシカハ、事務所ヲ掛川町ノ農學社内ニ設ケ高鳥甚三郎ハ組長服部徳八ハ副組長ニ就職ス、當時組合員ハ八百名販賣者ハ百名アリテ、經費參百圓内外ヲ以テ同學社内ニ養蠶傳習所ヲ設ケテ生徒ヲ養成セリ、同二十三年周智、山名ヲ解キテ佐野、城東、榛原三郡トナリ、組長ニ原庄太郎副組長ニ服部徳八就職シ、同二十六年更ニ榛原郡ヲ分離シテ佐野、城東郡蠶絲業組合ト改稱シ、桑苗共同購入養蠶及微粒子検査法傳習等ヲ行ヒ、二十八年佐野、城東二郡ハ合併シテ小笠郡ヲ置クニ當リ、組合モ亦改メテ小笠郡蠶絲業組合ト稱シ副組長ヲ廢シテ組長ニ岡田多作就職ス、此年東山山口村ニ郡立養蠶傳習所ヲ開設ス、傳習所ハ同村鈴木利平ノ蠶室ニシテ埼玉縣競進社ノ構造ニ則リ二十七年建築シタルモノヲ置キ、三十三年ヨリ巡回教師ヲ雇ヒテ各町村ノ養蠶家ニ就キ實地指導ヲナサシメ、又一面ニハ講習講話會ヲモ開キテ漸次改良發展ノ實ヲ擧ケツ、今日ニ至レリ。

▲事業、明治三十二年以降ニ於ケル梗概左ノ如シ。

年度	施設事業	經費	年度	施設事業	經費
明治三二	傳習所補助、傳習所教師設置、蠶種共同飼育獎勵、巡回講話開設、蠶種共同購入	三六〇	明治三九	消毒器購入、傳習所補助、蠶品評會並桑樹栽培試驗園設置、講習會及蠶業調查會開設、蠶組除糞獎勵	三八八
三三	消毒器購入、傳習所補助、巡回教師補助	二八〇		講習會並殺蠶乾菌器備付補助、蠶組豫防検査員設置並其被害調査、桑樹栽培試驗園、簡易女子講習會、蠶業改良調査會	七二八
三四	巡回教師補助、傳習所補助、共進會開設、物産陳列館建築費負担	二七〇		講習會並殺蠶乾菌器備付補助、蠶組豫防検査員及桑樹栽培試驗園設置、蠶組被害調査、簡易女子講習會開設、蠶業改良調査、眞綿製造法傳習、蠶業統計編製	七二八
三五	消毒器購入、傳習所補助、物産陳列館建築費負担、巡回教師設置	六〇六		講習會開設、蠶組豫防検査員設置並其被害調査、桑樹栽培試驗園設置、蠶業統計編製、蠶業調査會及屠繭整理講習會開設、品評會並關西府縣共進會出品獎勵	一、一五七
三六	消毒器購入、巡回教師及傳習所補助	三三三			
三七	消毒器購入、巡回教師及傳習所補助	三八〇			
三八	消毒器購入、巡回教師及傳習所補助、消毒技術員雇入	四〇二			

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 小笠郡蠶絲業組合

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 小笠郡蠶絲業組合

二百二十二

四三	講習會並屠物整理講習會、蠶業改良調査會、蠶組被害調査開設、蠶業講習生補助桑園品評會、技術員設置	二、七九〇	四四	講習會並桑園品評會、蠶室品評會、技術員設置、蠶組被害調査其他	一、二四〇
----	---	-------	----	--------------------------------	-------

▲役員、組合創設以來各其任ニ當レル者ハ左ノ如シ。

氏名	任	氏名	任
高鳥甚三郎	自一九二二	松下市太郎	自三二
原庄太郎	二三	岡田多作	三二
岡田多作	二八	藤野藤平	三三
角政吉	三二	服部徳八	三三
平尾平十	三四	久野長三郎	三三
松浦五兵衛	三八	森本幸	三四
富田庄吉	四三	鈴木半六	三四
副組長 服部徳八	二三	鈴木正一	三六
理事 鈴木正一	三八	鈴木健次郎	三六
鈴木林平	二八	淺羽芳三郎	三八
角皆政	二八	吉岡啓二	三八
高木録郎	二八	淺井龍尾	四〇
高木忠藏	二八	夏目善五郎	四〇
榎木稔彌	二八		

▲經費、三十一年以降各年度ニ於ケル豫算ノ概況ハ左ノ如シ。

年度	總額	縣補助	郡補助	年度	總額	縣補助	郡補助
明治三一年	五三六圓	一〇〇圓	一圓	明治三八年	一、〇一八圓	一〇〇圓	三〇〇圓
三二	七七五	一〇〇圓	一〇〇圓	三九	一、〇二六	一〇〇圓	三〇〇圓
三三	六五五	一〇〇圓	一〇〇圓	四〇	一、四九三	一〇〇圓	三五〇圓
三四	七六二	一〇〇圓	一〇〇圓	四一	一、四九三	一〇〇圓	三五〇圓
三五	一、二三四	一〇〇圓	一〇〇圓	四二	一、四九八	一〇〇圓	三五〇圓
三六	一、〇六八	一〇〇圓	一〇〇圓	四三	三、九四四	一〇〇圓	三五〇圓
三七	九三五	一〇〇圓	一〇〇圓				

周智郡蠶絲業組合

▲由來、明治十九年四月佐野、城東、山名、周智、磐田、豊田ノ六郡合併シテ蠶絲業組合ヲ創設シ、之ヲ豊田外五郡蠶絲業組合ト稱ス、同二十三年周智、山名ノ二郡相分離シテ、周智、山名郡蠶絲業組合ヲ組織シ、又二十六年三月山名郡ヲ解キ始メテ周智郡蠶絲業組合ト改稱シ以テ今日ニ至レリ。

▲事業、二十八年以降各年度ニ於ケル其獎勵ノ一般ヲ掲ケレハ左ノ如シ。

年度	施設事業經費	年度	施設事業經費
自二九	養蠶傳習所開設	自三〇	巡回教師設置
至二八	?	至二〇	?

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 周智郡蠶絲業組合

二百二十三

三三	蠶種共同購入補助	四〇〇圓	四〇	消毒器購入、巡回教師、養蠶傳習所開設、蠶蛆取締	六八八
三五	蠶種共同購入補助、消毒器購入、消毒講話會開設	二二〇	四一	消毒器購入、巡回教師、養蠶傳習所開設、蠶蛆取締	六八八
三六	消毒器購入、巡回教師、講話會開設	一八〇	四二	消毒器購入、巡回教師設置、共同催青補助、蠶蛆取締	四四九
三七	消毒器購入、巡回教師、講話會開設	二二四	四三	桑園品評會、巡回教師、共同催青補助、蠶蛆取締	四八八
三八	消毒器購入、巡回教師、講話會開設	三八四	四四	桑園品評會、巡回教師、共同催青補助、蠶業講習生補助	三六八
三九	消毒器購入、巡回教師、講話會開設	三二八	四四		

▲役員、二十三年以降其任ニ當レル者ハ左ノ如シ。

氏名	任期	氏名	任期
組長 福川泉吾	明治三五年至明治三七年	組長 福川五郎八	明治三七年至今
副組長 米八郎	明治三五年至明治三七年	副組長 田邊三郎平	明治三七年至今
久永貞次郎	明治三四年		

▲經費、二十六年以來各年度豫算ノ大要左ノ如シ。

年度	總額	縣補助	郡補助	年度	總額	縣補助	郡補助
明治二六年	一一六圓	一〇〇	一六	明治三五年	三三六圓	一〇〇	二三六
明治二七年	一一六圓	一〇〇	一六		三二〇	一〇〇	一二〇

二八	一三六			三七	三五六	一〇〇	一〇〇
二九	三六四			三八	五三〇	一〇〇	一〇〇
三〇	二二七			三九	四七七	一〇〇	一〇〇
三一	二二三			四〇	六九八	一〇〇	一〇〇
三二	二六九	一〇〇		四一	八〇四	一〇〇	一〇〇
三三	三二六	一〇〇		四二	六七二	一〇〇	一〇〇
三四	二九六	一〇〇		四三	七〇一	一〇〇	一〇〇

磐田郡蠶絲業組合

▲由來、明治十八年本縣甲第九十九號及同十九年三月本縣甲第三十四號布達ニ基キ、同四月二十八日豊田、山名、磐田、周智、佐野、城東、六郡聯合シテ豊田外五郡蠶絲業組合ヲ設立ス、翌二十一年ニハ周智、山名、佐野、城東ノ四郡分離セシヲ以テ豊田、磐田郡蠶絲業組合ト改稱シ、同二十六年三月縣令第二十二號蠶絲業取締規則ニ依リ、更ニ山名郡ヲ合シテ豊田、磐田、山名郡蠶絲業組合ト改メ、同二十九年郡廢置ノ結果豊田郡ノ内赤佐、中瀬、龍池、豊西、中ノ町ノ五ヶ村ヲ除キ長上郡ノ内掛塚町及山名郡ヲ加ヘテ、新ニ磐田郡ヲ置クニ當リ組合モ亦現今ノ名稱ヲ用フルニ至レリ。

▲事業、二十七年以降各年ニ於ケル獎勵ノ一般ヲ表示セハ左ノ如シ。

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 濱名郡蠶絲業組合

三九	三八	三七	三六	三五	三四
一、八九三	一、三三一	一、三六四	一、七三〇	一、七六九	一、八八四
一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一五〇	一〇〇	一〇〇	二五〇	一六八	二六〇
四四	四三	四二	四一	四〇	四〇
二、一七四	二、〇六〇	二、一八四	二、三二七	一、八七〇	一、八七〇
一〇〇	一〇〇	二二九	一〇〇	一〇〇	一〇〇
三五〇	三〇〇	三〇〇	二五〇	二五〇	二五〇

濱名郡蠶絲業組合

▲由來、静岡縣令甲第九十九號ニ基キ、明治十九年敷知、長上、濱名、引佐、庵玉ノ五郡ニ於ケル蠶絲業者聯合シテ、敷知外四郡蠶絲業組合ヲ創設シ、幹事ニハ伊藤久次郎就任シ事務所ヲ新所村ニ置ク、翌二十一年長上、庵玉ヲ分離シテ敷知外三郡蠶絲業組合ト稱シ、同二十六年四月ニハ又引佐郡ヲ分離シテ更ニ長上郡ヲ合セ、敷知、長上、濱名郡蠶絲業組合ト改稱シ事務所ヲ濱松ニ設ケタルカ、同三十年郡廢置ニ依リ敷知、長上、濱名ノ三郡及豊田郡ノ内赤佐、中瀬、龍池、豊田、中ノ町ノ五ヶ村ヲ加ヘテ、新ニ濱名郡ヲ置クニ當リ現今ノ組合ヲ組織スルニ至レリ。

▲事業、組合創設以來傳習又ハ講習講話等ノ事業ヲ勵行シ來リシモ、同三十四年事務所並諸帳簿燒失ノ爲其以前ノ狀況明ナラサルヲ以テ三十三年以降ノ概要ヲ舉クレハ左ノ如シ。

年度	施設事業	經費	年度	施設事業	經費
明治三三年	消毒器五十個購入	四二五	明治四〇年	消毒器購入補助、殺蝨乾菌器補助、藥品評會開催、講習講話會補助	一、三九〇
三三	消毒器購入並講話會開催、藥品評會開催	三三〇	四一	消毒器購入補助、講習講話會補助、殺蝨乾菌器補助、組合取締會開催	一、四三〇
三四	消毒器購入並講話會開催、蠶蛆實上	二四〇	四二	消毒器購入補助、講習講話會開催、屠菌整理傳習所設置、藥品評會開催	一、四七五
三五	消毒器購入、蠶蛆豫防、巡回教師設置、講習會開催	二〇〇	四三	消毒器購入補助、講習講話會開催、屠菌整理講習會開催	二、八〇〇
三六	消毒器購入補助、講習講話會補助、蠶蛆驅除	二〇〇	四四	消毒器購入補助、講習講話會開催、屠菌整理講習會開催、蠶蛆取締、桑園品評會開催	二、八五四
三八	消毒器購入補助、講習講話會補助、藥品評會開催	二一〇			
三九	消毒器購入補助、講習講話會補助、藥品評會開催	二一〇			

備考 三十七年ハ未詳ナルヲ以テ略ス

▲役員、創立以來其任ニ當レル者左ノ如シ。

氏名	任職期	氏名	任職期
幹事 伊藤久次郎	自一九一九至二〇二四年	幹事 鈴木増榮	自三四年至四〇年
組長 山下次郎	二〇〇四年	組長 佐藤彌七	三三四年
副組長 岡部次郎	四〇〇四年	副組長 三輪新五	三三〇四年
副組長 岡部次郎	三〇〇四年	副組長 鈴木嘉七	三三六〇年
副組長 山田福次郎	四〇〇四年	副組長 袴田善五	三三六〇年
副組長 青山彌七	三〇〇四年	副組長 袴田兵衛	三三六〇年
常議員 柱村次	三〇〇四年	常議員 深井鑑一	三三八〇年
		常議員 袴田善五	三三六〇年
		常議員 袴田善五	三三六〇年
		常議員 袴田善五	三三六〇年
		常議員 袴田善五	三三六〇年

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項

濱名郡蠶絲業組合

常議員		山田 福次郎	三 八 四 〇	現 今
常議員		鈴木 米 薫	四 〇	現 今
常議員		結川 熊 重	四 〇	現 今
常議員		山本 勝 治	四 〇	現 今

▲經費、明治三十四年以前ハ帳簿燒失ノ爲不明ナルヲ以テ、此レ以後ノモノヲ舉クレハ左ノ如シ。

年 度	總 額	縣 補 助	郡 補 助	年 度	總 額	縣 補 助	郡 補 助
明治三十五年	三六五圓	一〇〇圓	一〇〇圓	明治三十四年	一九〇九圓	一〇〇圓	二五〇圓
三 六	五一三	一〇〇圓	一〇〇圓	三 六	二、〇五四	一〇〇圓	三〇〇圓
三 七	四六七	一〇〇圓	一〇〇圓	三 七	二、二三〇	一〇〇圓	三〇〇圓
三 八	四一〇	一〇〇圓	一〇〇圓	三 八	三、五四〇	一〇〇圓	三〇〇圓
三 九	七一〇	一〇〇圓	一〇〇圓	三 九	三、七三一	一〇〇圓	四〇〇圓

引佐郡蠶絲業組合

▲由來、明治十九年敷知、長上、濱名、引佐、庵玉ノ五郡聯合シテ蠶絲業組合ヲ組織シ、同二十一年長上、庵玉二郡分離シテ長上外一郡蠶絲業組合ト稱シ、事務所ヲ貴布禰ニ置キ幹事ニ平野六郎就任ス、同二十四年五月金指町ニ支所ヲ分置シ同二十六年四月ニハ組合區域ヲ變更シテ引佐、庵玉郡蠶絲業組合ト稱シ金指町ニ事務所ヲ置ク、同三十年二月郡廢置ニ依リ引佐、庵玉ノ二郡ヲ廢シテ新ニ引佐郡ヲ置クニ當リ現今ノ組合ニ改メ以テ今日ニ至レリ。

▲事業、二十六年以來各年度ニ於ケル獎勵ノ概要ヲ掲クレハ左ノ如シ。

年 度	施 設 事 業	經 費	年 度	施 設 事 業	經 費
明治二六年	巡回講話、法規取締、蠶種検査、繭出品勸誘、法規取締、蠶種検査、静岡縣米外九品共進會	？圓	明治三六年	講習會、共同催青補助、取締検査員	二〇一圓
二 七	養蠶傳習所、法規取締、蠶種検査	？	三 七	養蠶傳習所、共同催青補助、取締検査員、蠶種希望検査補助	？
二 八	養蠶傳習所、法規取締、蠶種検査	？	三 八	講習講話會、共同催青補助、取締検査員、蠶種希望検査補助	二一〇
二 九	養蠶傳習所、法規取締、蠶種検査	？	三 九	講習會、繭品検査補助、取締検査員、蠶種希望検査補助	一七〇
三 〇	養蠶傳習所、法規取締、蠶種検査、講話會	？	四 〇	講習會、殺蛹乾繭器補助、取締検査員、蠶種希望検査補助	二三一
三 一	養蠶傳習所、顯微鏡使用法傳習、講話會、取締検査員	？	四 一	講習會、蠶絲會、静岡支會、品評會出品補助、取締検査員	二一六
三 二	講話會、取締検査員	？	四 二	講習會、關西府縣聯合共進會、繭出品選拔品評會、取締検査員	二一六
三 三	消毒器購入、蠶種検査、講話會	二〇四	四 三	講習會、桑園品評會、取締検査員、屠繭整理講習會	三六五
三 四	消毒器購入、蠶種検査、講話會、取締検査員	二〇三	四 四	講習講話會、桑園品評會、取締検査員、屠繭整理講習會、稚蠶講習講話會、取締検査員、勸業博覽會出品勸誘	五二三
三 五	講習講話會、取締検査員、勸業博覽會出品勸誘	二〇〇	四 四	講習講話會、桑園品評會、取締検査員、屠繭整理講習會、稚蠶講習講話會、取締検査員、勸業博覽會出品勸誘	五二三

▲役員、二十一年以來其任ニ當レル者ハ左ノ如シ。

氏 名	任 期	氏 名	任 期
幹事 平野 六郎	明治二一年至二六年	組長 後藤 角平	明治二六年至現今

副組長		池田猪三	二六二七	大石桑太郎	二八現今
高橋信次	山田武助	平山太郎	二八二九	田中秀次	三八現今
高橋信次	山田武助	田中秀次	三〇三一	高橋信次	三八現今
高橋信次	山田武助	田中秀次	三二三四	加藤類次	四〇現今
高橋信次	山田武助	田中秀次	四四現令	野末萬一	四〇現今
常議員		野末萬一	一	加藤類次	四〇現今

▲經費、二十六年以降各年度ニ於ケル豫算ヲ表示セハ左ノ如シ。

年次	總額	縣補助	郡補助	年次	總額	縣補助	郡補助
明治二六年	一二六圓	〇	〇	明治三五年	四四二圓	一〇〇圓	〇
二七	一四一	〇	〇	三六	四四四	一〇〇圓	〇
二八	二一六	〇	〇	三七	五〇三	一〇〇圓	〇
二九	二〇五	〇	〇	三八	五〇一	一〇〇圓	〇
三〇	二七二	〇	〇	三九	四九〇	一〇〇圓	〇
三一	三〇八	〇	〇	四〇	六二三	一〇〇圓	〇
三二	三三〇	〇	〇	四一	六六八	一〇〇圓	〇
三三	三〇五	〇	〇	四二	八四七	一〇〇圓	〇
三四	四五四	一〇〇圓	〇	四三	八四五	一〇〇圓	〇

大日本蠶絲會靜岡支會

明治四十年大日本蠶絲會ハ組織ヲ社團法人ト改メ、各地ニ支會ヲ設置スルニ際シ、本縣亦其設置ノ必要ヲ認ムルニ至レリ、然ルニ曩ニハ西部ノ一分ヲ畫シ西遠支會ヲ組織セルモノアリシカ、幾何ナラスシテ廢滅ニ歸シタリキ、當時ノ會員ハ縣下ヲ通シテ三百名ニ近ク、而モ之ヲ統一スル機關ナカリシカハ延テ會員相互ノ意思疎通ヲ欠キ斯業ノ發展上不便少ナカラサル折柄之カ設置ハ最モ時宜ニ恰適セルヲ以テ、本會理事者ト協議ノ上四十年二月靜岡支會ヲ創設スルニ至レル也、其會務狀況左ノ如シ。

△明治四十年 左ノ如シ。

- 一、商議員會、四月四日議員總數十五名ヲ縣廳ニ召集シ、支會々則草案發會式舉行後西遠支會善後策並會員募集方法等ヲ議決セリ。
- 一、蠶業講話會、同五月五日大日本蠶絲會々頭松平男爵ハ吉池理事ト共ニ、三重縣主催關西府縣聯合共進會へ出張ノ途次、縣廳構内蠶絲業諮問會ノ席上ニ於テ一場ノ講話ヲ爲シタリ。

△明治四十一年 左ノ如シ。

- 一、第一回總會、十月二十八日縣廳構内ニ於テ開會出席會員無慮二千名先ッ李家支會長議長席ニ着キ支會規則制定ノ件ニ付曩ニ商議員會ニ於テ作製シタル草案ヲ付議シ滿場一致ヲ以テ之ヲ可決ス、次テ生方幹事長ヨリ四十年度會務狀況及經費收支決算ヲ報告シ
- 一、發會式並品評會、當支會ハ戰後經濟界不振ノ餘波ヲ受ケ、沈衰セル當業者ノ意氣ヲ挽回スル第一着手トシテ、第一回蠶種、繭、生絲品評會ヲ開催シタルヲ動機トシテ支會ノ基礎ヲ確定セント、豫テ精

力ヲ是ニ集中スル所アリシカ、愈々新募集會員ハ豫定數一萬ノ半ニ達シ、出品モ亦各郡共ニ豫定數ニ達シタルヲ以テ、期日ヲ十月二十八日ト定メ改メテ當日總裁伏見宮殿下ノ臺臨ヲ稟請シ奉リシニ、畏クモ會頭ヲ經テ御採納ノ臺命ヲ下シ給ハルヤ、入會者ハ一舉シテ相次キシカハ本會ノ割當人員一萬ヲ超過スルコト五百有餘名ニ上リ、出品亦豫定數以上ニ達シテ所期以上ノ盛況ヲ呈セリ、式ノ當日ニ到リ朝來參集スル會員二千餘名ト註セラレ、又此カ會場ハ縣廳構内縣會議事堂ノ廣庭ヲ以テ充テ、議事堂入口ノ奥ニ殿下ノ御座所ヲ設ケタリ、伏見宮殿下ニハ午後一時十分御旅館ナル大東館ヲ御出門アラセラレ、支會長御先導申上ケ塚田御附武官、下岡農商務大臣代理、松平會頭、酒匂副會頭、吉池理事、鹽谷農商務技手其他ヲ隨ヘ會場ニ成ラセ賜ヘリ、御少憩ノ後廳テ一同席ニ着クヤ、支會長ノ御先導ニテ奏樂ノ内ニ 台臨在ラセラル、先ツ支會長ハ開會ヲ告ケ終リテ役員名簿、會員表、及品評會出品點數表ヲ捧呈シ、茲ニ 總裁殿下ニハ左ノ令旨ヲ賜ハリタリ。

令旨

惟フニ本邦ノ産業ハ其種類ニ乏シカラスト雖最モ良ク我邦ノ風土ニ適シ何人モ容易ニ之ヲ經營シ得テ海外ヨリ正貨ヲ吸收シ國民經濟ヲ潤澤ナラシムルモノハ蠶絲業ヲ措テ他ニ之ヲ求ムヘカラサルナリ然レトモ宇内ノ大勢國運ノ現状ハ富力ノ發達ヲ促シテ止マス富力ノ發達ハ蠶絲業ノ進歩ニ待ツ大ナルモノアレハ當業者蹶起奮闘スヘキノ秋ナリ静岡支會々員諸子此ニ觀ル所アリ銳意斯業ノ振興ヲ期シ今ヤ其產額ノ増加ト品質ノ改良トハ將ニ先進地方ヲ凌駕セムトスルノ概アリ殊ニ諸子能ク本會ノ趣旨ヲ體

シ協力以テ多數ノ會員ヲ増募シテ發會式ヲ舉ケ先ツ其事業ノ第一步トシテ品評會ヲ開催スルニ至ル洵ニ美事ナリト謂フヘシ本日親シク此式ニ臨ミ功勞アル諸子ニ有功章ヲ授與スルヲ得ルハ貞愛ノ深ク満足スル所ナリ庶幾ハ會員諸子小成ニ安ムセス障礙ヲ排シ艱難ニ耐ヘ斯業ノ改善進歩ニ努メ國家ノ富源ヲ涵養セムコトヲ期セヨ

明治四十一年十月二十八日

大日本蠶絲會總裁大勳位功二級 貞 愛 親 王

右令旨ヲ賜ハルヤ一 同最敬禮ヲ行ヒ支會長ハ御前ニ進出テ謹テ拜受シ次テ左ノ奉答ヲ爲セリ。

玆ニ大日本蠶絲會静岡支會發會式並蠶繭生絲品評會褒賞授與式ヲ舉行スルニ當リ親シク 總裁殿下ノ台臨ヲ辱フシ特ニ僥渥ナル令旨ヲ賜ハル洵ニ是レ本會無上ノ光榮ニシテ不肖隆介等ノ恐懼措ク能ハサル所ナリ惟フニ本邦蠶絲ノ業ハ年ト共ニ發達シテ今ヤ國產ノ重要ナル部分ヲ占メ世界蠶絲國ノ巨擘ヲ以テ稱セラレト雖其品質ハ未ダ伊佛ニ及ハス其產額ハ尙清國ニ若カス加之經濟界ノ變動ハ較モスレハ斯業ノ發展ヲ妨ケントス殊ニ近來米國經濟界ノ恐慌ニ由リテ打擊ヲ蒙リ爲ニ斯業ノ前途ヲ憂慮スルモノ尠ナカラサル時ニ當リ之カ獎勵ノ法ヲ設ケテ品質ノ改善ト生産ノ増加トヲ計リ以テ悲況ノ挽回ヲ講スルハ焦眉ノ急務ナリト抑我支會ハ斯ノ如ク斯業萎靡不振ノ際ニ開設セシニ不拘一タヒ 總裁殿下台臨アラセラル、ノ報傳ハルヤ苟モ斯業ニ從事スル者ハ皆感奮興起シテ立所ニ一萬有餘ノ入會者ヲ得二千五百餘點ノ出品ヲ見レニ至リテ能ク本會ノ目的ヲ達スル事ヲ得タリ之レ全ク 總裁殿下ノ德澤ニ依ルモノニシテ斯業ノ爲欣喜ニ堪ヘサル所ナリ然リト雖本縣ノ蠶絲業ハ前途猶遠達ナリ不肖隆介等益々奮勵努力以テ令旨ニ報イ奉ラシ事ヲ期ス 謹テ奉答ス

大日本蠶絲會静岡支會長正五位勳三等 李家 隆 介

右奉答シ終ルヤ松平會頭ハ御前ニ進ミ有功章授與ノ申請ヲ、吉池本會理事ハ功績錄ヲ朗讀シ、 總裁殿下

ヨリ左記功勞者七十九名ニ有功章ヲ御親授在ラセラレタリ。

- 一等有功章 李家隆介 二等有功章 小島源三郎、依田佐二平、生方五郎 三等有功章 天野千代丸、稻見明精、尾崎敏樹、桑原楯雄、木田龍助、雀部成宣、市川和雄、昌谷彰、辻芳太郎 四等有功章 長島弘裕、藤田佐士郎、鈴木勝太郎、小川省治郎、横山賢、太田兵太郎、寺田榮實、大澤富三三、小山銅太郎、阿部保太郎、飯島善太郎、岩浪爲治、石上巖太郎、鈴木七二郎、後藤隆、伊藤誠太郎、黒田龜次郎、井出源作 五等有功章 寺尾昌太郎外四十七名

右授與終テ有功章拜受者總代トシテ依田佐二平答辭ヲ述ヘ、次ニ蠶種繭生絲品評會褒賞授與式ニ移ルヤ、
 芳賀審査委員長ハ審査ノ梗概ヲ述ヘテ褒賞授與ノ申告ヲ爲シタリ。

申 告 文

大日本蠶絲會靜岡支會品評會出品ノ審査終了ヲ告ケ本日ヲシテ褒賞授與ノ典ヲ舉ケラレ不肖權四郎之ヲ審査委員長ノ重任ニ承ケ此盛式ニ列スルヲ得タルハ洵ニ光榮トスル所ナリ抑今回ノ出品ハ蠶種繭生絲ノ三種ニシテ蠶種ハ四百六點繭一千八百二點生絲百六點其他參考品ヲ加フルトキハ合計二千五百餘點ノ多キニ達シ加フルニ品質亦頗ル優良ノモノニ乏シカラサルハ當局勸奨ノ効果ニシテ亦當業者諸氏ノ熱心精勵ノ結果タラスンハ非ス今褒賞授與ノ稟申ヲ爲スニ當リ聊カ審査ノ概評ヲ試ミンニ蠶種ニ在リテハ其實質ニ於テハ病毒ノ稀少ナルト其外觀ニ於テハ産着、形狀ノ佳良ナルト共ニ他府縣蠶種ニ比シ敢テ遜色ヲ認メズト雖調製ノ粗雑ナルモノ及色澤ノ不良ナルモノ亦尠ナカラサリシハ本縣蠶種ノ一大欠点ナルヲ以テ採種用育蠶ノ方法ト用桑栽培ノ改良トハ共ニ刻下ノ急務ニシテ調製上ノ注意モ亦實質ノ改良ト共ニ決シテ等閑ニ附ス可キニ非ス當業者タル者宜シク茲ニ意ヲ用フヘキナリ繭ハ春蠶ニ在リテハ本年ノ産繭トシテハ比較的良好ノモノニ乏シカラスト雖夏秋蠶ニテハ飼育時期ノ天候不良ナリシカ爲其品質良好ナルモノ至ツテ尠ナク且ツ春蠶ニアリテハ繭形小ニ失セルモノ夏秋蠶ニアリテハ解舒澁難絲縷脆弱ニシテ縲絲ニ堪ヘサルモノ及光澤劣悪ナルモノ多ク特ニ其シキハ全部繭菌ノ犯ス處トナリ到底審査ノ價值ナキモノト認メ之ヲ除キシモノ實ニ一百四十二點ノ多キヲ出スニ至レリ如斯ハ上簇後天候其宜シキヲ得サリシノ致ス所アルヘキモ畢竟穀輔ノ時期ヲ誤リ貯蔵亦其當ヲ得サリシニ依フスンハアラス又出品中形狀ニ大小アリ縲縷ニ粗密アルモノ錯

雜混淆シ殆ト撰別ヲ加ヘサルモノ尠ナカラス特ニ夏秋蠶繭ニ於テ其最モ甚シキヲ看ル當業者宜シク鑑ム可キナリ生絲ニアリテハ色澤佳良絲條整齊ニシテ見ル可キモノ多クアリト雖色ノ白キヲ務メタル結果光澤ヲ失シ感觸ヲ損ジタルモノ不尠又乾燥不充分ナル生絲ヲ大棹ヨリ外シタルノ結果縮絲トナリテ外觀及感觸ヲ損ジタルモノアリ又東裝ハ不同劣拙加フルニ徒ニ外觀ヲ飾ランカ爲着色セル絹絲ヲ以テ緊束セルモノ不尠尙甚シキハ之ヲ以テ縲縷トナシタルモノ數點アリ如斯ハ東裝ノ本旨ニ戾リ當ニ無益ノ虚飾タルニ止マラス取扱上幾多ノ困難ヲ來シ從テ絲縷ヲ切斷スルノ虞アリ又縲縷ノ全ク欠ケタルモノ緒留ノ絲條少ナキカ爲既ニ切斷セルモノ亦留方ノ小ニ失シ之カ攷索ニ困難ナルモノアル等總ノ整理不完全ナルモノ多カリシハ遺憾ノ事ニ屬ス又一捻ノ絲量多キハ二十三多或ハ二十四多ノモノアリ少キハ十三多ヨリ十四多ノモノアリ是等ハ共ニ括造ニ適セサルモノナレハ一捻ノ量ハ將來宜シク十八多乃至二十多ニ改ムルヲ要ス又器械審査ノ成績ニ依レハ目的織度ト平均織度トノ間差甚シキモノアリシハ誠ニ惜ムヘキ事ニシテ現時生絲市場ニ於テ取引上平均織度ノ重要視セラル、アルヲ知ラハ之カ目的織度ニ適合ヲ謀ルハ正ニ努ムヘキノ最大要件ナリト認ム以上述フル處ハ元ヨリ其概要ニ過キスト雖當業者諸氏幸ニ出品ト相對照シ後來斯業經營上ノ龜鑑トナスアラハ得ル所蓋尠ナカラサルヘキヲ信ス抑今回ノ審査ハ十月十八日ヲ以テ着手シ同月二十三日ニ於テ終了ス而シテ此間審査委員諸氏ハ熱心之カ審査ニ從事シ此短期間ニ於テ此多數ナル出品ニ對シ公平且ツ嚴密ナル審査ヲ遂ケ以テ其優劣ヲ査定シ蠶種ニアリテハ優品百六十二點繭ニアリテハ優品七百七十二點生絲ニアリテハ優品四十二點ヲ選抜シ既ニ閣下ノ裁定ヲ經タリ謹而授賞アラシム事ヲ稟申ス

審査委員長生絲検査所技師從五位勳五等 芳賀權四郎

受賞者左ノ如シ。

- 生絲一等賞 小笠原富田春吉 蠶種一等賞 庵原郡杉山百太郎 繭一等賞 安倍郡長岡弘、駿東郡一杉要藏

右終リテ松平會頭ハ階段ニ進ミ出テ左ノ告辭ヲ朗讀セリ。

蠶絲ハ我邦貿易上常ニ優位ヲ占メ國家ノ經濟ニ最モ密接ノ關係ヲ有スルモノミナラス之ヲ内ニシテハ發展ノ餘裕綽々タルモノアリ之ヲ外ニシテハ販路ノ廣闊洋々海ノ如キモノアリト雖較モスレハ海外ニ於ケル政况又ハ經濟上ノ變動ハ蠶絲需要ノ上ニ影響ヲ及ボシ蠶絲生産者ヲシテ痛苦ヲ感セシムルコト尠ナカラサルモノアリ故ニ其苦ヲ輕減シ秩序ノ發達ヲ爲サシメントセハ常ニ海外ノ事情ヲ調査シ當

業者ニ警告シ併セテ字内ノ各方面ニ販路ヲ擴張セサルヘカラス本會ハ事業ノ一歩トシテ此間ニ力ヲ盡サントナリ期スルモ未タ其目的ヲ貫徹スルコト能ハサルヲ憾トセリ然レニ當局者ノ熱誠ト會員諸君ノ盡力トニ依リ今ヤ會員ノ數五萬ヲ超エ全國到ル處殆ト支會又ハ地方委員部ノ設置ヲ見サレテナク提携呼應シテ如上ノ針路ヲ取りツ、アリ此時ニ當リ靜岡支會當局諸君ハ奮起シテ會員ノ増募ニ努メ本會ノ擴張ヲ圖ルト共ニ支會ノ基礎ヲ鞏固ニシ且ツ其事業トシテ品評會ヲ開催シ客歲以來沈睡セル當業者ノ意氣ヲ鼓舞セントス詢ニ時機畫策兩ナカラ其宜シキヲ得タルモノニシテ當業者ノ功多キヲ謝スルト同時ニ本會ノ目的一歩ヲ進メタルヲ賀セサルヘカラス今ヤ出品ノ審査完了ヲ告ケ本日茲ニ褒賞ヲ授與シ併セテ發會式ヲ舉グルニ當リ恭クモ 總裁殿下台臨アラセラレ本會ノ爲ニ貢獻セル會員諸君ニ對シ有功章ヲ親授セラレ加フルニ優渥ナル旨ヲ以テセラレ是レ當支會ノ名譽ニシテ本會ノ光榮トスル所ナリ願ルニ本縣ノ蠶業ハ其淵源頗ル古ク和銅年間ニ鐘綾ヲ機織スヘキ恩命ニ接シタルコトアレヨリ之ヲ察スレハ千三百年代以前ニ在ルコトヲ知ルヘク爾來幾多ノ變遷ヲ經維新以後顯著ナル發達ヲナシテ今日ニ至レリト雖前途尙擴張ノ餘地饒ク氣候風土好ク蠶業ニ適スルモノアリ依テハ會員諸君克ク台旨ノアル所ヲ奉戴シ一致協力益々進運ノ發展ヲ圖リ以テ本縣蠶業ノ進歩ニ貢獻シ國家ノ富源ニ資スルコトヲ期セサルヘカラス聊カ希望ヲ述ヘテ告辭トス

大日本蠶絲會々頭正三位勳一等男爵 松 平 正 直

右ニ次テ農商務大臣代理下岡農務局長ハ左ノ祝辭ヲ朗讀セリ。

總裁宮殿下台臨ノ下ニ大日本蠶絲會靜岡支會發會式並品評會褒賞授與式ヲ舉グルニ當リ一言以テ會員諸君ニ告ケント欲ス方今國家ノ急務ハ殖産事業ノ發達ヲ圖リ以テ富源ヲ涵養スルニ在リ而シテ蠶業ハ此目的ヲ達スル捷徑ニシテ又實ニ主要ノ地位ヲ占ムルモノト云フヘシ熱世界ノ趨勢ヲ觀ルニ蠶絲ノ需用ハ益々増進シ殆ト底止スル所無キニ似タルハ當業者ノ大ニ意ヲ強ウスル所以ナリト雖外ニハ産額ノ多大ナル清國アリ蠶質ノ優良ヲ以テ鳴レル伊佛アリテ常ニ輸贏ナリ市場ニ爭フ此秋ニ當リ益々斯業發達ヲ圖リ長ヘニ本邦蠶絲業ノ優勝ヲ期セント欲セハ専ラ技術ノ練磨ト堅實ナル結合カトニ依リ事業ノ基礎ヲ鞏固ナラシメサルヘカラス本日ノ發會式並褒賞授與式ハ即チ戮力協心ノ實ヲ示シ技術ノ進歩ヲ競フモノニシテ最モ時機ニ適セル舉ナリ冀クハ會員諸君士努メテ初志ヲ貫徹シ以テ國富ノ充實ニ貢獻セラレン事ヲ

農商務大臣從三位勳一等男爵 大 浦 兼 武

次ニ來賓ノ祝辭受賞者總代一杉要藏ノ答辭アリテ、式ノ終リヲ告グルヤ奏樂起リテ一同最敬禮ノ内ニ 總裁殿下ニハ御退場、次テ支會第一回品評會場タル物産陳列館ニ臺臨在ラセ給ヘリ。

品 評 會 成 績

他郡市及 他府縣	蠶				繭				生			
	出品數	一等	二等	三等	出品數	一等	二等	三等	出品數	一等	二等	三等
賀茂	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
田方	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
駿東	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
富士	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
庵原	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
安倍	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
靜岡	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
志太	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
榛原	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
小笠	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
周智	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
磐田	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
濱名	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
引佐	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
他府縣	18	1	1	1	18	1	1	1	18	1	1	1
計	106	1	1	1	106	1	1	1	106	1	1	1

品 評 會 審 査 役 員

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項 大日本蠶絲會靜岡支會

事務委員長	小島源三郎	審査長	芳賀權四郎	審査員	白倉保
同	林田重光	同	山中徳三郎	同	鈴木勝太郎
同	黒田龜次郎	同	伊藤誠太郎	同	内田新次郎
同	石上巖太郎	同	古山多三郎	同	田地川兵三郎
同	川島清三郎	同	平井才次郎	同	榎谷鹿藏

一、蠶業全書發行、從來各地ニ於テ短期間ノ蠶業講習會又ハ講話會等開催セララルモ、未タ適當ナル教科用書ニ乏シキヲ以テ、是等ノ需用ニ充テシカ爲、東京、京都兩蠶業講習所及本縣農事試驗場ニ於ケル試驗成績ニ依リ、且ツ本縣斯業ノ趨勢ニ鑑ミテ栽桑育蠶及蠶病ノ要ヲ叙シタル一小冊子「蠶業全書」ヲ創刊シ、其後時勢ノ進運ニ伴ヒ年々改訂ヲ加ヘテ今ヤ第五版ヲ重スルニ至レリ。

△明治四十二年、専ラ會務整理ニ勉メタリ。

△明治四十三年、業務左ノ如シ。

一、秋蠶飼育法發行、秋蠶ノ改良發達ヲ促サンカ爲、本年秋蠶飼育期ニ當リ蠶業全書補遺トシテ、「秋蠶飼育ノ要訣」ヲ刊行シテ當業者ニ配付セリ。

一、大水害善後策、本年八月七日ヨリ十日ニ亘リテ未曾有ノ大出水アリ、縣下一般ノ農作物ニ多大ノ損害ヲ與ヘ、殊ニ秋蠶飼育ノ繁盛時期ナリシカ故ニ、桑園浸水ノ爲蠶兒ニ給桑スル能ハスシテ、不得已健蠶ヲ放棄スルノ慘狀續出スルニ至レリ、茲ニ於テ乎當支會ハ直チニ左ノ警告書ヲ印刷シテ當業者ニ配付シ之カ善後策ヲ講シタリ。

未曾有ノ大水害ニ就キ養蠶者ニ警告

輓近夏秋蠶ノ飼育著シク發達シ昨年ニ於ケル產繭四萬二千石價額百三十萬圓ヲ算シ本縣重要物産ノ一タルヲ失ハス而シテ更ニ本年ニアリテハ一層其掃立ヲ増加シ今ヤ秋蠶飼育ノ時期ニ入り天候能ク桑樹ノ生育ト蠶兒ノ成長トニ適ヒ將ニ豐作ヲ見ントスルニ際シ突如本月七日ヨリ十日ニ亘リテ豪雨沛然河川滔々氾濫田園爲ニ荒レ住屋流失人畜死傷シ又蠶兒ヲ投棄スルノ已ムヲ得サルノ地方續出スルニ至ル嗚呼何等ノ悲惨ソヤ吾人其謂フ所ヲ知ラス當業者諸氏ノ衷心察スルニ餘アリ轉々同情ノ念ニ禁ヘサル也然リト雖既往ハ追フヘカラス今日ノ計唯夫レ協力一致銳意善後策ヲ講スルニ在リ即チ諸氏庶幾ハ更ニ百倍ノ勇氣ヲ鼓舞シ別記注意事項ニ依リ桑園ノ肥培ヲ懇切ニシ晚秋蠶ノ飼育ニ全力ヲ傾注シ以テ速ニ舊態ニ安ンセラレムコトヲ切望シテ已マサル也。

大日本蠶絲會靜岡支會長從四位勳三等 石原健三

晚秋蠶ニ對スル注意事項

- 一、蠶種ノ選擇、蠶種ヲ購入スルニハ特製ニシテ無毒ノモノヲ選ムヘシ不付蠶種ハ顯微鏡検査ヲ欠クヲ以テ病毒ノ跡ヲ絶タスシテ願ル危険ナリ尙各地出水被害後蠶種ノ需用多キカ爲粗悪ナルモノ多カレハ故ニ信用アル者ヨリ共同購入スルヲ得策トス
- 一、摘桑、桑葉ノ硬軟ヲ混合シテ給與スルハ蠶兒不齊ノ最大原因ナレハ桑葉ノ摘取りハ注意シテ硬軟ノ度ハ成可蠶兒ノ發育ト並行セシメ浸水シタル泥桑ハ之ヲ避クルヲ可トス摘桑ノ時期ハ朝最モ能ク適シタ景ニ次キ日中ハ最モ不長ナリトス
- 一、給桑、晚秋蠶ノ時期ハ尙溫度高キヲ以テ充分ニ食桑セシメサルヘカラス故ニ少量ツ、度々給桑スヘシ而シテ日中高溫ナル場合ニ絶食セシムルノ不可ナルハ勿論ナレ共夕景ニ至リ冷氣ヲ催ス時分ヨリハ蠶兒ノ食欲非常ニ盛ナルコトアレハ其心スルコト肝要ナリ濡桑ハ蠶兒ニ害アリ之レ過剰ノ水分ヲ與フル時ハ胃液ヲ稀薄ナラシメ微生物ノ繁殖ヲ容易ナラシムルノミナラス養分ヲ少ナクスル等蠶兒ノ衛生上害多クレハナリ
- 一、分箔、厚飼ハ蠶室、蠶具、勞力及桑葉ヲ節約シ得ヘキカ故ニ當業者ノ最モ陥リ易キ弊害ナレトモ蠶兒ハ充分ノ發育ヲ遂ケサルカ故ニ決シテ絲量多キ良繭ヲ得難シ加之蠶兒ハ常ニ衛生上不良ナル狀態ノ下ニ在ルヲ以テ一朝不良ノ氣候若ハ飼育上ノ過誤ニ遭遇スレハ直チニ其健康ヲ害ヒテ失敗スルコト多シ特ニ秋蠶ハ發育旺盛ナル時期ナルカ故ニ一層注意シ決シテ厚飼ヲ行フヘカラス

一、除沙、除沙ノ目的ハ蠶座ノ乾燥ト清潔トナ計ルニ在リテ蠶兒ノ衛生上極メテ必要ナルコトナレハ決シテ之ヲ怠ルヘカラス濕氣多クシテ蠶沙ノ乾燥不良ナル時ハ其回数ヲ増加スヘシ特ニ蠶兒ノ狀況不良ニシテ食慾振ハサルカ又ハ病蠶發生ノ徵アルトキハ時期ノ如何ニ拘ハラズ除沙ヲ行ヒ堆積セル蠶沙上ニ在ラシムヘカラス除沙ハ春蠶ニ比シテ頻繁ニ且ツ迅速ニ行フコト肝要ナレハ稚蠶ノ時ヨリ網ヲ用フルチ便トス而シテ除沙ノ時期ハ可成朝ノ冷シキ間チ可トス

一、眠起蠶ノ取扱、朝ヨリ催眠シタルモノハ大抵日没マテニハ就眠シ終ルモノ午後ニ入りテ催眠セシモノハ夜間低溫トナルチ以テ翌朝ニ至ルモ就眠セズ加ノレニ早ク就眠セシモノハ起蠶トナリ遂ニ不齊チ來ス恐アリ斯カル場合ニハ催眠ノ時火力ヲ使用シ溫度ヲ高メテ速ニ眠チ促スヘシ尙秋蠶ノ眠除ハ少シク早目ニ行フチ可トス眠中甚シク乾燥スル場合ニハ床板等ニ撒水シテ清涼チ計ルヘシ桑付ハ春蠶ト等シク起蠶ヒタル後チ可トスレ共著シク高溫ノトキ又ハ天候變シテ蒸熱チ醸シ電鳴アル場合等ハ少シク早目ニ行フ方反テ得策ナリ而シテ給桑量ハ前齡盛食期ニ與ヘタル量ヨリ約二割減位チ適當ナリトス

一、溫度調節、晚秋蠶モ稚蠶期ハ概テ高溫ニシテ普通秋蠶時期ノ取扱ト異ナル所尠ナキモ蠶座チ重メルニ從ヒ溫度ハ漸次低下スルチ常トスルカ故ニ稚蠶中高溫ニ苦ミタル飼育者ハ溫度ノ低下スルチ願ミサルモノ少カラサレ共發育ノ遲延及不齊チ來シ易ク延テ失敗ノ因トナルコトアリ殊ニ眠起ノ際等ハ注意スルコト肝要ナリ

一、上簇、上簇ノ方法ヲ誤ルトキハ繭ノ品質ヲ損傷シ收穫チ減スルカ故ニ左記事項ニ注意スヘシ
熟蠶拾ヒ取りノ時期ハ稍早目チ可トス
上簇蠶數ハ一尺坪ニ付五十頭チ超ユヘカラス

初秋ノ候氣溫低キ時ハ火力チ使用シ七十五度チ保タシムヘシ
空氣ノ流通乾乾燥チ計ルハ最モ肝要ナリ 秋蠶飼育法ノ詳細ハ過般本會ニ於テ發行セル秋蠶飼育法ノ要訣ニアルチ以テ就テ一讀セハ明ナリ

桑樹ニ對スル注意事項

普通桑園、春蠶刈取後發育セル新梢ノ葉チ秋蠶ニ使用スルハ本縣ニ在リテハ普通トスル所ナルモ其場合ハ左記事項ニ注意スヘシ
一、晚秋蠶ハ餘リ遅キモノチ飼育スヘカラス大抵九月中上簇シ終ル位ノモノニ止ムルチ可トス

二、桑園ハ此際少量ノ速効肥料チ施スチ可トス若シ堆積肥料ノ如キ漸効肥料チ施スカ又ハ多量ノ速効肥料チ用フルカ又ハ秋期遅ク迄摘桑スルトキハ新梢ノ生育久シキニ亘リ冬期先枯シテ翌春ノ收穫チ減スルニ至ル尙無肥料ニテ只摘取ルノミナラハ翌年ニ至リテ著シク葉質チ惡變スルニ至ルヘシ

兼用桑園、本年ノ如ク秋蠶期ニ於テ水害アリタル時ハ前項普通桑園ノミナルトキハ葉ハ悉ク泥ニ汚サレ使用ニ堪ヘサルカ故ニ水害ノ慮ナキ高燥ノ處チ選ミ速成的密植桑園チ設クル必要アリ植付株數ハ一反步ニ付二千本乃至三千六百本位ニテ收穫二石ノ原料トナスチ得ヘシ
甲、夏秋蠶兼用桑園、春季發芽前切リ取り速効肥料チ施シ新梢成長後夏蠶ニ先端三四葉チ殘シテ下部チ摘採シ爾後伸長シタルモノチ以テ秋蠶飼育中ニ供ス一反步ノ收葉ハ夏秋チ合セ四百貫チ得ヘシ

乙、春秋蠶兼用桑園、左ノ二種アリ

一、秋ニ多ク收葉スル法、春蠶二齡ノ終迄ニ全葉チ摘採シ直チニ枝條チ切り取り新芽ノ成長セルモノヨリ秋期銀杏形ニ摘取ル法ニシテ一反步ノ收穫ハ春期芽摘百二十貫秋期葉摘二百五十貫乃至八百貫チ得ヘシ

二、春ニ多ク收葉スル法、春蠶四五齡期間梢條ノ中央部ニ於テ切斷シ其部分ヨリ新芽チ出シ秋蠶ニ用フル法ニテ一反步ノ收穫ハ春期新梢三百貫乃至四百貫秋期葉摘百五十貫乃至二百貫チ得ヘシ

桑樹ノ病蟲害、種々アレ共主ナル者左ノ如シ

一、萎縮病、春蠶ヨリ秋蠶ニ亘リ數回摘採スルトキハ桑樹ハ著シク其生理チ害セラレ萎縮病チ發スルニ至ル近頃漸ク蔓延セントスル傾向アルチ以テ之チ豫防ハ頗ル肝要ナリトス即チ樹蔭ノ濫採チ避ケ又過分ノ速効肥料ノ使用チ見合スヘシ

二、桑ノ芯止蠶、七八月頃ニ於テ新梢ノ發育チ止メ其被害芽ハ遂ニ黒變枯死スルニ至ルチ以テ著シク收穫チ減ス本縣ニ在リテモ其被害少ナカラス之レ桑ノ芯止蠶ノ幼蟲ノ寄生スル爲ナリ幼蟲ハ休長一分弱ノ紡錘形ノ蛆ニシテ体色初ハ白色ナレ共老熟期ニ至レハ橙黃色ニ變ス而シテ驅除豫防ハ目下縣立農事試驗場並本會ニテ研究中ニ屬シ未タ適當ノ方法チキモ被害芽チ集メテ燒棄シ蛆チ殺スコト肝要ナリ

三、蛭蟪、水害後ニ蔓延スル蛭蟪ノ驅除法ハ左ノ如シ

イ、被害桑園ニハ所々ニ古籩、枯草、藁等チ堆積シ充分潤ホシ置クトキハ蛭蟪ハ晝間此内部ニ潛伏スルチ以テ捕殺スヘシ

ロ、被害株ノ周圍ニハ乾燥セル木灰若ハ新鮮ナル生石灰末チ一株ニ對シ五合乃至一升撒布スレハ蛭蟪ハ極ニ登リ得サルノミナラス莖ニ

死滅スルモノナリ

一、繭質調査、繭質統一並養蠶改良ノ資ニ供センカ爲各府縣及縣下各郡ニ亘リテ、春夏秋蠶中最モ優良ト認ムル繭ヲ蒐集シ、標本ヲ作製シテ縣廳内當支會事務室ニ陳列シ、以テ本縣繭質調査ノ參考トナセリ。

二、製絲講習會、製絲改良ノ目的ヲ以テ本縣生絲製造同業組合ト胥圖リ、町田東京蠶業講習所技師ヲ聘シ縣下五ヶ所ニ講話會ヲ開催セリ、即チ左ノ如シ。

開會	場	所	聽講者數
九月十四日	濱名郡濱松町	田方郡三島町	二五〇名
同十五日	小笠郡掛川寺町	戰捷郡紀念館	四〇〇名
同十七日	富士郡大宮館町	法賀郡下田寺	二〇〇名

△明治四十四年、業務左ノ如シ。

一、『静岡縣ノ蠶絲業』編纂、本縣蠶絲業ノ狀況ヲ明ニセンカ爲、斯業ニ關スル一切ノ統計ヲ網羅シテ『静岡縣ノ蠶絲業』ト題スル冊子ヲ編纂シ、尙統計思想ノ普及ヲ計ラントシテ。蠶絲業統計注意書ヲ印刷シ共ニ當業者ニ配付セリ。

一、暴風水害善後策、本年八月四日暴風雨ノ爲縣下再度ノ大出水アリ、蠶業上ノ被害甚大ナリシヲ以テ、當支會ハ之カ善後策トシテ直チニ左ノ警告書ヲ配付シ當業者ノ奮起ヲ促シタリ。

暴風水害ニ就キ蠶絲業者ニ警告

本月四日ノ暴風雨ノ爲河川氾濫シ田園荒レ家屋流失人畜死傷シ又蠶兒ヲ投棄スルノ己ムチ得サルノ地方續出セリ嗚呼何等ノ悲慘ソヤ當業者諸氏ノ衷志察スレニ餘アリ吾人ハ轉々同情ノ念ニ堪ヘサルナリ然リト雖既往ハ追フモ及フヘカラス今日ノ計ハ協力一致銳意善後策ヲ講究スルニアリ即チ諸氏庶幾ハ更ニ百倍ノ勇氣ヲ鼓舞シ別記注意事項ニヨリ速ニ舊態ニ復セシムルノ手段ニ全力ヲ傾注シ不幸ヲ轉シテ幸福ヲ望ム事ヲ切望シテ止マサルナリ

大日本蠶絲會静岡支會長 正五位勳四等 法學博士 松井 茂

桑園ニ對スル注意

水害ノ爲桑園被害ノ状態ハ大畧左記六種ニ區別スレトナリ得ヘシ

イ、耕土ノ流失	ハ、案樹ノ流失
ロ、耕土ノ埋没及泥土ノ堆積	ニ、樹幹及枝條ノ挫傷
カ、耕土ノ埋没及泥土ノ堆積	ホ、桑樹ノ浸水
キ、耕土ノ埋没及泥土ノ堆積	ヘ、暴風ノ被害

業者當ハ各自被害ノ程度ニ依リ其果シテ何レニ該當スルヤヲ調査シ之ニ適應スル善後策ヲ講究スヘシ

第一 土地ノ被害

イ、耕土ノ流失、其分量甚シキモノハ客土法ヲ行フ可トスルモ周圍ノ事情勞力ノ關係上到底不可能ナルトキハ底土ヲ掘リ起シ日光ニ曝露シ選擇等ヲ勘込ミ土質ノ改善ヲ行フヘシ
ロ、耕土ノ埋没及泥土ノ堆積、砂礫又ハ泥土ヲ堆積シ耕土ヲ埋没セルトキハ其深淺ニ應ジテ適當ノ處理法ヲ講スヘシ即チ礫ノ堆積セルトキハ之ヲ他ヘ搬出スルヲ最モ可トスレトモ一尺以内ナルトキハ耕土ト天地返ニナスモ便ナリ然レトモ肥土或ハ砂ノ堆積セルトキハ強テ天地返ト爲スヲ要セサルコトアリ即チ耕土ヲ掘出シ攪拌スヘシ根刈仕立ニシテ一尺五寸以上埋没ノモノハ勿論植替ヲ要ス高木仕立ニアリテハ幹際ヲ掘リテ皮層部ノ腐爛ヲ防クヘシ蓋泥土埋没ノ場合ハ土中ノ氣通不良ナレハ宜シク表土ヲ發掘シ光熱空氣ノ透過ヲ計リ

腐植質物ノ分解ヲ速ナラシムヘシ

第二 桑樹ノ被害

ハ、桑樹ノ流失、 整地ヲ行ヒ冬作ヲ仕付ケ來春桑苗ヲ栽植スヘシ然レトモ桑樹ト同時ニ流失シタル場合アリトキハ密土法ヲ行フヘシ

ニ、樹幹及枝條ノ挫傷セルモノ、 根刈仕立ノ損傷セル枝條ハ株際ヨリ利刀ヲ以テ切取り枝條ヲ整頓シ高木仕立ノモノニアリテハ損傷ノ大小ニヨリ枝條ヲ間拔シテ枝幹ノ權衡ヲ保ツ様ニ注意スヘシ何トナレハ若シ主幹ノ損傷セルモノニシテ枝條ノ健全ナルモノアリトスレハ樹勢大ニ衰弱シ道ニ枯死スルコトナキヲ保セザレハナリ

ホ、桑樹ノ浸水セルモノ、 枝條ノ一部浸水ハ枯損スルコト稀ナレハ耕耘ヲ懸ニシ土中氣熱ノ透入ヲ計ルヲ以テ足レリトスレ共ニ晝夜以上晝夜間而モ全部ノ浸水ニアリテハ葉ハ全ク枯死スルヲ以テ枝條ノ二分ノ一又ハ三分ノ一ヲ殘シ他ハ伐採シ耕耘ヲ懸ニシテ拔芽ノ伸長ヲ促シ翌春發芽前ニ伐採シテ秋蠶專用桑ニ供用スヘシ晝夜以上浸水セルモノハ枯死スルモノ多キヲ以テ全部掘起シ適宜冬作ヲナシ翌春改メテ栽苗スヘシ以上ハ素ヨリ善後策ノ大畧ヲ記セルモノニシテ桑園ノ被害ハ主ニ本年ノ秋蠶ニ影響シ延テ春蠶ニ及フヲ以テ迅速ニ之ヲ救濟策ヲ講究セザルヘカラス乃チ耕土桑樹ノ流失又ハ埋没ニヨリテ改植ヲ要スルトキハ土地ノ狀況ニ依リ速成桑園ヲ設クルノ徑捷ナルニ如カス其方法ハ畦巾三尺株間四五寸内外ニ植付ケ之ニ堆肥五六百貫ヲ施シ管理行届タトキハ秋蠶ニ至リテニ三百貫ノ收葉アルヘシ而シテ土地ノ肥瘦ニヨリテ收葉ノ差違アルハ勿論ナルモ砂地ニアリテハ腐植質ノ混在スルトキハ相當ノ繁茂ヲ見フルヘシ若シ堆肥ヲ施用スルノ餘地ナキトキハ大豆ナシキテ開花前ニ之ヲ鋤キ込ムヘキナリ但シ肥料ヲ含メル泥土ノ堆積スルトキハ其量ニヨリテ凡ソ二三ヶ年ハ施肥ヲ要セザルコトアリ

ヘ、暴風ノ被害、 暴風ノ害ヲ被リタル桑園ハ目下秋蠶ノ飼料ニ供用スルヲ得サレハ直チニ枝條ノ三分ノ二位ヲ殘シ上部ヲ伐採シ耕耘培養ヲ懸ニシ拔芽ノ伸長ヲ促シ晚秋蠶用ニナスヘシ

製絲家ニ對スル注意

一、原料繭、 若シ浸水セル原料繭アラハ速ニ繰絲ニ供シ其量多大ナル場合ニハ之ヲ乾燥スヘシ浸水繭ヲ再乾スルニ當リ施スヘキ方法ハ繭ノ浸潤度合ニヨリテ異ナレトモ要ハ乾繭溫度ヲ餘リ高カラシメサル事及熱量ヲ多少損失スルモ換氣ハ充分行ハシムル事ニアリ

二、用水、 工場用井戸ニ濁水ノ浸入セシ場合ニハ靜ニ水面ヨリ濁水ヲ汲ミ取り決シテ初ヨリ「ポンプ」ニテ揚水スヘカラス井底ニ通セバ「ポンプ」濁水ハ井水ヨリモ温度高ク比重輕キモノナレハ井中ニアリテハ濁水ハ上部ニ留マリ清澄水ハ依然トシテ底部ニ存在スルモノナリ井中ニ濁水ノ落下甚シク底部マテ濁水混入セル疑アラハ試ニ初メ「ポンプ」ニテ揚水シ果シテ其力濁水ナリセハ引續キ揚水シテ汲換フフ可シ

三、汽罐汽機、 焔道ノ浸水セルモノアラハ濕潤セル灰ヲ除キ石灰末ヲ撒布シ水分ヲ去リテ後除キニ焚火シ急激ニ焚火スヘカラス汽罐類ハヨク拭油ヲ以テ充分掃除スル事ヲ要ス

四、工女ノ衛生、 洪水ハ病原菌ヲ蔓延セシムルヲ以テ水害地ニ赤痢腸炎扶助ノ如キ傳染病ノ流行ヲ見ルヲ常トスレハ各自衛生ニ注意スヘキハ勿論ナレトモ群集セル工場ノ如キハ殊ニ衛生ニ注意所要ナリ衛生上清潔乾燥ヲ計ルハ云フ迄モナク飲料物ニハ殊ニ充分ナル注意ヲ要ス浸水セル床下等汚物泥土ハ可成速ニ之ヲ除去シ乾沙、石灰、木炭末等ヲ撒布スヘシ什器類ハ清水ニテ能ク洗滌シ日光消毒ヲ行フヘシ食器類ハ蒸氣又ハ熱湯ニテ消毒スルヲ最モ簡便ナリトス浸水セル蠶夜具類ハ充分乾燥ニ努メ又生水ハ決シテ飲用セシメサルコト及果實類ノ食用ハ可成禁スヘシ尚濁水ノ混入セル井水ハ必ス汲換ヲ行フヘキモノトス

蠶病講話會、 本縣主催夏秋蠶講習開會ノ際、二月十五日岩淵東京蠶業講習所技手ヲ聘シ、安倍郡公會堂ニ於テ該講話會ヲ開催セリ、聽講者ハ二百名ニ達シ主トシテ蠶病豫防吏員及蠶種製造者等直接關係ヲ有スル者ナリシヲ以テ其效果多大ナリシ。

蠶業講演會、 十一月十二日土屋東京蠶業講習所技師、明石農商務技師、吉池大日本蠶絲會理事ヲ聘シ、本縣種繭桑園兩品評會及製絲競技會褒賞授與式舉行後、静岡市物産陳列館樓上ニ於テ蠶業講演會ヲ開催シタルカ、聽衆約千名ニ達シ盛會ナリシ、尙各講師ノ講演筆記ヲ印刷ニ付シ一般當業者ニ配付セリ。

△支會役員、 創立以來ノ氏名任期ヲ示セハ左ノ如シ。

氏名	李 家 隆 介	石 原 健 三	松 井 茂	支會長	昌 谷 彰	小 島 源 三	依 田 佐 二	副會長	針 谷 吾 作	生 方 五 郎	渡 邊 亥 八	幹事長
任 期	自明治四〇年至四三	自四三至四四	自四四至四四	現今	現今	現今	現今	現今	現今	現今	現今	現今
氏名	橫 山 賢	太 田 兵 太 郎	飯 島 善 太 郎	藤 田 左 士 郎	金 子 保 治	岩 浪 爲 治	阿 部 保 太 郎	原 口 晃 郎	小 林 新 祐	藤 田 新 祐	幹 事	
任 期	自明治四〇年至四二	自四〇至四四	自四〇至四四	自四〇至四四	自四〇至四四	自四〇至四四	自四〇至四四	自四〇至四四	自四〇至四四	自四〇至四四	現今	現今

△委員長、四十五年三月ニ於ケル現任者ハ左ノ如シ。

郡市	賀 茂	田 方	駿 東	富 士	富 士	庵 原	安 倍	靜 岡 市	志 太
氏名	雀 部 咸 宣	尾 崎 敏 樹	稻 見 明 精	鈴 木 七 二 郎	小 川 省 次 郎	太 田 資 行	渡 邊 素 夫	小 山 鋼 太 郎	長 島 弘 裕
郡市	安 倍	靜 岡 市	志 太	小 笠 原	太 田 資 行	藤 田 信 次 郎	陣 軍 吉	天 野 千 代 丸	鎌 田 介 政
氏名	田 澤 義 鋪	周 智	周 智	小 笠 原	太 田 資 行	藤 田 信 次 郎	陣 軍 吉	天 野 千 代 丸	鎌 田 介 政

△會員、四十五年三月現在數左ノ如シ。

郡市	賀 茂	田 方	駿 東	富 士	富 士	庵 原	安 倍	靜 岡 市	志 太
特別會員	一六名	二二	六一	一五	一一	二六	二五	一三	七一
通常會員	九七二	七三九	一、〇二八	四六六	五一三	八七九	二〇七	七二七	七三〇
計	九八八	七六〇	一、〇八九	四八一	五二四	九〇五	二三二	七三〇	七三〇
郡市	賀 茂	田 方	駿 東	富 士	富 士	庵 原	安 倍	靜 岡 市	志 太
特別會員	九名	一一	一七	五五	五四	五六	三六	三四〇	三四〇
通常會員	三三一	六三二	三三五	一、二三九	一、七六一	五五四	一〇、三七三	一〇、三七三	一〇、三七三
計	三四〇	六四三	三五二	一、二九四	一、八一五	五六〇	一〇、三七三	一〇、三七三	一〇、三七三

蠶絲業關係團體一覽

四十五年現在

團 體 名	大日本蠶絲會静岡支會	静岡縣蠶絲業組合取締所	静岡縣蠶種同業組合
所 在 地 所	縣 廳 內	靜 岡 市	靜 岡 市
管 轄 區 域	賀茂郡ヲ除キ 縣下ニ一圓	賀茂郡ヲ除キ 縣下ニ一圓	賀茂郡ヲ除キ 縣下ニ一圓
創 立 年 度	明治四十年	明治十九年	明治三十六年
役 員	會長 小松 井 源 三 郎 副會長 依田 佐 亥 八 幹事長 渡邊 昌 太 郎 所長 寺 尾 昌 太 郎 組長 戶 倉 惣 兵 衛 副組長 長 岡 辰 吉		

◎第七項蠶絲業團體ニ關スル事項

蠶絲業關係團體一覽

二百四十九

静岡縣生絲製造同業組合	静岡市	縣下一圓	明治三十一年	組長 井出才源
静岡縣賀茂郡蠶絲同業組合	下田町	賀茂郡一圓	明治十九年	副組長 林田部強一
静岡縣田方郡蠶絲業組合	三島町	田方郡一圓	明治十九年	組長 石橋尚松
静岡縣駿東郡蠶絲業組合	沼津町	駿東郡一圓	明治十九年	副組長 湯山喜十郎
静岡縣富士郡蠶絲業組合	大宮町	富士郡一圓	明治十九年	組長 深澤米太郎
静岡縣庵原郡蠶絲業組合	江尻町	庵原郡一圓	明治二十四年	副組長 望月千代三
静岡縣安倍郡蠶絲業組合	静岡市	安倍郡一圓	明治十九年	副組長 寺尾昌太郎
静岡縣静岡市蠶絲業組合	静岡市	静岡市一圓	明治二十六年	技師 池田國太郎
静岡縣志太郡蠶絲業組合	藤枝町	志太郡一圓	明治二十六年	組長 市川常吉
静岡縣榛原郡蠶絲業組合	川崎町	榛原郡一圓	明治二十六年	副組長 山下嘉哉
静岡縣小笠郡蠶絲業組合	掛川町	小笠郡一圓	明治十九年	組長 松平幾平
静岡縣周智郡蠶絲業組合	森町	周智郡一圓	明治二十三年	理事 鈴木正吉
静岡縣磐田郡蠶絲業組合	見付町	磐田郡一圓	明治十九年	技師 鈴木比奈淺吉
静岡縣濱名郡蠶絲業組合	濱松市	濱名郡一圓	明治十九年	副組長 岡部福次郎
静岡縣引佐郡蠶絲業組合	金指町	引佐郡一圓	明治二十一年	副組長 高橋信次

第八項 蠶業教育ニ關スル事項

本縣ニ於ケル蠶業教育ノ機關ハ、明治二十九年磐田郡見付町ニ農學校ヲ開設シ其一教科トシテ養蠶ヲ教授セシヲ以テ嚙矢トス、次テ翌三十年ニハ濱名郡ニ蠶業學校ノ設立アリテ専門的技術者ノ養成ヲ爲スニ至リ、又三十三年ニハ静岡縣農事試験場設立シ之カ分場ニ於テ蠶業ニ關スル試験ヲナシ、以テ當業者指導ノ資ニ供スルト同時ニ見習生ノ養成ヲ開始セリ、之等ノ教育機關ハ年ト共ニ漸次發展シテ多數ノ卒業生、修得生ヲ出シ、又其試験報告、講習講話、蠶種配布等ノ事業ハ一般當業者ニ多大ノ効果ヲ與ヘ、以テ我蠶業ノ進歩ニ貢獻セル所尠ナカラズ、爾後明治三十三年ヨリ三十六年ニ亘リ、富士、駿東、引佐、田方、志太、周智ノ各郡ニ農學校ノ設立アリテ何レモ蠶業ニ關スル學術ヲ教授シ、蠶業教育ハ今ヤ漸ク縣下各地ニ普及セントスルニ至レリ。

濱名郡立蠶業學校

明治三十年十月設立ノ認可ヲ得同十二月濱名郡芳川村都盛ニ開校ス、翌三十一年四月新築工事成リ同時ニ實習桑園七反歩ヲ設置ス、三十二年四月農學校規程ニ依リ乙種蠶業學校ニ組織ヲ改正シ次テ桑園八反歩ヲ増設セリ、三十四年一月濱名郡天神町村馬込ニ校舍移轉ノ認可ヲ得テ同四月新築校舍ニ移リ同七月甲種程度ニ變更セリ、而シテ教科ハ本科別科ニ分チ修業期ヲ本科三ヶ年別科八ヶ月トス、同三十七年ニ至リ舊設桑園ヲ廢シテ新ニ校舍ノ附近ニ七反餘歩ヲ設ク、同三十八年蠶種配付規程ヲ設ケ當業者ニ蠶種ノ配付ヲ行

創立以來ノ卒業生ヲ各年度別ニ掲出スレハ左ノ如シ。

年 度	本 科		別 子		部 子		科 部	
	回 數	卒業生數	回 數	卒業生數	回 數	卒業生數	回 數	卒業生數
明治三一年	乙種前	1	乙種前	22名				
三二年	乙種前	32名	乙種前					
三三年	乙種前	25名	乙種前	4				
三四年	一甲種	13	一甲種	2				
三五年	一甲種	11						
三六年		20		6				
三七年		11						
三八年		17		2				
三九年		5						
四〇年		6						
四一年		7						
四二年		8						
四三年		9						
四四年		4						
四五年		4						
四六年		3						
四七年		10						
計		267		147				49

養蠶及栽桑ニ關スル各種ノ試験ハ生徒教養ノ傍各年度ニ於テ之ヲ行ヒ、長キハ一試験ニシテ數年繼續セルモノアリ、今其主要ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ。

安樂育試験、蠶種土中貯藏試験、飼食桑葉硬軟試験、眠座乾濕試験、雨傘給與ト絶食試験、添食試験、全葉育試験、眠中石灰撒布試験、桑園密植試験、

静岡縣立農學校

明治二十九年四月組合立ヲ以テ磐田郡見付町ニ創立セラレ、三十三年四月縣立トナリ次テ甲種程度ニ變更セルモノナレトモ、當時ニ於ケル蠶業上ノ設備ハ、桑園僅ニ一反歩ヲ有シ附近寺院ノ一室ヲ借リテ蠶室ニ充用スルカ如キ有様ナリシカハ、僅ニ蠶量十匁内外ノ飼育ヲナシ以テ生徒ノ教養ニ資シタルニ止マリタリ、同三十四年四月蠶室一棟ヲ、三十七年對桑室一棟ヲ新築シ、且ツ桑園九反歩ヲ栽植スルニ及ヒテ稍其面目ヲ改ムルコトヲ得タルヲ以テ、逐年實習用飼育ノ蠶量ヲ増シ、尙四十年ニハ蠶種配付規程ヲ設ケテ當業者ニ蠶種ノ配付ヲ行フコトトセリ、會々校舍移轉ノ議成リ同年中泉町ニ起工シ四十二年全ク工ヲ竣ヘ、養蠶室四棟、對桑室、貯桑室、消毒並乾繭室各一棟ヲ建築シ、尙桑園ハ四十二年速成の密植桑園六反歩四十二年普通桑園一町五反歩ヲ設置シテ諸般ノ設備漸ク完成シ、年々春秋ヲ通シテ蠶量百數十匁ヲ飼育シ、生徒ヲシテ學科ノ教授ト相俟チテ技術ノ練磨ヲ圖リツ、アリ。

現在校長ハ細田多次郎、蠶業主任教諭ハ白倉保也。

蠶業ニ關スル試験其他事業トシテハ年々飼育實習ノ傍蠶桑ニ關スル各種ノ試験ヲ行ヒ來レルモ、主トシテ生徒ノ養蠶練習ニ重キヲ置クカ故ニ試験ノ如キ何レモ單純ニシテ特ニ記スヘキモノナシ。

志太郡立農學校

明治三十六年志太郡西益津村ニ創設セラル、而シテ創設當時ニ於テハ桑園一畝歩ヲ有スル外蠶室等ノ設備ヲ缺キタルヲ以テ、教室ノ一部ヲ之ニ充用シ春蠶蠶量約二分ヲ試育セルニ止マリタルモ、三十九年ニ至リ桑園一反歩ヲ新設シ、尙蠶室ヲ設ケテ春夏秋蠶ヲ通シテ蠶量六匁ヲ飼育シ生徒ノ實習ニ供シタリ、爾來年々飼育蠶量ヲ増加スルト同時ニ諸種ノ試驗ヲ行フコト、ナシ、四十二年校舍移轉ト共ニ蠶室一棟ヲ新設シ尙桑園ヲ増設シテ二反歩トナシ、四十三年ニハ四反歩トナシ始メテ蠶量十數匁ヲ飼育スルニ至レリ。現在校長ハ小川三策。蠶業主任教諭ハ古賀森太也。蠶業ニ關スル試驗トシテハ桑樹發芽調査、春蠶種類試驗、條桑育試驗、全芽育試驗、外國種飼育試驗等ナリトス。

乙種農學校

縣下六ヶ所ノ乙種農學校ニ於テハ何レモ二學年乃至三學年ニ於テ養蠶ノ學科及實習ヲ課シ、尙簡單ナル試驗ヲ行ヒ以テ生徒ヲシテ養蠶ノ一班ヲ了得セシメツ、アリ、各學校ニ於ケル沿革其他左表ノ如シ。

學校名	沿革	大要	蠶業主任職員ノ更迭並在職期間	蠶業ニ關スル試驗其他事業
田方郡立農林學校	明治三十五年四月ノ創立ニシテ爾來年々	三十五年	小永井誠作	蠶業ニ關スル試驗其他事業

田方郡立農林學校	第二學年ニ於テ蠶業一般ノ學科ヲ教授シ第三學年ニ於テ春蠶飼育法ヲ實習シツ、アリ	三十六年 自三十七年 自三十九年 自四十年 自四十二年 至現今年	渡部勇吉 菊池長樹 津田勉藏 望月精太郎	春蠶種類試驗、出張講話、出張實地指導
組合立御殿場農業學校	明治三十五年ノ創設ニ係リ、爾來四十一年迄ハ教室ノ一部ヲ以テ養蠶室ニ充テ蠶量五匁乃至六匁ヲ飼育シ來リシカ、明治四十一年教室三室ヲ改造シテ蠶室トナシ蠶量十匁ヲ掃立テ尙若干ノ秋蠶ヲ飼育スルコト、セリ、桑園ハ目下春蠶用二反七畝歩、秋蠶用二反七畝歩ヲ有シ栽培ノ實習ヲササシムルト同時ニ簡單ナル試驗ヲナシツ、アリ	三十五年 自三十六年 至現今年	成島好松 早坂重惇	春蠶種類試驗、春蠶飼育法試驗、桑葉害毒試驗、簇種類試驗、桑樹種類試驗、桑樹植付本敷試驗、桑園肥料試驗、收葉法試驗
組合立駿東農林學校	明治三十五年四月創立當時ニ於テハ校舍ノ設備未タ完全ナラサリシ爲、蠶業ニ關スル教育ハ學校ノミニ止マリシモ、同三十七年度ニ至リ始メテ春蠶飼育實習ヲ課シ四十二年度ヨリ秋蠶飼育ノ實習ヲ加ヘ	自三十五年 至三十七年 三十八年 三十九年 四十年 四十二年 自四十二年 至四十四年	大場平一郎 齋藤三郎 殿村福次郎 齋藤三郎 清水昇一 増田惠吉	春蠶飼育法試驗、添食試驗、秋蠶種類試驗、眠起取扱試驗、上簇器試驗、生徒生産滿品評會

私立周智農林學校	組合立引佐農業學校	富士郡立農林學校	タリ
創立以來養蠶ハ學理一班ヲ修習セシムルニ止マリ實習ヲ課セス	明治三十五年ノ創立ニ係リ三十七年女子部ヲ併置セリ、養蠶ノ實習ハ三十六年ヨリ之ヲ課シ年々存蠶蠶量ニ多ク飼育シ教室ノ一部ヲ以テ蠶室ニ充用シ來リシカ、四十二年養蠶室ヲ新築シ存蠶蠶量四匁、秋蠶同ニ多ク飼育セリ	明治三十三年創立以來養蠶法ノ學科ノミヲ教授シ來リシカ、四十年始メテ實習ヲ課シ爾後年々蠶量五匁内外ヲ掃立テタリ四十二年四月修業年限一ケ年ノ別科ヲ附設シ之ヲ養蠶專科トシテ專ラズノ學理技術ヲ修習セシムルコトトセリ	自十四年 至現今年 高橋堅太郎
	自三十六年 至三十七年 鈴木仁平	自三十五年 至三十七年 伊藤茂吉	
	自三十八年 至三十九年 所源兵衛	自三十七年 至三十八年 栗田政平	
	自四十年 至現今年 大庭作藏	自四十二年 至四十四年 久松志孝	
		飼育法試験、種類試験	

静岡縣立農事試験場蠶業部

明治三十三年ノ創設ニ係リ、蠶業部ハ分場トシテ志太郡西益津村ニ設置セラレ、翌年三月新築工事成リ同五月桑園七反餘歩ヲ設ケ、三十五年秋蠶期第一回ノ試育ヲ納屋ニ於テ行フ、同十二月蠶室一棟落成セルヲ以テ三十六年ヨリ新蠶室ニ於テ養蠶ヲ爲シ、諸般ノ試験ヲ行フト同時ニ、見習生規程ヲ設ケテ見習生ノ入

場ヲ許可セリ、同八月蠶種配付規程ヲ設ケ蠶種ノ配付ヲ行フ、三十七年三月分場ハ廢止セラレテ建物ノ大部分ヲ安倍郡豐田村曲金ナル本場ニ合併シ、同時ニ貯桑室ヲ増築セリ、爾來年々事業ヲ擴張シ、四十年安倍郡南賤機村安西外新田ニ桑園五段七畝八歩ヲ設置シテ栽桑ニ關スル試験ニ着手シ、四十三年二月見習生ヲ廢シテ新ニ蠶業練習生規程ヲ設ケ、始メテ同年度ヨリ其入場ヲ許シ實務者ノ養成ヲ爲スコト、セリ。蠶業部ニ關係アリシ職員ノ異動左ノ如シ。

就職年	退職年	職名	氏名
明治三十三年五月	明治三十四年九月	技師長	山根真逸
同	同	技師長	井口幹夫
同	同	技師長	成田軍平
同	同	技師長	林初太郎
同	同	技師長	青木信一
同	同	技師長	恩田經次
同	同	技師長	佐々木唯
同	同	技師長	川島清三
同	同	技師長	青島真平
同	同	技師長	永井孫太郎
同	同	技師長	狩野辰太郎
同	同	技師長	阿部保太郎

明治三十三年五月
同 四十二年四月

技手 岡田忠勇
技手 金子保

創立以來養蠶ニ關スル試驗ハ、飼育、上簇、病理、産卵及蠶種取扱等ノ各般ニ亘リテ之ヲ施行シ、又條桑育ノ流行ニ際シテハ連年普通育トノ比較試驗ヲ行ヒテ其優劣ヲ調査セリ、而シテ四十年度ヨリハ桑園ニ關スル試驗ヲ加ヘ、別ニ委託試驗トシテ田方郡ニ水害地仕立法試驗一ヶ所アリ、又養蠶ニ關スル試驗ハ近年主トシテ種類試驗ニカヲ注キ以テ優良種ノ發見ニ努メツ、アリ、試驗項目左ノ如シ。

- 一、養蠶ニ關スル試驗、春蠶種類試驗、秋蠶種類試驗、飼育法試驗、飼養法比較試驗、給桑量増減試驗、蠶座廣狹試驗、桑葉硬軟試驗、飼食時期試驗、給與試驗、蠶種貯藏委託試驗、蠶兒取扱試驗、眠起取扱試驗、消毒藥品給與試驗、上簇頭數試驗、綠蠶上簇試驗、上簇時期試驗、簇種類試驗、微粒子病遺傳試驗、膿病傳染試驗、産卵時期試驗、未熟蠶上簇種飼育試驗、糞糠代用品試驗、ホルドー液給與試驗、條桑育試驗、風穴種ニ關スル貯藏試驗、
- 二、桑樹栽培ニ關スル試驗、桑樹植付株數試驗、第一期刈株時期試驗、仕立法試驗、夏秋蠶專用桑園試驗、
- 三、委託試驗、水害地ニ於ケル桑樹仕立法試驗、

試驗以外ニ蠶業ニ關スル事業トシテハ、各地ノ講習、講話會ニ職員ヲ派遣シテ一般當業者ノ指導ニ努メ、又製造ノ蠶種ヲ希望者ニ配付シテ縣下ニ優良種ノ普及ヲ圖リ、尙蠶業練習生ヲ入場セシメテ實務者ノ養成ヲ爲ス等ヲ主要ナルモノトス、其累年ノ成績左ノ如シ。

年次	開設度數	講習生數	配付所數	配付蠶數	養蠶見習生及蠶業練習生修了者
明治三十七年	一回	九六名	1所	1	1名
三十八年	七	二八七	1	1	3
三十九年	四	二二八	五七	1	3
四十年	六	二六八	八五	九、九〇〇	四
四十一年	四	二二〇	三三	三、五七〇	七
四十二年	一	二八一	一一〇	一九、六〇〇	〇
四十三年	四	二七〇	一〇五	九、〇四四	二
四十四年	三	二六八	六六	八、三八一	二
四十五年	四	二六八	六六	八、三八一	一

備考 四十二年以前ハ養蠶練習生、四十三年以後ハ蠶業練習生ナリ

第九項 蠶絲業取締ニ關スル事項

蠶業取締所

明治四十五年度ヨリ蠶絲業法實施セラレタルヲ以テ四十四年十二月二十八日施行手續ヲ定メ、同四十五年一月一日ヲ以テ蠶業取締所ヲ設置シ、同日ヨリ一般事務ヲ開始セリ、其名稱位置並管轄區域ハ左ノ如シ。

名	稱	位	置	管轄區域
静岡縣蠶業取締所	静岡縣廳內			

下靜岡縣蠶業取締所	沼津支所	靜岡縣蠶業取締所	見同	濱松支所
賀茂郡下田町	駿東郡大岡村	田方、駿東、富士三郡一圓	小笠、周智、磐田三郡一圓	濱名、引佐二郡及濱松市一圓

前項蠶業取締所ノ設置セラルト同時ニ所長以下取締官吏、吏員及書記ヲ任命シ左ノ通り配置セリ。

勤務所名	官職	氏名	解任月日	官職	氏名	解任月日
靜岡縣廳	技師	渡邊 亥八	一月一日	技師	小林 衛	一月一日
蠶業取締官吏	技師	飯島善太郎	同	農技師	藤田新祐	同
所長	蠶業取締吏員	渡邊 亥八	一月一日	蠶業取締吏員	小林 衛	一月一日
蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	飯島善太郎	同	蠶業取締吏員	岩浪 爲治	同
蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	梁瀬林太郎	一月六日解任	蠶業取締吏員	根岸銀五郎	同
蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	肥田 宏	二月八日解任	蠶業取締吏員	今井理市	同
蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	曾根 惠吉	五月八日解任	蠶業取締吏員	鈴木開之輔	同
蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	大石國雄	一月一日	蠶業取締吏員	阿部保太郎	同
蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	實藤 豊吉	一月一日	蠶業取締吏員	杉浦 一然	同
蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	大庭 銀太郎	四月一日	蠶業取締吏員	鈴木保太郎	四月十五日

蠶業取締所	蠶業取締吏員	蠶業取締所	蠶業取締吏員	蠶業取締所	蠶業取締吏員
下田支所	主事 蠶業取締吏員	沼津支所	主事 蠶業取締吏員	靜岡支所	主事 蠶業取締吏員
黒田 龜次郎	鈴木 國太郎	黒田 龜次郎	鈴木 國太郎	黒田 龜次郎	鈴木 國太郎
一月一日	一月廿九日解任	一月一日	一月廿九日解任	一月一日	一月廿九日解任
鈴木 秀末	鈴木 秀末	鈴木 秀末	鈴木 秀末	鈴木 秀末	鈴木 秀末
一月二十九日	一月二十九日	一月二十九日	一月二十九日	一月二十九日	一月二十九日
小澤 清一	小澤 清一	小澤 清一	小澤 清一	小澤 清一	小澤 清一
一月一日	一月一日	一月一日	一月一日	一月一日	一月一日
增田 重三郎	增田 重三郎	增田 重三郎	增田 重三郎	增田 重三郎	增田 重三郎
三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日
伊藤 誠太郎	吉岡 國廣	伊藤 誠太郎	吉岡 國廣	伊藤 誠太郎	吉岡 國廣
一月一日	同	一月一日	同	一月一日	同
岡本 義一郎	榎土 義朗	岡本 義一郎	榎土 義朗	岡本 義一郎	榎土 義朗
同	同	同	同	同	同
鈴木 浩一	鈴木 浩一	鈴木 浩一	鈴木 浩一	鈴木 浩一	鈴木 浩一
同	同	同	同	同	同
石川 豊策	石川 豊策	石川 豊策	石川 豊策	石川 豊策	石川 豊策
三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日
渥美 源右衛門	渥美 源右衛門	渥美 源右衛門	渥美 源右衛門	渥美 源右衛門	渥美 源右衛門
一月一日	一月一日	一月一日	一月一日	一月一日	一月一日
松島 忠一	松島 忠一	松島 忠一	松島 忠一	松島 忠一	松島 忠一
同	同	同	同	同	同
内田 新次郎	荒川 嘉三郎	内田 新次郎	荒川 嘉三郎	内田 新次郎	荒川 嘉三郎
一月一日	同	一月一日	同	一月一日	同
泉地 由太郎	森 龍助	泉地 由太郎	森 龍助	泉地 由太郎	森 龍助
同	同	同	同	同	同
小楠 佐太郎	杉本 啓三	小楠 佐太郎	杉本 啓三	小楠 佐太郎	杉本 啓三
同	同	同	同	同	同
三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日	三月十一日
蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	蠶業取締吏員	蠶業取締吏員
神田 源太郎	土屋 半次	神田 源太郎	土屋 半次	神田 源太郎	土屋 半次
一月一日	同	一月一日	同	一月一日	同
橋本 文彌	野崎 善二	橋本 文彌	野崎 善二	橋本 文彌	野崎 善二
同	同	同	同	同	同
中里 純	佐原 周作	中里 純	佐原 周作	中里 純	佐原 周作
一月一日	同	一月一日	同	一月一日	同
長谷川 令二	秋元 棟平	長谷川 令二	秋元 棟平	長谷川 令二	秋元 棟平
同	同	同	同	同	同
高野 政一	阿部 利八	高野 政一	阿部 利八	高野 政一	阿部 利八
同	同	同	同	同	同
星 谷 漢	中野 惣作	星 谷 漢	中野 惣作	星 谷 漢	中野 惣作
同	同	同	同	同	同
海鉾 彌右衛門	内山 權治郎	海鉾 彌右衛門	内山 權治郎	海鉾 彌右衛門	内山 權治郎
一月一日	同	一月一日	同	一月一日	同
内藤 忠平	岩崎 修藏	内藤 忠平	岩崎 修藏	内藤 忠平	岩崎 修藏
同	同	同	同	同	同
加藤 與作	原田 權次郎	加藤 與作	原田 權次郎	加藤 與作	原田 權次郎
同	同	同	同	同	同

二一四	同	稻生澤村字河内	矢田部強一	二三八	同	稻梓村字落合	土屋晴三
二二五	同	同	村岡兼吉	二二三	同	同	飯田金吾
二二八	同	同	清水清藏	二四五	同	同	土屋六太郎
二五一	同	同	土屋清治	二三九	同	同	村田義太郎
二六一	同	同	小針祐藏	二四八	同	同	土屋榮吉
三三五	同	同	高杉嘉吉	二五〇	同	同	土屋萬次郎
二一八	同	同	清水平治	三三四	同	同	望月萬平
二一九	同	同	矢田部文平	二六二	同	同	田村幸太郎
二六〇	同	同	大野兵衛	二三四	同	同	内田修亮
二二五	同	同	里見忠平	二二七	同	同	後藤重兵衛
二二四	同	同	渡邊治助	二四〇	同	同	松田洪平
二二六	同	同	渡邊太助	二四一	同	同	高野勝吉
二二〇	同	同	清水若松	二四四	同	同	伊達洪吉
二六三	同	同	山田高治	二四九	同	同	小野菊之助
二六五	同	同	田中ふみ	二五七	同	同	島田長之助
二一七	同	同	田中み	二四二	同	同	新井米吉
二二七	同	同	飯田源平	二四三	同	同	加藤徳太郎
二二九	同	同	正木文平	二五六	同	同	井上與太郎
二二六	同	同	坂指松太郎	二五五	同	同	栗上徳太郎
二五二	同	同	金指松太郎	二四六	同	同	山口虎藏
二五三	同	同	渡邊龜太郎	二五四	同	同	萩原直七

二二一	白濱	長谷川治左衛門	清田清太郎
二三〇	同	金指清作	進士恒雄
二三一	同	土屋梅之助	外岡由利松
二三二	同	土屋梅之助	鈴木藤松

田方郡

番免 號許	住	所	氏名	番免 號許	住	所	氏名
六二	錦田村字塚原	同	岩崎芳太郎	一一九	田中村字神島	同	渡邊源兵衛
六三	同	同	仁田徳次郎	八五	上大見村	同	八木下金作
八八	同	同	加賀見直吉	八六	同	同	淺田三太郎
六四	三島町茅川原ヶ谷	同	鈴木又吉	八九	同	同	植田重太郎
六五	同	同	勝又吉	三三一	同	同	土屋清次郎
八七	同	同	眞田由五郎	九〇	同	同	武井初太郎
二九〇	同	同	眞田由五郎	九一	同	同	井村初太郎
二八一	同	同	眞田由五郎	九二	同	同	武井初太郎
二九一	同	同	眞田由五郎	一一六	同	同	高橋俊吉
二八四	同	同	眞田由五郎	一一七	同	同	岡橋俊吉
六八	同	同	眞田由五郎	二八二	同	同	岡橋俊吉
六八	同	同	眞田由五郎	二八三	同	同	岡橋俊吉
八四	同	同	眞田由五郎	一一八	同	同	石川愛次郎
一六七	同	同	眞田由五郎	一六一	同	同	石川愛次郎

駿東郡

番免 號許	住	所	氏	名	番免 號許	住	所	氏	名
一六二	同	土肥村字土肥	福室	幸作	三一	同	土肥村字土肥	城所	元七
一六七	同	小土肥	小野寺	右衛門	一六五	同	北狩野村柏久保	山口	恒吉
一六八	同	土肥	勝呂宗平						

番免 號許	住	所	氏	名	番免 號許	住	所	氏	名
二九	深良村字深良	田村佳四郎	清水村字長澤	渡邊政治郎	五〇	同	清水村字長澤	向笠榮之助	
一二二	同	土屋友次郎	同	岩崎豐三郎	一一一	同	同	伊山源次郎	
三〇	金岡村	野秋喜三郎	同	岩崎豐三郎	一二〇	同	同	伊山源次郎	
七三	同	野秋幸平	同	岩崎豐三郎	八二	須島村	同	伊山源次郎	
五三	同	桑山一貫	同	岩崎豐三郎	八一	同	同	伊山源次郎	
三一	同	植松幾藏	同	岩崎豐三郎	六〇	同	同	伊山源次郎	
五二	同	一杉常作	同	岩崎豐三郎	五七	同	同	伊山源次郎	
二八〇	同	小野喜作	同	岩崎豐三郎	五四	同	同	伊山源次郎	
六一	同	長倉政太郎	同	岩崎豐三郎	五八	同	同	伊山源次郎	
七一	同	長倉敏夫	同	岩崎豐三郎	五六	同	同	伊山源次郎	
七〇	同	三井保太郎	同	岩崎豐三郎	五四	同	同	伊山源次郎	
七五	同	鈴井惠作	同	岩崎豐三郎	七二	同	同	伊山源次郎	
一五九	同	小野猪太郎	同	岩崎豐三郎	六九	同	同	伊山源次郎	
一六九	同	木下常藏	同	岩崎豐三郎	七四	同	同	伊山源次郎	
三二	同	長泉村下土狩	同	岩崎豐三郎	八三	同	同	伊山源次郎	
八〇	同	同	同	岩崎豐三郎					

富士郡

番免 號許	住	所	氏	名
一六〇	長泉村竹原	木村周平		

番免 號許	住	所	氏	名	番免 號許	住	所	氏	名
七六	上野村字精進	渡井清作	岩松村字松岡	久保田德太郎	一二四	同	同	久保田德太郎	
七七	同	白糸村平野	同	久保田德太郎	一二五	同	同	久保田德太郎	
七八	同	須津村原	同	久保田德太郎	一二六	同	同	久保田德太郎	
七九	同	同	同	久保田德太郎	一二七	同	同	久保田德太郎	
九三	同	同	同	久保田德太郎	一六三	同	同	久保田德太郎	
一七〇	同	同	同	久保田德太郎	一六四	同	同	久保田德太郎	
一二三	同	同	同	久保田德太郎					

庵原郡

番免 號許	住	所	氏	名	番免 號許	住	所	氏	名
一八	庵原村字茂畑	杉山百太郎	兩河内村字高山	青木淺次郎	二六	同	同	青木淺次郎	
一九	同	杉山伊三郎	由比町入山	望月由松	二七	同	同	望月由松	

安倍郡

番免 號許	住	所	氏	名	番免 號許	住	所	氏	名
----------	---	---	---	---	----------	---	---	---	---

一九五	吉津村字吉美	彦坂久作	一九八	白脇村字白羽	藤井安太郎
一九一	入野村入	山口善三郎	二九八	飯田村上飯田	鈴木猪三郎
一四五	河輪村三	鈴木長太郎	三〇二	同 飯田	鈴木木房吉
三一	同 河	中津川仲太郎	三〇三	同 飯田	小倉久太郎
一四三	龍池村西	市川八十郎	三〇四	新居町濱	松井榮五郎
三一〇	同 龍池	合名三龍舎	三〇七	同 濱	加藤作左衛門
三一五	同 善地	鈴木安次郎	三二七	同 須賀郷	小田孫兵衛
一八七	南庄内村協和	今田鷹三郎	三三三	北濱村字横	山本鏡辰
二八六	同 庄内々	眞瀬龜藏	三三八	北濱村高	山本鏡辰
一九四	赤佐村於呂	河野儀藏	三〇八	同 野	小野源五郎

引 佐 郡

四一	都田村字龍澤	松本茂重	二七五	井伊谷村字伊井	中井宇平
一〇一	同 都田	山下八重	二七六	同 伊井	内山喜平
二七八	同 都田	新田金平	二七五	同 伊井	田口美八
二七三	同 都田	小林種次	一一三	同 伊井	河西浦太郎
二七四	同 都田	江間丑藏	一一四	同 伊井	高橋信次
二七四	同 都田	牧澤花吉	一五七	同 伊井	尾藤初次
四八	同 都田	鈴木與七	二〇三	同 伊井	藤原耕平
一五二	同 都田	加藤類治	二〇五	同 伊井	相澤濱吉
二〇二	同 都田	奥村菊重	二〇六	同 伊井	清水浦太郎
三二〇	同 都田	同 奥村	二〇六	同 伊井	同 清水

一五四	同 東濱名村大田	戸田富三郎	二〇七	同 岡本	大谷豊太郎
四六	同 東濱名村大田	加藤富太郎	二〇八	同 岡本	藤原孝一
一一二	同 東濱名村大田	山口幸茂	二七二	同 岡本	尾藤耕平
一五六	同 東濱名村大田	井口芳藏	二七六	同 岡本	黒柳益五郎
二〇九	同 東濱名村大田	金子芳藏	二八八	同 岡本	藤田三津五郎
四七	同 東濱名村大田	柳瀬政治	三二九	同 岡本	鈴木喜三郎
一五三	同 東濱名村大田	長田福太郎	二一〇	同 岡本	後藤喜三郎
一五五	同 東濱名村大田	堀越藤太郎	二一〇	同 岡本	後藤喜三郎
一一一	同 東濱名村大田	同 堀越	二〇四	同 岡本	鳴藤銀平
二〇一	同 東濱名村大田	同 堀越	二〇四	同 岡本	石原勘藏
一〇〇	同 東濱名村大田	井伊谷村花平	二八九	同 岡本	同 石原

濱 松 市

三二八	鍛冶町	中村順三郎	三三〇	元目町	竹下桑次郎
三二九	同 鍛冶	水野七太郎	三三〇	同 元目	同 竹下

第十項 蠶病豫防ニ關スル事項

施行機關

▲蠶病豫防事務所、明治三十八年四月蠶病豫防法ヲ公布セラレ、ヤ、之カ施行機關トシテ縣下五箇所ノ

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 施行機關

明治四十四年四月其組織ヲ更メテ新ニ静岡縣蠶病豫防事務所ヲ設ケ、從來ノ各蠶病豫防事務所ヲ其支所トナシ、更ニ出張所ヲ設置シテ専ラ事務ノ統一ト簡捷トヲ圖ルコト、セリ、其位置、名稱、管轄區域及開設期間左ノ如シ。

名	稱	位	置	管轄區域	開設期間
静岡縣蠶病豫防事務所	静岡市追手町	常設	賀茂郡一圓		
同	下田支所	同	田方、駿東、富士三郡一圓		
同	沼津支所	同	庵原、安倍、志太、榛原四郡、静岡市一圓		
同	靜岡支所	同	小笠、周智、磐田三郡一圓		
同	見付支所	同	濱名、引佐二郡、濱松市一圓		
同	濱松支所	同	田方郡一圓		
静岡縣蠶病豫防事務所	沼津支所 三嶋出張所	同	磐田郡ノ内 袋井町、久努村、田原村、笠西村、上淺羽村	自六月二十八日 至十二月二十八日	
同	見付支所 袋井出張所	同	周智郡ノ内 森町、一宮村、園田村、飯田村、宇刈村、山梨村、天方村、犬居村、久努西村、氣多村、熊切村、三倉村	同	
同	見付支所 袋井出張所	同	小笠郡一圓	同	
同	見付支所 奥山出張所	同	周智郡ノ内 奥山村、城西村	自六月十日 至十月十日	
同	濱松支所 吉津出張所	同	磐田郡ノ内 佐久間村、浦川村、山香村、龍山村、龍川村	同	
同	濱松支所 白須賀出張所	同	濱名郡ノ内 知波田村、入出村、新所村、吉津村、引佐郡ノ内 西濱名村、東濱名村	同六月二十八日 同十二月二十八日	
濱松支所	白須賀出張所	同	濱名郡 白須賀町	同	

明治四十五年一月一日ヨリ蠶絲業法施行セラル、ニ及ヒテ、各蠶病豫防事務所ハ新ニ蠶業取締所ト革マレリ。

▲職員數、蠶病豫防事務所施行ノ任ニ當ル吏員ハ、蠶絲業ノ發展ニ伴ヒ豫防事務所ノ増加ト共ニ逐年其數ヲ増シ、尙四十二年ヨリハ女子吏員採用ノ途ヲ啓キテ専ラ鏡檢事務ニ従事セシメタリ、助手及書記ノ數モ亦之ニ伴フテ漸次増加セルコト左表ノ如シ。

年 度	蠶病豫防吏員		助 手		書 記	
	實 數	延 人員數	實 數	延 人員數	實 數	延 人員數
明治三十八年	四	四	一	一	一	一
三十九年	九	九	二	二	二	二
四〇年	〇	〇	三	三	三	三
四一年	一	一	四	四	四	四
四二年	二	二	五	五	五	五
四三年	三	三	六	六	六	六
四四年	四	四	七	七	七	七
四五年	四	四	八	八	八	八
四六年	四	四	九	九	九	九
四七年	四	四	一〇	一〇	一〇	一〇
四八年	四	四	一一	一一	一一	一一
四九年	四	四	一二	一二	一二	一二
五〇年	四	四	一三	一三	一三	一三
五一年	四	四	一四	一四	一四	一四
五二年	四	四	一五	一五	一五	一五
五三年	四	四	一六	一六	一六	一六
五四年	四	四	一七	一七	一七	一七
五五年	四	四	一八	一八	一八	一八
五六年	四	四	一九	一九	一九	一九
五七年	四	四	二〇	二〇	二〇	二〇
五八年	四	四	二一	二一	二一	二一
五九年	四	四	二二	二二	二二	二二
六〇年	四	四	二三	二三	二三	二三
六一年	四	四	二四	二四	二四	二四
六二年	四	四	二五	二五	二五	二五
六三年	四	四	二六	二六	二六	二六
六四年	四	四	二七	二七	二七	二七
六五年	四	四	二八	二八	二八	二八
六六年	四	四	二九	二九	二九	二九
六七年	四	四	三〇	三〇	三〇	三〇
六八年	四	四	三一	三一	三一	三一
六九年	四	四	三二	三二	三二	三二
七〇年	四	四	三三	三三	三三	三三
七一年	四	四	三四	三四	三四	三四
七二年	四	四	三五	三五	三五	三五
七三年	四	四	三六	三六	三六	三六
七四年	四	四	三七	三七	三七	三七
七五年	四	四	三八	三八	三八	三八
七六年	四	四	三九	三九	三九	三九
七七年	四	四	四〇	四〇	四〇	四〇
七八年	四	四	四一	四一	四一	四一
七九年	四	四	四二	四二	四二	四二
八〇年	四	四	四三	四三	四三	四三
八一年	四	四	四四	四四	四四	四四
八二年	四	四	四五	四五	四五	四五
八三年	四	四	四六	四六	四六	四六
八四年	四	四	四七	四七	四七	四七
八五年	四	四	四八	四八	四八	四八
八六年	四	四	四九	四九	四九	四九
八七年	四	四	五〇	五〇	五〇	五〇
八八年	四	四	五一	五一	五一	五一
八九年	四	四	五二	五二	五二	五二
九〇年	四	四	五三	五三	五三	五三
九一年	四	四	五四	五四	五四	五四
九二年	四	四	五五	五五	五五	五五
九三年	四	四	五六	五六	五六	五六
九四年	四	四	五七	五七	五七	五七
九五年	四	四	五八	五八	五八	五八
九六年	四	四	五九	五九	五九	五九
九七年	四	四	六〇	六〇	六〇	六〇
九八年	四	四	六一	六一	六一	六一
九九年	四	四	六二	六二	六二	六二
一〇〇年	四	四	六三	六三	六三	六三

▲經費、蠶病豫防ニ關スル經費モ亦逐年其額ヲ増加セリ、之レ豫防事務所ノ増加、特ニ原種製造額ノ激増ニ伴フ結果ナリトス、即チ左ノ如シ。

年 度	豫 算		決 算	
	吏 員 費	蠶病豫防費	吏 員 費	蠶病豫防費
明治三十八年	一〇〇七	二九〇	一〇〇七	二九〇
三十九年	一三、一四〇	一、九〇〇	一三、一四〇	一、九〇〇
四〇年	一三、九六六	三、九一六	一三、九六六	三、九一六
四一年	一四、二四〇	三、九一六	一四、二四〇	三、九一六
四二年	一七、九二二	四、一〇〇	一七、九二二	四、一〇〇
四三年	一八、一〇〇	四、一〇〇	一八、一〇〇	四、一〇〇
四四年	二〇、八五七	四、一〇〇	二〇、八五七	四、一〇〇
四五年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
四六年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
四七年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
四八年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
四九年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五〇年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五一年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五二年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五三年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五四年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五五年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五六年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五七年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五八年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
五九年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六〇年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六一年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六二年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六三年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六四年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六五年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六六年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六七年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六八年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
六九年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七〇年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七一年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七二年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七三年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七四年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七五年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七六年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七七年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七八年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
七九年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八〇年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八一年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八二年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八三年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八四年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八五年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八六年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八七年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八八年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
八九年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九〇年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九一年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九二年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九三年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九四年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九五年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九六年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九七年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九八年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
九九年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇
一〇〇年	二二、二六六	四、一〇〇	二二、二六六	四、一〇〇

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 蠶病消毒施行ノ狀況

明治	三	三	四	四	四	四	四	四	四	四	四
年	九	九	〇	一	二	三	四	四	四	四	四
二二五七	一三四七	一〇八〇	二二〇六	二〇一五	二四三九	二四五四	二九三三	三〇六四	三六〇四	九二二〇	九二二〇
七七一	一〇八九	二〇八〇	二二〇六	二〇一五	二四三九	二四五四	二九三三	三〇六四	三六〇四	九二二〇	九二二〇
二〇二七	二四三六	二二〇六	二〇一五	二〇一五	二四三九	二四五四	二九三三	三〇六四	三六〇四	九二二〇	九二二〇
二二三五	一三三三	二二〇六	二〇一五	二〇一五	二四三九	二四五四	二九三三	三〇六四	三六〇四	九二二〇	九二二〇
七三七	九九六	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七	一九一七
一九九七	二二八四	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五
二〇九三	二二八四	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五	四〇六五
五三九	五三九	五三九	五三九	五三九	五三九	五三九	五三九	五三九	五三九	五三九	五三九

備考 四十一、四十二兩年度ニ於ケル臨時費ハ、濱松蠶病豫防事務所建築ニ要シタル費用ナリ。

蠶病消毒施行ノ狀況

▲蠶種製造者消毒、本法施行ノ當初ニアリテハ當業者中消毒ノ心得無キモノ多カリシヲ以テ、之カ施行及監督上多少ノ困難ヲ感シタリシモ、銳意其指導誘掖ニ努メタル結果漸次完全ノ成績ヲ舉クルニ至レリ、即チ消毒ハ蠶兒飼育又ハ蠶種ノ製造前毎ニ之ヲ行ハシメ、豫メ蠶病豫防事務所ヨリ施行期日ヲ指定シ置キ、當日吏員ヲ臨檢セシメテ指揮監督ノ下ニ之ヲ行ハシムルコト、セリ、消毒ノ方法ハ主トシテ「フオルマリ」撒布消毒ナリト雖、蠶具ニ對シテハ蒸氣消毒ヲ行フモノ少ナカラス、又稀ニ蟻酸「アルデヒド」瓦斯消毒ヲ行フモノアリ、毎年度ニ於ケル各種消毒ノ割合左ノ如シ。

年度	消毒施行延戸數	「フオルマリ」撒布	「フオルマリ」撒布	蟻酸「アルデヒド」瓦斯	蒸	具	汽
明治	一六三	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
三	一〇七	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
八	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
九	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
〇	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
一	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
二	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
三	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
四	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
四	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割
四	一三九	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割	〇割

尙消毒ヲ施行シタル蠶室ノ面積、蠶具ノ數量及之ニ要シタル藥品ノ分量ヲ示セハ左表ノ如シ。

年度	「フオルマリ」撒布	「フオルマリ」撒布	蟻酸「アルデヒド」瓦斯	蒸	具	汽
明治	一八〇八〇	四六二五八	五〇七三	四三六五	二〇九八三	二〇九八三
三	二四〇三	五八二八二	四九五九	六二八五	一〇五二八	一〇五二八
八	二二九七	五二五五	二九五〇	二八三七	九二八二	九二八二
九	三二八九	八八七五	八七〇〇	七九三〇	一三九二六	一三九二六
〇	四一六六	九四九六	八七〇〇	七九三〇	一三九二六	一三九二六
一	四一六六	九四九六	八七〇〇	七九三〇	一三九二六	一三九二六
二	四一六六	九四九六	八七〇〇	七九三〇	一三九二六	一三九二六
三	四一六六	九四九六	八七〇〇	七九三〇	一三九二六	一三九二六
四	四一六六	九四九六	八七〇〇	七九三〇	一三九二六	一三九二六
四	四一六六	九四九六	八七〇〇	七九三〇	一三九二六	一三九二六

備考 一、三十八年度ハ調査ヲ缺クテ以テ掲ケス。
二、蠶具ノ數量ハ蠶種、蠶延、蠶網等ノ枚數ヲ掲出セリ。

▲養蠶者消毒、 本法施行ト同時ニ養蠶者ヲシテ蠶病消毒ノ有利ニシテ必要缺ク可ラサルコトヲ周知セシメムカ爲、縣下各町村ニ吏員ヲ派遣シテ講話、講習會ヲ開キテ其實行ヲ促ス等極力之ヲ奨励シ、當業者亦蠶業ニ關スル知識ノ進歩ト共ニ逐次其必要ヲ感スルニ至リ、或ハ自ら消毒器ヲ購入シ、或ハ共同シテ之ヲ備フル等ノ方法ヲ講シテ實施ヲ爲スモノ年ト共ニ増加シ、今ヤ漸ク縣下各地ニ普及スルニ至レリ、消毒ノ方法ハ蠶種製造者ト同シク施行簡易ニシテ効力ノ確實ナル「フォルマリン」撒布消毒大部分ヲ占メ、四十三年度ニ於テ縣下養蠶者ノ使用シタル藥品ノ全量ハ二萬四千九百十四磅ニ上リ、其價額實ニ九千百四拾貳圓ニ及ヘリ。

蠶種製造成績

▲蠶種製造者數、 蠶業ノ發達ニ伴ヒ蠶種ノ需用次第ニ増加セルノミナラス、近來地方蠶種ノ信用高マリテ他府縣ヨリ移入スルモノ漸次減少シ爲ニ一層多大ノ需用ヲ見ルニ至リタレハ、養蠶者中技術熟練ノモノハ進ンテ蠶種ノ製造ヲ企ツルモノ多ク、從テ製造者數ハ年ヲ逐フテ増加セリ、即チ左表ノ如シ。

年 度	製造者數	一 化 性				二 化 性				多 化 性			
		一	二	三	四	一	二	三	四	一	二	三	四
明治三十八年	二六八	一七〇	一四〇	三〇	一八	三	三	三	二	一	一	一	一
三十九年	三三三	二〇〇	一四〇	三〇	二五	五	三	三	二	一	一	一	一
四十年	二六四	二〇〇	一八〇	三〇	三〇	五	三	三	二	一	一	一	一

年 度	製造者數	一 化 性				二 化 性				多 化 性			
		一	二	三	四	一	二	三	四	一	二	三	四
四十年	二七四	二一〇	一七〇	三〇	一四	三	三	三	二	一	一	一	一
四十一年	三〇〇	二四八	二三三	三〇	一四	三	三	三	二	一	一	一	一
四十二年	三三七	三〇三	二四四	三〇	一三	三	三	三	二	一	一	一	一
四十三年	三六六	四四七	二九七	三〇	一〇	三	三	三	二	一	一	一	一

▲蠶況視察成績、 蠶況視察ハ概ネ掃立後及上簇前ノ二回ニ於テ蠶兒發育ノ狀況ヲ臨檢シ、以テ飼育上諸般ノ注意ヲ爲セリ、今施行以來各年度ニ於ケル臨檢戸數並原種掃立數量ヲ示セハ左ノ如シ。

年 度	蠶種製造者數	同代理者數	掃立戸數	掃立蛾數	掃立蠶量
明治三十八年	四八九	三九二	一四八二	二六五〇〇	七三四・四
三十九年	五五五	四二七	二五四一	三三七六九	八三九・五
四十年	七〇四	七八九	二四七	三六三九五	二二六四・五
四十一年	六三三	一	一	二七〇・三	九五七四・七
四十二年	八一九	一〇四五	二七六	四五一四五	一六四一・八
四十三年	八三九	九四五	三〇七	四九〇四七	一八六九・〇
四十四年	八三三	九五六	二四二	三九〇三二	一五九五・〇

▲收繭検査成績、 收繭検査ハ選繭豫定日時ニ應シ、可及的迅速ニ之ヲ行ヒ遺憾ナカラムコトヲ期セリ、各年度ニ於ケル成績ヲ見ルニ原種掃立ノ増加ニ從ヒ年々收繭ノ量ヲ増大シ、且ツ蠶量一匁ニ對スル收繭額ハ年ヲ逐フテ増加シツ、アリ、即チ左表ニ示スカ如シ。

年 度	蠶種製造者延數	原種數	繭立量	收繭量	其他繭	額計	對繭量一匁收繭額
明治三八年	四七	一五八〇四	五二六・六	七七一・四	六七二・六	一四三八・六	二七四
三九	四八七	一八一三六	六二六・二	一〇九七・四	七三六・五	一八〇三・九	二八八
四〇	六五四	二七〇二五〇	九三〇・六	一五五二・四	一一九三・六	二七一一・七	二九一
四一	六三三	二七〇二三五	九五七・四	一七〇一・二	一一五九・三	二七一一・七	二九一
四二	六四九	三三三・三八	一二四六・二	二二九九・七	一五八七・〇	三二六・七	三〇七
四三	八三九	三八五四三	一四七四・五	二七二九・〇	一八七〇・五	四五六・四	三〇〇
四四	八三三	三九八〇一	一五一九五・〇	二七六七・二	一八九九・七	四五六・〇	三〇三

▲蠶種製造後検査成績、製造後検査ハ當業者ヨリノ検査請求毎ニ可成其都度臨檢ヲ行ヒタリ、之レ亦逐年良好ノ成績ヲ現ハシ、特ニ原種ノ製造額ハ近年非常ナル速度ヲ以テ増額ヲ來シ、最近數年間ニ於テ約十倍ノ發達ヲ遂ケタリ、此ハ蠶業ノ進歩ト共ニ原種ノ需用著シク増加セルヲ證スルモノニシテ最モ喜フ可キ現象ナリトス。

年 度	蠶種製造者延數	出蛾繭	出繭繭	其他繭	計	原種假合	製絲用種枚數	不合格	化歩
明治三八年	四七	六五、八二六	四〇、二六六	六、六四八	一一二、七四〇	二、二二二	五九、五九	九、九	八六
三九	四八七	八七七、八七七	六六、五三三	六、六四八	一〇三、九三三	四、二八三	六六、〇一	一、〇〇	八六
四〇	六三六	一三九、六〇三	六四、五九六	八、三三六	一五四、九八五	八、四八五	七九、九二	一、九〇	九〇
四一	六三三	一四六、七三六	五六、四一八	一七、三三〇	一六九、八〇四	一〇、六三三	九一、二三	三、〇三	八六

▲原種母蛾検査成績、不越年蠶種母蛾検査ハ毎年五月ヨリ九月ニ亘リ、出張事務ノ餘暇ヲ以テ迅速ニ檢了シ、越年蠶種母蛾検査ハ七月乃至八月ヨリ十二月ニ亘リテ之ヲ結了セリ、其成績ハ左表ニ示スカ如ク原種製造額ハ年々劇増シツ、アルニ拘ラス病毒歩合ハ年々逐フテ著シキ遞減ヲ示セリ。

年 度	検査口數	無毒	有毒	其他	計	無毒	有毒	合
明治三八年	七四四	一、九〇五・七	二、六六九・九	二、二八九・八	六、八六五・四	八、六八	一、三三	一、〇三
三九	九二四	三、六四一・七	四、九一一・〇	四、一七一・一	一二、七六三・八	八、七三	一、二九	一、〇六
四〇	一、三六八	七、七九三・一	六、一三〇・八	七、〇〇八	一〇、六三三・〇	九、一七	一、四六	〇・七三
四一	一、四八三	九、八九〇・六	六、六三三・三	七、〇〇四	一〇、六三三・〇	九、三七	一、二六	〇・六一
四二	一、九八七	一四、五三三・五	一〇、七七五・七	一、七七一・九	一五、七七九・一	九、三一	〇・六九	〇・六九
四三	二、三六三	一九、〇三三・四	一、三三三・〇	一、八六六・一	二〇、三三三・一	九、四四	〇・五五	〇・五五
四四	二、四四二	二〇、五〇三・六	八、五九九・一	一、九三四・九	二二、九三七・六	九、六〇	〇・四〇	〇・四〇

▲製絲用種卵検査成績、現行法施行以來製絲用種ニシテ病毒存在ノ疑アルモノハ、嚴ニ卵検査ヲ行ヒタリト雖、近時濫造ノ弊漸ク跡ヲ絶チ、病毒ノ減少ハ前項ニ記セルカ如ク大ニ見ルヘキモノアルニ至リタルヲ以テ、一般ニ卵検査ノ必要ヲ認ムルコト少ナカリシ。

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 蠶種製造成績

年度	製造用種數	卵検査ヲ行ヒタル數	合格數	不合格數
明治三十八年	五九、五七九枚	春蠶 五五枚		五五枚
三十九	六八、六〇一			
四〇	七九、九二五			
四一	六一、二二三			
四二	六八、五六九	風穴 三五四		
四三	六五、八二九			
四四	五一、四九八			

▲主要ナル蠶種ノ名稱及其製造額、 縣下ニ於テ製造セラル、主要ナル蠶種ノ名稱ハ、一化性ニ在リテハ又昔、中巢、青熟、白玉、小石丸、二化性ニ在リテハ中巢、種ヶ島、白龍、龍馬、多化性ニ在リテハ角又大巢、角又等ナリトス、今二十八年以來ニ於ケル此等ノ製造額ヲ示セハ左表ノ如シ。

一化性蠶種

年度	又昔	中巢	青熟	白玉	改良小石丸	大又	小石丸	青熟中巢
明治三十八年	三〇八、七三三枚	三三、二八九	二九、九三五	一四〇、五四一	二九、九三五	四七、六九二	一〇、八四八	二八、五九七
三十九	六六、九九九	三三、三三九	四、六六	四七、七	四五、五三	三七四	四九、八	二、七六一
四〇	六六、九九九	四六、三三七	一七、〇五五	二四、七〇〇	四六、四三〇	二〇、七〇七	三、五八三	一、六二四
四一	六六、九九九	四七、〇六	四、一四	五、三七七	二、八四	二、六四	三、〇	三、六九七

二化性及多化性

年度	原種	製絲用種	種ヶ島	龍馬	白龍	飛性白	角又大巢	天龍錦	角又
四〇	一、三〇、九九三枚	一、二八、二四三	五七、〇八九	五五、四六九	八〇、四七九	三、四九七	二〇、四六九	五、三三三	二、六五〇
四一	一、六九、七八八	一、四四、八四三	五、二八一	六、九二九	三、五〇三	六、八五	一、五三六	一、七九六	六、七〇、八四八
四二	二、八七、七六六	二、四六、五七七	二、七五	九、〇〇〇	三、〇、九四	六、九六	一、八七八	一、八〇〇	八、八八、八〇〇
四三	三、四八、〇〇六	二、六四、二二七	一、七四、五九二	一、四六、四三三	二、八、七三〇	五、二七	三、九三、八七六	三、三三六	八、八、八〇〇
四四	五、〇〇、〇〇〇	二、三〇、九八四	一、八七、二〇四	一、四八、四一〇	一、〇六、四八八	五、九八、八二六	七、三、五二二	四、五、五八	八、三、一七六

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 蠶種製造成績

年度	原種	製絲用種	種ヶ島	龍馬	白龍	飛性白	角又大巢	天龍錦	角又
明治三十八年	一、四三、五三三	二、八、一六	三、三七二	六、三、五八	四〇、一八三	二、五、八一八	八、〇、六六	一、一、四四	六、二、五二
三十九	二、八、一六	五、九、四一七	二、六、〇四八	一、一、六	二、三、四三	一、六、三六	二、五、八三九	一、五、三	二、六、七二
四〇	九、九、七五六	二、八、九〇四	八、七、〇六二	六、七、三	一、四、四、七三	五、六、九五	二、五、八三九	六、六、三	七、七、三二
四一	四、九、九二	二、四、八	一、九、八、一六	一、〇、一、六	一、五、二、四九	一、〇、五、八五	七、六、七九八	一、四、三、七四	六、七、〇
四二	四、九、九二	二、四、八	一、九、八、一六	一、〇、一、六	一、五、二、四九	一、〇、五、八五	七、六、七九八	一、四、三、七四	六、七、〇
四三	四、九、九二	二、四、八	一、九、八、一六	一、〇、一、六	一、五、二、四九	一、〇、五、八五	七、六、七九八	一、四、三、七四	六、七、〇
四四	四、九、九二	二、四、八	一、九、八、一六	一、〇、一、六	一、五、二、四九	一、〇、五、八五	七、六、七九八	一、四、三、七四	六、七、〇

蠶種名稱	一化性		二化性		三化性		多化性	
	原種	製絲用種	原種	製絲用種	原種	製絲用種	原種	製絲用種
四一	14606	3193	42535	33273	25816	17664	66503	13895
四二	20798	7057	70579	22680	39944	19186	99304	9540
四三	23692	4177	71844	14764	47256	70868	94976	2334
四四	20563	2066	50738	65408	27033	49784	23744	1064
合計	10066	1006	100	376	1519	59	7999	110

▲蠶種名稱ノ増減、蠶種ノ名稱ハ一化性ニ在リテハ製造ノ増額ト同時ニ漸次増加ノ傾向アリ、多化性ハ之ニ反シ年々其數ヲ減シ、二化性ハ年ニ依リ多少ノ差異アリト雖甚シキ増減ヲ見ス、即チ左表ニ示スカ如シ。

化性	一化性	二化性	三化性	多化性
原種	26	30	20	8
製絲用種	37	7	6	2
合計	63	37	26	10

養蠶者臨檢ノ狀況

養蠶者ノ臨檢ハ本法施行ノ當初ニ在リテハ主トシテ當業者ヲシテ法ノ精神ヲ周知セシムル爲、飼育中一回以上ノ巡回ヲナシ以テ蠶病消毒ノ必要、病蠶處理ノ方法等ヲ教へ、併セテ飼育上ノ指導ヲ行ヒ銳意豫防法ノ目的ヲ達スルニ努メタル結果、其成績ノ見ルヘキモノ多大ナリシト雖時勢ノ進歩ハ大ニ養蠶業ノ改良發達ヲ促スヘキ狀勢ニ在ルヲ以テ、明治四十三年ニ至リ養蠶者臨檢ノ方針ヲ更ニ一層積極的ニ更ムルニ至レリ、即チ臨檢吏員ノ數ヲ増加シテ各郡其擔當區域ヲ定メ、催青飼育上籾ノ各期ニ亘リテ數回養蠶家各戸ニ就キ巡回指導ヲナシ、以テ到ル處圓滿ノ好果ヲ擧ケシムルコトヲ圖リタルノミナラス、或ハ桑園ノ改良ヲ獎メ、共同事業ノ必要ヲ説キ、或ハ講話會ヲ開キテ進歩セル思想ノ注入ニ努ムル等殆ト斯業ノ獎勵誘掖上最善ヲ盡シタリ、四十三年ニ於テハ主トシテ春蠶ニ就キ之ヲ行ヒタルモ、四十四年ニハ更ニ其範圍ヲ擴張シテ夏秋蠶ニ及ホセリ、隨テ之ニ依リテ當業者ノ得タル便益ハ實ニ甚大ニシテ、當ニ蠶病豫防ノ目的ヲ達スルニ遺憾ナカリシノミナラス、斯業ノ發達上貢獻セルコト鮮少ニ非サリシナリ、其各年度ニ於ケル成績左表ノ如シ。

年度	養蠶總戸數	臨檢				合計	消毒ヲ命ジタル戸數
		一化性	二化性	三化性	多化性		
明治三八年	6153	424	284	284	44	6973	大
三九年	9779	1234	759	2854	56	1949	大
四〇年	10104	1171	491	759	56	1949	大
四一年	11381	428	3257	491	97	7543	大

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 蠶蛆驅除ノ狀況

四	四	四
四	三	二
10,565	8,654	1,551
10,803	1,917	30
10,900	1,725	8,568
		3
		35,855
		1,937
		36
		7

蠶蛆驅除ノ狀況

▲蠶蛆驅除施行ノ監督、 蠶蛆驅除監督ニ就テハ特ニ其季節ニ至リテ豫防吏員ヲ増加シ、各自受持區域ヲ定メテ專ラ之カ取締ニ任スル外、警察官吏及郡市蠶絲業組合等ニ取締委員ヲ置カシメ、生繭買買者、生絲製造者、殺蛹乾繭者及蠶種製造者、養蠶者等ニ對シテ毎戸ニ就キ豫防監督ヲ勵行セシメタリ、今施行以來各年ニ於ケル生繭買買者、生絲製造業者及殺蛹乾繭業者ノ數及其等生繭取扱石數ヲ示セハ左ノ如シ。

年 度	生 絲 製 造 者		生 繭 買 買 者		殺 蛹 乾 繭 者		計
	戸 數	生 繭 取 扱 石 數	戸 數	生 繭 取 扱 石 數	戸 數	生 繭 取 扱 石 數	
明治三十八年	二二	七,八四四	五三	一七,一〇九	二七	四,八〇〇	四,八〇〇
三十九年	一八七	三六,〇七四	九四五	八三,六九八	六	三,八一七	三,八一七
四〇年	二〇〇	五,六七八	九三三	七,二四〇	二七	九,六七〇	九,六七〇
四一年	五七九	四八,〇一一	一,三四	八三,四九四	三	四,九五	四,九五
四二年	二〇九	三八,一三五	三,〇八〇	二六,三三八	六	一,三三六	一,三三六
四三年	二二五	三九,四八五	三,四〇六	二四,四七二	九	五,〇七〇	五,〇七〇
四四年	一五六	三五,九七〇	三,〇五八	一八,六七二	二五	六,八一三	六,八一三

尙各種業者ニ對シ臨檢ヲ施行シタル延戸數左表ノ如シ。

年 度	蠶 種 製 造 者		養 蠶 者		生 絲 製 造 者		生 繭 買 買 者		殺 蛹 乾 繭 者		計
	戸 數	蠶 種 取 扱 石 數	戸 數	蠶 種 取 扱 石 數	戸 數	生 繭 取 扱 石 數	戸 數	生 繭 取 扱 石 數	戸 數	生 繭 取 扱 石 數	
明治三十八年	七	三,三四八	四四〇	一,一九	二九〇	五,三三六	二五	六,八九七	二五	六,八九七	五,三三六
三十九年	七	二,七二八	四三三	一,六九九	一五七	五,〇九七	二五	六,八九七	二五	六,八九七	五,〇九七
四〇年	一〇	二,九三七	四三三	一,二六三	一六三	四,五六二	二五	六,八九七	二五	六,八九七	四,五六二
四一年	一三	四,五四六	三三九	一,二二四	一六三	六,二九四	二五	六,八九七	二五	六,八九七	六,二九四
四二年	一三	四,五四六	三三九	一,二二四	一六三	六,二九四	二五	六,八九七	二五	六,八九七	六,二九四
四三年	一四	八,一七三	三五二	二,〇六	一五二	一,三二九	二五	六,八九七	二五	六,八九七	一,三二九
四四年	二五	一四,一七三	一七八	三,四〇七	一五二	八,五二二	二五	六,八九七	二五	六,八九七	八,五二二
四五年	三五	三,三三三	一五六	三,〇五六	一五六	六,八九七	二五	六,八九七	二五	六,八九七	六,八九七

▲蠶蛆捕獲數量、 蠶蛆驅除ノ目的ヲ達スル爲、病蠶ノ處理、屑繭ノ乾燥、廢簇ノ燒棄等ハ特ニ之ヲ獎勵セリト雖、蠶種製造者其他生繭取扱者ニ在リテハ勢ヒ出蛆ノ已ムヲ得サルモノアルヲ以テ、之等ニ對シテハ毎ニ其散逸ヲ防キ悉ク之ヲ捕獲殺滅セシムルコトニ努メタリ、即チ施行以來各種業者ニ於テ捕獲シタル蠶蛆ノ數量左表ノ如シ。

年 度	蠶 種 製 造 者		養 蠶 者		生 絲 製 造 者		生 繭 買 買 者		殺 蛹 乾 繭 者		其 他	計
	戸 數	蠶 種 取 扱 石 數	戸 數	蠶 種 取 扱 石 數	戸 數	生 繭 取 扱 石 數	戸 數	生 繭 取 扱 石 數	戸 數	生 繭 取 扱 石 數		
明治三十九年	?	三,三三三	?	三,三三三	?	一,五二	?	六,九七	?	元	?	四,五六八
四〇年	?	三,三三三	?	三,三三三	?	一,五二	?	六,九七	?	元	?	四,五六八
四一年	?	三,三三三	?	三,三三三	?	一,五二	?	六,九七	?	元	?	四,五六八
四二年	?	三,三三三	?	三,三三三	?	一,五二	?	六,九七	?	元	?	四,五六八
四三年	?	三,三三三	?	三,三三三	?	一,五二	?	六,九七	?	元	?	四,五六八
四四年	?	三,三三三	?	三,三三三	?	一,五二	?	六,九七	?	元	?	四,五六八
四五年	?	三,三三三	?	三,三三三	?	一,五二	?	六,九七	?	元	?	四,五六八

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 蠶蛆驅除ノ狀況

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 法令違反者

二百九十四

四		〇	
蠶病豫防法第三條	〔蠶蛆ノ豫防施設ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	參圓
同	同	微罪	—
同	同	不詳	—
蠶病豫防法第三條	〔蠶蛆豫防ノ施設ヲ爲サス且ツ生繭採取ノ届出ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	五圓
同施行規則第二條	〔繭採取ノ届出ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	參圓
同	同	罰金	貳圓
同	同	微罪	—
蠶病豫防法第三條	〔蠶蛆豫防ノ施設ヲ爲サス且ツ生繭採取ノ届出ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	七圓
同施行規則第八條	〔繭運搬ノ容器不完全ナルニ依ル〕	罰金	五圓
同	同	證據不充	分
同	同	不詳	—
蠶病豫防法施行規則第二條	〔生繭採取ノ届出ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	貳圓
蠶病豫防法第十三條	〔検査合格ノ證明ナキ蠶種ノ讓渡ヲ爲シタルニ依ル〕	罰金	參拾圓
蠶病豫防法第三條	〔蠶蛆ノ豫防施設ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	四圓
蠶病豫防法第三條	〔生繭採取者ニシテ死亡、廢業又ハ事項變更ノ場合其届出ヲ怠リ且ツ〕	罰金	四圓
計			二六
			一
			一
			一
			二
			一
			五
			一
			一
			一
			三
			一

四

四		一	
及第七條	〔蠶蛆豫防ノ施設不充ナリシニヨリ〕	罰金	七圓
同	同	罰金	五圓
同	同	證據不充	分
蠶病豫防法第三條	〔蠶蛆豫防ノ施設ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	貳圓
同施行規則第八條	〔繭運搬ノ容器不完全ナルニ依ル〕	罰金	四圓
同	同	罰金	四圓
蠶病豫防法第二條	〔蠶種製造者ニアラスシテ蠶種ノ製造ヲナシ他人ニ讓渡シタルニ依ル〕	罰金	五圓
蠶病豫防法第三條	〔蠶蛆ノ豫防施設ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	參圓
同	同	罰金	貳圓
同	同	證據不充	分
蠶病豫防法第三條	〔生繭採取ノ届出ヲ怠リ且ツ蠶蛆同施行規則第二條〕	罰金	五圓
同	〔豫防ノ施設ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	參圓
蠶病豫防法第三條	〔蠶蛆豫防ノ施設ヲ爲サス且ツ生繭採取ノ届出ヲ爲サ、ルニ依ル〕	罰金	拾圓
同	〔繭運搬ノ容器不完全ナルニ依ル〕	罰金	六圓
同	同	罰金	六圓
計			一六
			三
			一
			一
			一
			八
			一

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 法令違反者

二百九十五

自家用蠶種ノ取締

▲取締ノ狀況、 明治三十五年一月縣令第一號ヲ以テ自家用蠶種取締規則ヲ公布シ、次テ同三十九年十二月縣令第九十三號ヲ以テ更ニ之ヲ改正シテ取締ノ完備ヲ期セリ、今該規則ニ制定セラレタル條文ノ要項ヲ掲クレハ。

- 一、自家用蠶種ヲ製造セムトスル者ハ、毎年二月十五日迄ニ製造豫定届ヲ知事ニ差出スヘシ。
- 一、自家用蠶種製造者死亡、中途廢業又ハ届出事項變更等ノ場合ハ其旨知事ニ届出ツヘシ。
- 一、蠶種ノ製造ニ先キ臺紙ノ表面ニ化学性、化期、名稱及自家用蠶種ノ文字、表面若ハ裏面ニ製造者ノ住所氏名及産卵年月日ヲ記入スヘシ。
- 一、蠶種ノ製造終リタルトキハ、三日以内ニ製造届ヲ所轄蠶病豫防事務所ニ差出スヘシ。
- 一、自家用蠶種ノ製造ニ供シタル掃殺及出殻繭ハ、製造後六十日間其製造所以外ニ搬出スルコトヲ得ス。
- 一、知事ハ官吏若ハ吏員ヲ派遣シ其狀況ヲ臨檢セシム。
- 一、越年框製蠶種ニ在リテハ母蛾ノ検査ヲ受クヘシ。
- 一、普通製ニ在リテハ病毒存在ノ疑アリト認ムルモノハ、卵ノ顯微鏡検査ヲ行フコトアルヘシ。
- 一、豫定届及死亡、中途廢止、變更ノ届出ヲ怠リタル者、臺紙ノ記載ヲ偽サ、ル者、官吏、吏員ノ臨檢ヲ拒ミタル者ハ、一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス。

尙官吏、吏員ノ臨檢ハ養蠶期中又ハ産卵後ニ於テシ、框製蠶種ノ製造ハ原種用蠶種ノ製造法ニ準セシメ、蠶病豫防事務所ニ於テ母蛾ノ検査ヲ施行セリ、而ルニ製造枚數ハ年々逐テ増加シ成績亦次第ニ良好ニ進ミシカ、明治四十五年蠶絲業法ノ施行ト共ニ自家用蠶種ノ製造地ヲ限定セラル、ニ及ヒテ該規則ヲ廢止セリ。

▲蠶種製造成績、 取締規則制定後各年ニ於ケル製造者數、製造枚數並病毒歩合左ノ如シ。

年 度	製 造 戸 數	框 製 製 造 枚 數	普 通 製 製 造 枚 數	框 製 有 毒 歩 合
明治三十五年	一、二二戸	五四、二四	二、三六枚	檢 査 行 ハ ス
三 六	一、〇六	六〇、七九	一、九五	同
三 七	九〇	六七、二五	一、五三	同
三 八	八九	九三、三七	一、三六	同
三 九	一、〇四	一四、四九	一、〇四	同
四 〇	一、〇七	二五、二六	一、〇九	對
四 一	一、三五	四二、二九	一、二四	一、三三
四 二	一、四七	五五、四五	一、四一	一、二四
四 三	一、〇〇	六八、四〇	一、五八	〇、八五
四 四	一、〇三	六五、九四	一、六三	〇、五八

「フォルマリン」ノ檢定

▲蠶病消毒ノ普及ニ從ヒ「フォルマリン」ノ需用漸次多キヲ加フルト共ニ、坊間粗製品ノ流布亦少ナカラサルヲ以テ明治四十年九月「フォルマリン」檢定規程ヲ設ケ、各種組合及當業者ノ依頼ニ應シ縣廳ニ於テ之カ檢定ヲ行ヒ専ラ良品ヲ使用セシムルノ途ヲ講セリ、該規程ノ要項左ノ如シ。

- 一、蠶病消毒用「フォルマリン」ノ檢定ハ依頼ニ依リ本廳ニ於テ之ヲ行フ、但シ檢定料ハ徵收セス。
- 一、檢定ヲ依頼セムトスル者ハ、蠶種同業組合、蠶絲業組合、蠶絲同業組合、農會、蠶病豫防組合、稚蠶共同飼育組合又ハ「フォルマリ

◎第十項蠶病豫防ニ關スル事項 講習並講話會

「共同購入者ナルコトヲ要ス、但シ十基以上購入スル者ニ在リテハ個人ヨリ依頼スルコトヲ得。
一、檢定ヲ受ケムトスル者ハ依頼書ニ供試品ヲ添ヘ檢定期日三十日前ニ差出スヘシ、供試品ハ能ク振盪シ五勺ヲ採リ之ヲ豫メ清淨ニシテ乾燥シタル壘ニ入レ、封蠟ヲ以テ密閉スルコトヲ要ス。
一、檢定ヲ終了シタルトキハ其成績書ヲ依頼者ニ交付ス。

明治四十四年度ニ於テ檢定ヲ行ヒタル件數ハ四十八件ニシテ其蟻酸「アルデヒド」含有量ハ三三、五七乃至三八、五六ニ及ヒ含有物著シク少クシテ不良品ト認ムルモノハ數件ニ過キサリシ。

講習並講話會

▲蠶病豫防講習並講話會、 明治四十年二月縣下各町村ニ各一日間ノ豫定ヲ以テ蠶病豫防吏員ヲ派シ講話會ヲ開催セリ、其ノ概況左ノ如シ。

郡市	町	村	數	開會場所數	聽講者數	講師職氏名
賀茂	田方		二三	三四	二、二六三	蠶病豫防吏員 鈴木勝太郎
田東	駿東		二八	二九	二、五八二	同上 石上巖太郎
富士	富士		二九	二七	二、二五八	同上 井出源作
庵原	庵原		一七	三五	一、九〇四	同上 田地川兵三郎
安倍	安倍		六	六	三四二	同上 田中直義
志太	志太		二六	二七	九七八	同上 黒田龜次郎
計			二二	二二	一、一四四	同上 市川和雄

郡市	町	村	數	開會場所數	聽講者數	講師職氏名
榛原	小笠		一六	一八	八五〇	同 伊藤誠太郎
周智	周智		二七	二七	一、九六一	同 古山多三郎
磐田	磐田		七	七	三九六	同 市川和雄
濱名	濱名		四〇	四二	一、一七一	同 飯島善太郎
引佐	引佐		四二	四三	二、五三五	同 岩浪爲治
計			一一	一二	七〇九	同 川島清三郎
			二九四	三二九	一、九〇九三	

尙明治四十一年以降各郡市町村及組合等ノ希望ニ應シテ縣廳若ハ蠶病豫防事務所ヨリ講師ヲ派遣シ、講習講話會ヲ開催シタル箇所數及人員左表ノ如シ。

年度	箇所數	講習生數	箇所數	聽講者數	箇所數	總人員數
明治四一年	三	三五〇名	三	六六四名	三	一〇、一八四名
四二	三	三七五〇	三	六四九六	二	一〇、二四六
四三	三	三、一三〇	三	六、四四四	二	三、九七四
四四	二	六六	二	一、四〇七	一	一、四七六

▲警察官吏ニ對スル講習講話、 明治四十年度以降春季ニ於テ各警察署ニ巡查集會ノ際、吏員等ヲ派シテ蠶蛆ノ習性經過並豫防驅除等ニ關スル講話ヲ爲シ、又四十三年度ヨリハ毎年十月乃至十二月ノ間ニ於テ、本縣巡查教習所ニ開設ノ別科講習會即チ各警察署並警察分署ヨリ成績優良ノ巡查及巡查部長ヲ召集シテ、

特別ノ教育ヲ施ス講習會ニ講師ヲ派遣シテ、蠶蛆驅除其他蠶病豫防上必要ナル智識及蠶病豫防法上緊要ナル條項ニ就キ講習ヲ爲シ、以テ縣下警察官吏ヲシテ蠶病豫防取締上遺漏ナカラシムコトヲ期セリ。

▲小學校講話、前項ト同一ノ目的ヲ以テ、明治四十年度ヨリ縣下各小學校、實業補習學校等ノ生徒ヲシテ、蠶蛆又ハ其蛹ヲ各所屬小學校ニ蒐集セシメ、蠶病豫防吏員巡回ノ際精細之カ調査ヲ行ヒ、同時ニ豫防驅除ニ關スル講話ヲナシタリ。

施行ノ影響

▲蠶種製造業ニ及ホシタル影響、舊蠶種検査法時代ニ在リテハ、主ニ微粒子病ノ驅除豫防ニ限ラレタリシモ、本法公布セララル、ニ及ヒテ或ハ消毒法ノ施行ニ、或ハ蠶蛆ノ驅除豫防ニ其他各般ノ手續上ニ於テ一新セラレタリシカハ、蠶種製造家ニ多大ノ裨益ヲ與ヘタルト同時ニ一面粗製濫造ノ弊漸ク改マルニ至レリ、即チ種繭用蠶兒ノ蠶量一匁ニ對スル收繭量ハ連年増加シ、而モ種繭出蛆量ハ年ヲ逐フテ減少シツ、アルヲ以テ經濟上利スル所鮮少ナラズ、加フルニ原種ノ病毒歩合ハ毎年大ナル率ヲ以テ遞減シ、爲ニ本縣蠶種ノ名聲頓ニ高マリテ移出額年ト共ニ多キヲ致スニ至レリ、即チ左表數字ノ示ス所ヲ見ハ如何ニ其効果ノ多大ナルカヲ知ルニ足ラム。

年 度	三 八 年	三 九 年	四 〇 年	四 一 年	四 二 年	四 三 年	四 四 年
原種、蠶量一匁ニ對スル收繭量	二七四匁	二八八匁	二九一匁	二九九匁	三〇七匁	三〇〇匁	三〇三匁

種繭出蛆歩合	原種病毒歩合	三 八 年	三 九 年	四 〇 年	四 一 年	四 二 年	四 三 年	四 四 年
種繭出蛆歩合	原種病毒歩合	〇・九三	〇・四九	〇・七九	〇・六四	〇・五三	〇・四九	〇・二九
種繭出蛆歩合	原種病毒歩合	〇・三三	〇・二九	〇・三三	〇・三三	〇・六九	〇・四九	〇・四〇

▲養蠶業ニ及ホシタル影響、之カ影響トシテ特ニ顯著ナルヲ見ルハ、本法施行以來一般ニ蠶病消毒ノ勵行セラル、ニ至リタル一事ニシテ、又之ト同時ニ養蠶家ノ多クハ原種用蠶種ヲ飼育スルニ至リタル結果、收繭漸ク多キヲ加ヘ殊ニ夏秋蠶ニ於テハ年々失敗ノ聲ヲ絶タサリシモ、近年大ニ其度ヲ減スルニ至リタルハ蓋斯業上ノ一進歩ト謂フヘシ。

▲生絲製造業、繭賣買業並殺蛹乾繭業ニ及ホシタル影響、本法施行以前ノ状態ニ於テハ之等關係業者ハ蠶蛆ノ豫防驅除ヲ等閑ニ付シ去リ、養蠶業者モ亦是ニ注意スルモノ尠ナカリシヲ以テ、蠶蛆ハ逐年繁殖蔓延シテ多大ノ損害ヲ與ヘタリシモ、爾來此カ取締ヲ爲スニ至リシ結果、生繭取扱場所ニ又生繭運搬上ニ多クノ注意ヲ拂フニ至リタレハ、漸々被害ノ程度ヲ輕減スルノ現象ヲ呈シ、從テ繰絲上、賣買上將タ殺蛹乾繭上ニ及ホス効果少ナカラサルニ至レリ。

蠶病豫防事務職員

施行以來各年度ニ於ケル監督官、蠶病豫防吏員並書記ノ氏名ヲ掲クレハ左ノ如シ。

明治三十八年度

蠶病豫防員	日高	要吉	同	井上	匡	書記	增田重三郎
-------	----	----	---	----	---	----	-------

明治四十二年

勤務所名	官職氏名	官職氏名	官職氏名
内務部	技師 生方五郎 技手 太田兵太郎 書記 阿部保太郎	技手 飯島善太郎 書記 大庭鍊太郎	技手 飯島善太郎 書記 大庭鍊太郎
下田蠶病豫防事務所	蠶病豫防員 井出源作 蠶病豫防員 倉田きやう 蠶病豫防員 原田くま	蠶病豫防員 稻垣喜平 蠶病豫防員 倉田きやう 蠶病豫防員 原田くま	蠶病豫防員 井出源作 蠶病豫防員 倉田きやう 蠶病豫防員 原田くま
沼津蠶病豫防事務所	蠶病豫防員 黒田龜次郎 蠶病豫防員 石上巖太郎 蠶病豫防員 山田誠一 蠶病豫防員 杉田吉重 蠶病豫防員 縣田茂太郎 蠶病豫防員 鈴木一丸 蠶病豫防員 立田清巳	蠶病豫防員 鈴木幸一 蠶病豫防員 岡本幸一 蠶病豫防員 増田薫 蠶病豫防員 西尾知多 蠶病豫防員 松本治作 蠶病豫防員 大山恒一郎 蠶病豫防員 敷田萬作	蠶病豫防員 黒田龜次郎 蠶病豫防員 石上巖太郎 蠶病豫防員 山田誠一 蠶病豫防員 杉田吉重 蠶病豫防員 縣田茂太郎 蠶病豫防員 鈴木一丸 蠶病豫防員 立田清巳

事務	蠶病豫防員	蠶病豫防員	蠶病豫防員
見付蠶病豫防事務所	蠶病豫防員 飯田傳太郎 蠶病豫防員 久永貞次郎 蠶病豫防員 榎土義朗	蠶病豫防員 飯田傳太郎 蠶病豫防員 久永貞次郎 蠶病豫防員 榎土義朗	蠶病豫防員 飯田傳太郎 蠶病豫防員 久永貞次郎 蠶病豫防員 榎土義朗
静岡蠶病豫防事務所	蠶病豫防員 伊藤誠太郎 蠶病豫防員 市川和雄 蠶病豫防員 成岡半五郎 蠶病豫防員 鈴木浩一 蠶病豫防員 中村喜次郎 蠶病豫防員 有賀啓次郎	蠶病豫防員 伊藤誠太郎 蠶病豫防員 市川和雄 蠶病豫防員 成岡半五郎 蠶病豫防員 鈴木浩一 蠶病豫防員 中村喜次郎 蠶病豫防員 有賀啓次郎	蠶病豫防員 伊藤誠太郎 蠶病豫防員 市川和雄 蠶病豫防員 成岡半五郎 蠶病豫防員 鈴木浩一 蠶病豫防員 中村喜次郎 蠶病豫防員 有賀啓次郎
見付蠶病豫防事務所	蠶病豫防員 飯田新次郎 蠶病豫防員 田地川兵三郎 蠶病豫防員 川島清三郎 蠶病豫防員 佐原周作 蠶病豫防員 高林由松 蠶病豫防員 大石國雄 蠶病豫防員 桑原百合 蠶病豫防員 永井正夫 蠶病豫防員 野栗壽三郎 蠶病豫防員 内山權次郎	蠶病豫防員 飯田新次郎 蠶病豫防員 田地川兵三郎 蠶病豫防員 川島清三郎 蠶病豫防員 佐原周作 蠶病豫防員 高林由松 蠶病豫防員 大石國雄 蠶病豫防員 桑原百合 蠶病豫防員 永井正夫 蠶病豫防員 野栗壽三郎 蠶病豫防員 内山權次郎	蠶病豫防員 飯田新次郎 蠶病豫防員 田地川兵三郎 蠶病豫防員 川島清三郎 蠶病豫防員 佐原周作 蠶病豫防員 高林由松 蠶病豫防員 大石國雄 蠶病豫防員 桑原百合 蠶病豫防員 永井正夫 蠶病豫防員 野栗壽三郎 蠶病豫防員 内山權次郎
見付蠶病豫防事務所	蠶病豫防員 大塚豊太郎 蠶病豫防員 石垣清一郎 蠶病豫防員 磯部文慶 蠶病豫防員 河合敏 蠶病豫防員 榑木清太郎 蠶病豫防員 廣田敏通 蠶病豫防員 鈴木六郎丸 蠶病豫防員 影山吉惠茂 蠶病豫防員 鈴木文平 蠶病豫防員 大杉伊平	蠶病豫防員 大塚豊太郎 蠶病豫防員 石垣清一郎 蠶病豫防員 磯部文慶 蠶病豫防員 河合敏 蠶病豫防員 榑木清太郎 蠶病豫防員 廣田敏通 蠶病豫防員 鈴木六郎丸 蠶病豫防員 影山吉惠茂 蠶病豫防員 鈴木文平 蠶病豫防員 大杉伊平	蠶病豫防員 大塚豊太郎 蠶病豫防員 石垣清一郎 蠶病豫防員 磯部文慶 蠶病豫防員 河合敏 蠶病豫防員 榑木清太郎 蠶病豫防員 廣田敏通 蠶病豫防員 鈴木六郎丸 蠶病豫防員 影山吉惠茂 蠶病豫防員 鈴木文平 蠶病豫防員 大杉伊平
見付蠶病豫防事務所	蠶病豫防員 山崎慶三 蠶病豫防員 伊藤榮吉 蠶病豫防員 針谷仗 蠶病豫防員 渡邊きく 蠶病豫防員 伊藤りさ 蠶病豫防員 高田ひさ 蠶病豫防員 鈴木さ 蠶病豫防員 若森はる 蠶病豫防員 安間ちよ 蠶病豫防員 福田はる	蠶病豫防員 山崎慶三 蠶病豫防員 伊藤榮吉 蠶病豫防員 針谷仗 蠶病豫防員 渡邊きく 蠶病豫防員 伊藤りさ 蠶病豫防員 高田ひさ 蠶病豫防員 鈴木さ 蠶病豫防員 若森はる 蠶病豫防員 安間ちよ 蠶病豫防員 福田はる	蠶病豫防員 山崎慶三 蠶病豫防員 伊藤榮吉 蠶病豫防員 針谷仗 蠶病豫防員 渡邊きく 蠶病豫防員 伊藤りさ 蠶病豫防員 高田ひさ 蠶病豫防員 鈴木さ 蠶病豫防員 若森はる 蠶病豫防員 安間ちよ 蠶病豫防員 福田はる
見付蠶病豫防事務所	蠶病豫防員 中島しう 蠶病豫防員 芹澤善道 蠶病豫防員 内田順助	蠶病豫防員 中島しう 蠶病豫防員 芹澤善道 蠶病豫防員 内田順助	蠶病豫防員 中島しう 蠶病豫防員 芹澤善道 蠶病豫防員 内田順助

濱松蠶病豫防事務所		吉津支所		濱松蠶病豫防事務所		濱松蠶病豫防事務所	
勤務所名	官職	氏名	官職	氏名	官職	氏名	官職
蠶病豫防員	同	大場 滿	蠶病豫防員	同	安田 與一	蠶病豫防員	同
同	同	石原 嬌一	同	安田 未太郎	同	同	同
同	同	渡瀬 賢一	同	牧野 豊次	同	同	同
同	同	加藤 與作	同	山本 三郎	同	同	同
同	同	岡部 治郎	同	窪野 淺一郎	同	同	同
同	同	牧野 常次郎	同	豊田 清一郎	同	同	同
同	同	松野 彌吉	同	田内 仁平	同	同	同
同	同	今泉 繁	同	朝倉 友一	同	同	同
同	同	鈴木 啓次郎	同	河邊 算三	同	同	同
蠶病豫防員	同	榎谷 鹿藏	蠶病豫防員	同	同	同	同
同	同	荒川 嘉郎三	同	鈴木 常三郎	書記	同	同
同	同	河合 末藏	同	石津 郁一	書記	同	同

明治四十三年度

勤務所名	官職	氏名	官職	氏名	官職	氏名
内務部	技師	渡邊 亥八	書記	大庭 銀太郎		
	技手	太田 兵太郎				
		飯島 善太郎				
		同				
		同				

下田蠶病豫防事務所

蠶病豫防員	同	黒田 龜次郎	蠶病豫防員	同	中島 しう
同	同	石上 巖太郎	同	小林 さみ	
同	同	久永 貞次郎	同	中根 みき	
同	同	鈴木 一丸	同	吉岡 國廣	
同	同	飯田 傳太郎	同	伊藤 のぶ	
同	同	立田 清巳	同	土屋 高次郎	
同	同	桑原 百合	同	中島 長一郎	
同	同	鈴木 七郎	同	河合 敏	
同	同	長谷川 令二	同	清水 三郎	
同	同	内山 啓次郎	同	坪井 豊	
同	同	岡本 幸一郎	同	土屋 照雄	
同	同	杉田 七財茂	同	芹澤 善道	

沼津蠶病豫防事務所

蠶病豫防員	同	黒田 龜次郎	蠶病豫防員	同	中島 しう
同	同	石上 巖太郎	同	小林 さみ	
同	同	久永 貞次郎	同	中根 みき	
同	同	鈴木 一丸	同	吉岡 國廣	
同	同	飯田 傳太郎	同	伊藤 のぶ	
同	同	立田 清巳	同	土屋 高次郎	
同	同	桑原 百合	同	中島 長一郎	
同	同	鈴木 七郎	同	河合 敏	
同	同	長谷川 令二	同	清水 三郎	
同	同	内山 啓次郎	同	坪井 豊	
同	同	岡本 幸一郎	同	土屋 照雄	
同	同	杉田 七財茂	同	芹澤 善道	

第十二項 蠶絲業功績者

縣内ノ蠶絲業者ニシテ功績表彰ヲ受ケタルモノ左ノ如シ。

綠綬褒章拜受者

日本帝國褒章之記

風ニ意ヲ殖産ニ勵マシ管テ蠶業ノ振起セサルヲ慨シ製絲場ヲ建設シテ製絲法ヲ攻究シ郷黨ヲシテ蠶繭ノ利ヲ知ラシメ又有志ヲ結合シテ一社ヲ組織シ資金ヲ募集シ弟勉ミテ族類數十人ヲ率テ北海道ニ移住セシメ途ニ數百町歩ヲ墾拓スルニ至ル即チ實業ヲ精勵シ衆民ノ模範タルヘキモノトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス

明治二十五年十一月十五日

静岡縣伊豆國那賀郡中郷村

依田佐二平

賞勳局總裁正三位勳二等侯爵

西園寺公望

賞勳局副總裁從三位勳一等子爵

大給恒

日本帝國褒章之記

静岡縣伊豆國田方郡函南村

仁田大八郎

夙ニ心ヲ公益ニ注キ産馬會社ヲ創立シ馬匹ノ蕃殖ヲ圖リテ豚牛ニ及ヒ養蠶業ヲ勸誘シテ桑苗ヲ栽植セシメ或ハ魚種ヲ移養シ家禽ヲ改良シ又繭茶品評會、牛馬露市場等ヲ開設シテ多ク私財ヲ抛ツテ一意民業ノ振興ヲ期スル等實業ニ精勵シ衆民ノ模範トス仍テ勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス

明治二十六年二月六日

賞勳局總裁正三位勳二等侯爵

西園寺公望

賞勳局副總裁從三位勳一等子爵

大給恒

藍綬褒章拜受者

日本帝國褒章之記

平生心ヲ公益ニ注キ夙ニ生産會社ヲ創立シ寒天製造蕪茶蠶ノ業ヲ起シ或ハ製絲畜魚牧羊諸場ノ開設ヲ助ケ及力ヲ修路興學濟貧ニ致シ私財ヲ抛ツ少カラス嘗テ久シク里正ノ務ヲ執リ其俸給ヲ損テ以テ居村ノ準備金ニ供スル等公衆ノ利益ヲ與シ成績著明ナリトス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ藍綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス

明治十六年八月四日

静岡縣伊豆國田方郡仁田村

仁田常種

賞勳局總裁正四位勳二等

柳原前光

元考院議官兼賞勳局副總裁正四位勳二等

大給恒

日本帝國褒章之記

静岡縣安倍郡麻機村

織田喜作

資性温厚曾テ戸長村長ノ職ヲ奉シ力ヲ教育勸業土木ニ盡シ殊ニ居村區川ハ毎歲出水ニ際シ破堤ノ害ヲ被ムルヲ憂ヒ護岸工事ヲ起シテ水害ヲ除キ且ツ秣場分割ノ紛議ヲ調停シテ開墾植林ヲ奨励シ最モ心ヲ殖産公益ニ傾ケ郡内各所ニ製茶傳習所ヲ設ケ多クノ教師ヲ養成シテ斯業ノ振作ニ努メ柑橘ノ改良増殖ヲ誘掖シテ多額ノ産出ヲ得以テ地力物産ノ一タレニ至ラシメ裨益ヲ里民ニ與フルコト諒ナカラス依テ明治十四年十二月七日勅定ノ藍綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰セラル

明治四十年十二月二十一日

賞勳局總裁從二位勳一等伯爵

大給恒

◎第十二項蠶絲業功績者 静岡縣桑園品評會表彰者

三百四十

静岡縣桑園品評會表彰者

賞 狀

濱名郡白須賀町 故 山本 庄次郎

夙ニ蠶業ニ志シ率先シテ桑園ノ増殖竝ニ之カ改良ニ盡瘁シ蠶業ノ基礎ヲ確立シタルハ其功勞尠ナシトセス依テ本會ノ規則ニ依リ(物品名)一個ヲ賜ハリ其功績ヲ表彰ス

明治四十三年十一月二日

静岡縣桑園品評會總裁從四位勳三等

石 原 健 三郎

〔以下同断〕

- | | | | |
|---------|----------|----------|-----------|
| 田方郡 川西村 | 故 石橋 正哉 | 引佐郡 西濱名村 | 故 山本 新六 |
| 富士郡 大宮町 | 高瀬 牧太郎 | 静岡市 鷹匠町 | 故 土屋 寛 |
| 引佐郡 中川村 | 後藤 角平 | 田方郡 函南村 | 故 小永井治郎兵衛 |
| 駿東郡 長泉村 | 永井 嘉六郎 | 小笠郡 和岡村 | 原 庄太郎 |
| 志太郡 相川村 | 故 山下 幸五郎 | | |

磐田郡向笠村 鈴木 治平

夙ニ蠶業ニ志シ率先シテ桑園ノ増殖竝ニ之カ改良ニ盡瘁シ蠶業ノ基礎ヲ確立シタルハ其功勞尠ナシトセス依テ本會ノ規則ニ依リ(物品名)一個ヲ賜ハリ其功績ヲ表彰ス

明治四十四年十一月十二日

静岡縣桑園品評會會長

寺 尾 昌 太郎

〔以下同断〕

- | | | | |
|----------|----------|----------|--------|
| 榛原郡 吉田村 | 故 飯塚 孫次郎 | 庵原郡 兩河内村 | 源平 鶴十郎 |
| 濱名郡 知波田村 | 岡部 竹次郎 | | |

静岡縣生絲製造同業組合表彰者

賞 狀

松崎製絲場 依 田 佐 二 平

夙ニ殖産興業ノ志ヲ抱キ明治五年進シテ蠶業ニ從事シ生絲製造ノ方法ヲ研究シ工場ヲ建設シ器械製絲ノ範ヲ示シ工男女數十名ヲ富岡製絲場ニ學ハシメ始メテ新式ノ輸出生絲ヲ製造シ同年從來金屬鍋ヲ土器トナシ躰止ヲ踏止トナスカ如キ新案ヲ施シ爾來三十六年間改良進歩ヲ謀リ以テ今日ニ及ヒタルハ洵ニ本畫器械製絲ノ權輿トス加之百難ヲ排シ銳意事ニ當リ熱心業ニ勤メ専ラ後進ノ誘掖ト斯導ノ發達トナリテ自ラ任シ二十九年同志ト謀リ静岡縣製絲業協會ヲ組織シ又蠶絲業組合ヲ設ケ三十年重要輸出品同業組合法ノ發布ニ當リ本組合ヲ創立シテ後同ヲ重ヌル事五回年ヲ經ルコト十二年組合長ノ任ニ在リ百方經營終始忘ラス製絲技術講習會ヲ開キ共同揚桿ヲ獎勵シ工女競技會ヲ開催シ益々改良ノ緒ニ向ハシメ自ラ共同荷造ヲ下田町ニ設立シ其他大日本蠶絲會静岡支會ノ副會長ヲ囑託セラレ製品トシテハ各所ノ共進會博覽會等ヨリ賞牌賞狀ヲ受領シ近クハ聖路易萬國博覽會ニテ銀牌ヲ受領阿雄米國博覽會ニテ金牌ヲ受領シ曾テ曩ニ衆議院議員トシテ實業ニ貢獻シ曾テ勅定ノ藍綬褒賞ヲ拜受シタルカ如ク公共ノ事業ニ忠實ニシテ職務ニ勤勉ナル其功勞頗ル大ナリ依テ本組合ノ規定ニ基キ茲ニ金杯一個ヲ贈呈シテ其名譽ヲ表彰ス

明治四十三年一月二十七日

静岡縣生絲製造同業組合副組長

伊 藤 仙 太 郎

賞 狀

伊 藤 製絲所 伊 藤 仙 太 郎

縣下蠶絲業ノ振ハサルヲ憂ヒ其發達ニ資セン爲進シテ製絲場ヲ建設シ工女ノ養成ニ勤メ器械ノ完全ナ期シ同業者ノ模範ヲ以テ自ラ任シ明治二十九年同志ト謀リ静岡縣製絲業協會ヲ組織シテ斯業ノ改善ヲ謀リ後本組合ヲ創立シ遠ク海外ニ渡航シ生絲貿易ノ實況ヲ視察シ製絲改善ノ方針ヲ立テ本組合副組長ノ任ニアル茲ニ三十餘年大日本蠶絲會静岡支會評議員其他ノ職務ニ從事シ製品トシテ其精良ナル海外ノ賞賛ヲ博シ每次博覽會共進會ニ於テ賞牌ヲ受ケ近クハ聖路易萬國博覽會阿雄博覽會ニ於テ金牌ヲ受領セラレタルハ偶然ニ非ス洵ニ公共ノ職責ヲ重シ事業ニ熱心ナル其功勞頗ル大ナリ依テ本組合ノ規定ニ基キ茲ニ銀杯一個ヲ贈リ其名譽ヲ表彰ス

◎第十二項蠶絲業功績者

静岡縣生絲製造同業組合表彰者

三百四十一

◎第十二項蠶絲業功績者

静岡縣生絲製造同業組合表彰者

三百四十二

明治四十三年一月二十七日

静岡縣生絲製造同業組合組長

依田 佐二平

賞 狀

井 出 源 策

多年生絲製造ノ方法ヲ研究シ今泉製絲會社ノ事業ヲ經營シ更ニ和田製絲會社ノ社長トナリ本組合ノ役員トシテ其盡シタル功勞多シトナ
ス茲ニ規定ニヨリ賞品一個ヲ贈リ其名譽ヲ表彰ス

明治四十三年一月二十五日

静岡縣生絲製造同業組合組長

依田 佐二平

賞 狀

塚 本 至 作

多年生絲ノ製造ニ從事シ明治二十九年静岡縣製絲業協會設立ニ際シ進ンテ同意者トナリ専心其方法ヲ研究シ工女ノ養成ニ勉メ本組合ノ
役員トシテ其盡シタル功勞多シトス茲ニ規定ノ賞品ヲ贈リ其名譽ヲ表彰ス

賞 狀

久保田 福次郎

多年生絲製造ノ方法ヲ研究シ工女ヲ養成シ進ンテ共同揚桿場設立ニ勉メ教婦ヲ聘シ製法ノ傳習ヲナサシメ更ニ羽二重ノ工場ヲ設ケ其發
達ヲ謀リ共ニ博覽會共進會等ニ出品シテ賞牌ヲ受領シタルハ其製品ノ完全ナルヲ賞スルニ足ル又多年本組合ノ役員トナリ公共ノ事業ニ
從事シ其功勞多シトス茲ニ本組合ノ規定ニヨリ賞品ヲ贈リ其名譽ヲ表彰ス

賞 狀

影 山 邦 信

多年生絲製造ノ方法ヲ研究シ工女ヲ養成シ共同揚桿場ヲ設立シ選マレテ其社長ノ任ニ當リ百方經營其宜シキヲ得益々社員ノ増加ヲ現ハ
シ産額ノ増大ヲ致シ又共進會品評會等ニ出品シテ賞狀賞牌ヲ受領シ本組合ノ役員トシテ其盡シタル功勞多シナカラス茲ニ規定ニ依リ賞品
ヲ贈リ其名譽ヲ表彰ス

賞 狀

山 本 兼 吉

多年生絲ノ製造ニ從事シ其方法ヲ研究シ改良誘掖ニ努メ又乾燥器ヲ發明シ同業者ニ便宜ヲ與ヘ且ツ本組合委員トシテ盡シタル功勞多
カラス茲ニ規定ノ賞品ヲ贈リ其名譽ヲ表彰ス

賞 狀

阿多古製絲合資會社代表者 林 才 一 郎

多年生絲ノ製造ニ從事シ其方法ヲ研究シ改良誘掖ニ努メ又本組合委員トシテ其盡シタル功勞多シナカラス茲ニ規定ノ賞品ヲ贈リ其名譽
ヲ表彰ス

賞 狀

佐 藤 彌 七

多年生絲ノ製造ニ從事シ其方法ヲ研究シ改良誘掖ニ努メ又本組合委員トシテ其盡シタル功勞多シナカラス茲ニ規定ノ賞品ヲ贈リ其名譽ヲ表
表彰ス

賞 狀

渡 邊 喜 兵 衛

多年生絲ノ製造ニ從事シ其方法ヲ研究シ改良誘掖ニ努メ又本組合委員トシテ其盡シタル功勞多シナカラス茲ニ規定ノ賞品ヲ贈リ其名譽ヲ表
彰ス

賞 狀

壺 川 辰 次 郎

多年生絲ノ製造ニ從事シ工女ノ養成ニ勤メ共同揚桿場ノ設置ニ關シ同志ト謀リ之ヲ完成シ駿陽社ヲ創立シ其社長トナリ能ク數工場ヲ統
督シ又本組合ノ委員トシテ盡事セラレタルノ功勞多シナカラス茲ニ規定ノ賞品ヲ贈リ其名譽ヲ表彰ス

賞 狀

◎第十二項蠶絲業功績者

静岡縣生絲製造同業組合表彰者

三百四十三